

ERINA REPORT

ECONOMIC RESEARCH INSTITUTE FOR NORTHEAST ASIA

ERINA REPORT 109

特集：中国における地域発展戦略の動向とその実態

Special Feature: The Directions for Regional Development Strategies in China and the Actual Situation Thereof

■生態文明的な地域経済協調発展戦略—その背景、内容及び政策動向 張可雲

The Ecological Civilization Regional Economic Coordinated Development Strategy: The background, content and policy direction thereof ZHANG, Keyun

■中国が大量の地域発展計画を策定する要因と実施上の問題点 呉昊、馬琳

The Factors in China's Formulating of the Large Number of Regional Development Plans and the Problem Points in Implementing Them (Summary) WU, Hao and MA, Lin

■胡錦濤政権における地域協調発展戦略は成功したのか？ 岡本信広

Has the Regional Coordinated Development Strategy of the Hu Jintao Administration Been Successful? (Summary) OKAMOTO, Nobuhiro

■中国における地域発展戦略の策定プロセス—黒龍江省の事例 笮志剛

The Process of Formulating Regional Development Strategies in China: The case example of Heilongjiang Province (Summary) DA, Zhigang

Special Feature: Latest Developments in the Mongolian Economy

特集：モンゴル経済の最新情勢

■Mongolia's Mining-Based Development and Trade Policy N. Batnasan

鉱業を基盤としたモンゴルの開発・貿易政策（要約） N. バタナサン

■A Productivity Analysis of Mongolia's Mining and Quarrying Industry A. Demberel

モンゴルの採掘・採石業の生産性分析（要約） A. デンベレル

■A Proposal for Establishing the Northeast Asian Coal Association Ch. Oyunjargal

北東アジア石炭協会設立への提言（要約） Ch. オユンジャールガル

■Mongolia-DPRK Economic Relations N. Dorjsuren

モンゴルと北朝鮮の経済関係（要約） N. ドルジスレン

■The Population and Economic Activity of Ulaanbaatar Ch. Bayanchimeg and B. Batbayar

ウランバートルの人口と経済活動（要約） Ch. バヤンチメグ、B. バタバヤル

■The Issues and Challenges for the Mongolian Mortgage Market Ts. Enkhbayar

モンゴルにおける抵当市場の諸課題（要約） Ts. エンフバイヤル

■韓国の対中国東北三省の貿易推移と構造的変化—韓中国交樹立20周年を機に— 林珉璟

The Trends in Trade Relations and the Structural Changes between the ROK and China's Northeast (Summary) LIM, Minkyung

2013
JANUARY
No. 109

目 次

特集：中国における地域発展戦略の動向とその実態

Special Feature: The Directions for Regional Development Strategies in China and the Actual Situation Thereof

| | |
|---|----|
| ■特集にあたって..... | 1 |
| ERINA調査研究部研究員 穆堯芋 | |
| On the Special Feature | 3 |
| MU, Yaoqian, Research Fellow, Research Division, ERINA | |
| ■生態文明的な地域経済協調発展戦略—その背景、内容及び政策動向..... | 5 |
| 中国人民大学地域・都市経済研究所教授、国家規画専門家委員会委員 張可雲 | |
| The Ecological Civilization Regional Economic Coordinated Development Strategy: The background, content and policy direction thereof (Summary) | 14 |
| ZHANG, Keyun, Professor, Institute of Regional Economics and Urban Management, Renmin University of China, and State Five-Year Guidelines Specialist Committee Member | |
| ■中国が大量の地域発展規画を策定する要因と実施上の問題点..... | 15 |
| 吉林大学東北アジア研究中心副主任・教授 呉昊 | |
| 吉林大学東北アジア研究院博士課程 馬琳 | |
| The Factors in China's Formulating of the Large Number of Regional Development Plans and the Problem Points in Implementing Them (Summary) | 22 |
| WU, Hao, Vice-Director and Professor, Center for Northeast Asian Studies of Jilin University | |
| MA, Lin, Ph.D. Student, Northeast Asian Studies Academy of Jilin University | |
| ■胡錦濤政権における地域協調発展戦略は成功したのか？..... | 23 |
| 大東文化大学国際関係学部准教授 岡本信広 | |
| Has the Regional Coordinated Development Strategy of the Hu Jintao Administration Been Successful? (Summary) | 32 |
| OKAMOTO, Nobuhiro, Associate Professor, Department of International Relations, Daito Bunka University | |
| ■中国における地域発展戦略の策定プロセス—黒龍江省の事例..... | 33 |
| 黒龍江省社会科学院北東アジア研究所長、研究員 笄志剛 | |
| The Process of Formulating Regional Development Strategies in China: The case example of Heilongjiang Province (Summary) | 40 |
| DA, Zhigang, Director and Professor, Northeast Asia Research Institute, Heilongjiang Provincial Academy of Social Sciences | |

Special Feature: Latest Developments in the Mongolian Economy

特集：モンゴル経済の最新情勢

| | |
|--|----|
| ■On the Special Feature | 41 |
| Sh. Enkhbayar, Senior Research Fellow, Research Division, ERINA | |
| 特集にあたって..... | 42 |
| ERINA 調査研究部主任研究員 Sh. エンクバヤル | |
| ■Mongolia's Mining-Based Development and Trade Policy | 43 |
| N. Batnasan, School of Economic Studies, National University of Mongolia | |
| 鉱業を基盤としたモンゴルの開発・貿易政策（要約）..... | 49 |
| モンゴル国立大学経済学部教授 N. バタナサン | |



| | |
|---|----|
| ■ A Productivity Analysis of Mongolia's Mining and Quarrying Industry..... | 50 |
| A. Demberel, Senior Advisor, National Statistical Office of Mongolia | |
| モンゴルの採掘・採石業の生産性分析（要約）..... | 53 |
| モンゴル国家統計局上級アドバイザー A. デンベレル | |
| ■ A Proposal for Establishing the Northeast Asian Coal Association | 54 |
| Ch. Oyunjargal, Researcher, Institute for Strategic Studies, Mongolia | |
| 北東アジア石炭協会設立への提言（要約）..... | 57 |
| モンゴル戦略研究所研究員 Ch. オユンジャルガル | |
| ■ Mongolia-DPRK Economic Relations | 58 |
| N. Dorjsuren, Chief of the Center for International Security Studies, Institute for Strategic Studies, Mongolia | |
| モンゴルと北朝鮮の経済関係（要約）..... | 61 |
| モンゴル戦略研究所国際安全保障研究センター長 N. ドルジスレン | |
| ■ The Population and Economic Activity of Ulaanbaatar | 62 |
| Ch. Bayanchimeg, Head, Statistics Department of Ulaanbaatar | |
| B. Batbayar, Chief, Division of Economic Statistics, Statistics Department of Ulaanbaatar | |
| ウランバートルの人口と経済活動（要約）..... | 68 |
| ウランバートル統計局長 Ch. バヤンチメグ | |
| ウランバートル統計局経済統計部長 B. バタバヤル | |
| ■ The Issues and Challenges for the Mongolian Mortgage Market..... | 69 |
| Ts. Enkhbayar, CEO, Mongolian Mortgage Corporation LLC | |
| モンゴルにおける抵当市場の諸課題（要約）..... | 72 |
| モンゴル抵当会社最高経営責任者 Ts. エンフバヤル | |

| | |
|---|----|
| ■ 韓国の対中国東北三省の貿易推移と構造的変化—韓中国交樹立20周年を機に—..... | 73 |
| 韓国対外経済政策研究院（KIEP）中国地域研究グループ研究員 林珉璟 | |
| The Trends in Trade Relations and the Structural Changes between the ROK and China's Northeast (Summary) | 80 |
| LIM, Minkyung, Researcher, China Regional and Provincial Research Group, Center for Regional Economic Studies, The Korea Institute for International Economic Policy (KIEP) | |
| ■ 会議・視察報告 | |
| ◎ 第13回大図們江イニシアチブ（GTI）諮問委員会..... | 81 |
| ERINA調査研究部主任研究員 新井洋史 | |
| ■ 北東アジア動向分析..... | 83 |
| ■ 研究所だより..... | 88 |



特集にあたって

特集：中国における地域発展戦略の動向とその実態

ERINA 調査研究部研究員 穆堯芋

本特集は、2012年1月発行の103号に引き続き、中国における地域発展戦略の動向と実態を検討する。103号では地域別で検討したが（黒龍江省、吉林省、遼寧省）、今回は分野別に考察する。具体的には、地域発展戦略の展開の経緯と最新動向、政策的な枠組みと実施の問題点、地域協調発展戦略の効果、発展戦略の策定プロセスの面からアプローチする内容である。本特集は中国と日本の専門家から4本の論文を寄稿いただき、それぞれ異なる視点から分析を行い、新たな知見を提供している。以下、その内容を簡潔に紹介する。

まず、張可雲論文「生態文明的な地域経済協調発展戦略－その背景、内容及び政策動向」は、中華人民共和国建国（1949年）から現在までの地域発展戦略の展開に関する既存の議論を整理したうえで、それを6段階に分ける新しい区分法を提起した。すなわち、「内陸建設戦略」、「三線建設戦略」、「戦略調整」、「沿海地域発展戦略」、「地域経済協調発展戦略」、「生態文明的な地域経済協調発展戦略」である。「生態文明的な地域経済協調発展戦略」の提起は同論文の特徴であり、その内容を詳しく考察した。日本語に定訳のない「生態文明」（ecological civilization）とは、人類が自然を利用すると同時にそれを保護し、人間と自然の関係を積極的に改善する過程に生み出された物質的・精神的・制度的な成果を指す。「生態文明的な地域経済協調発展戦略」は、既存の地域政策における「効率」か「公平」かの研究枠組みを超え、生態バランスの維持を重要視し、それに関連する政治的・文化的要素も取り入れる融合的な地域発展戦略である。地域開発による深刻な環境破壊が続くなか、中国政府は、生態バランスの保持を地域発展戦略の重要な目標として取り入れる政策展開を迎えている。張論文はこの点に着目し、地域発展戦略をめぐる最新の理念と政策動向を明らかにした。

次に、呉昊、馬琳論文「中国が大量の地域発展計画を策定する要因と実施上の問題点」は、現行の中国の地域発展戦略を「国家戦略型地域発展計画」、「重点・代表的地域の総合開発計画」、「国家級『新特区』改革発展計画」、「特定機能地域特定分野の開発計画」、「各レベルの地方政府が策定する地域発展計画または関連政策文書」の5パターンに分類した。煩雑で数多い地域発展戦略に対し、その政策的

な枠組みを初めて明確に整理した研究である。また、地域発展戦略には、施行の拘束力の不足、財政面での保障の欠如、地方政府の機会主義傾向、異なる地域発展計画の間の矛盾、地域住民との利益の衝突など多くの問題点が存在しているため、地域発展戦略に描かれた美しい未来は必ずしも実現できるものではないと鋭く指摘した。最後に、中国の地域経済研究は、各地域の立地条件、自然資源、文化環境、人口状況、産業基盤などの基本的要素に対する分析に重点を置くべきであるほか、地方政府の特有の行動様式も考慮する必要があると主張した。

第3に、岡本信広論文「胡錦濤政権における地域協調発展戦略は成功したのか」は、計量分析の手法を用いて地域発展戦略の有効性を検証し、興味深い結論を導いた。①胡錦濤政権の地域協調発展戦略の施行により、西部地域の成長が促進され、4大地域間（沿海、東北、中部、西部）の地域間格差が縮小した。②国家の政策が反映しやすい国有企業の固定資本投資は、沿海から内陸へ移動したが、投資効率が悪いという課題が残っている。③投資が内陸部に移動しているにもかかわらず、内陸部の雇用が上昇していない。2005年以降の格差縮小は投資主導で成し遂げられ、内陸部の発展は「雇用なき成長」であった。④投資を内陸部に転移した結果、所得再分配効果が得られたが、沿海主導の投資が行われていれば、2000年から2010年の間に中国全土で7兆9千億元のGDPが生み出されたはずであった。公平性を追求した結果、中国全土の経済発展の効率性は犠牲にされ、胡錦濤政権の地域協調発展戦略は「公平重視」の発展戦略であると指摘した。これは後述の「効率重視」への変化に結び付いていると考えられる。

第4に、笄志剛論文「中国における地域発展戦略の策定プロセス－黒龍江省の事例」は、地域発展戦略の策定メカニズムを解明し、その策定に関わる政府、シンクタンク、企業、マスコミ・公衆の役割を分析した重要な研究である。黒龍江省における地域発展戦略の策定は、黒龍江省の現実的・中長期的課題の解決を図るために政府・シンクタンク・企業の知恵を最大限に活かした点について評価できる。しかし、問題点も山積している。例えば、地方政府の行政トップの人事異動は地域発展戦略の安定性にマイナスの影響を与えかねない。また、地域発展戦略の策定に関与する研究

者は政府系シンクタンクに所属するものが多く、学問的に見て独立性が低い。企業は地域発展戦略の施行による直接的な補助金の給付を重視している傾向がある。民間シンクタンクの育成は急務となっている。

上記の張論文では、地域発展戦略の分析は「効率」か「公平」かの枠組みを超えるべきだと主張したが、戦後日本の地域政策は、まさにこの両者の間を行ったり来たりしてきた。あらためてこの視点から中国の地域発展戦略を観察してみると、新しいものが見えてくる。すなわち、中国の地域発展戦略は「公平重視」から再び「効率重視」に転じつつあるのではないかということである。2000年代後半から、地方主導の地域発展戦略が頻繁に策定・施行されるようになり、地域間の経済格差はこれによりさらに拡大する可能

性がある。なぜなら各地方政府の財政規模、人材備蓄状況、発展戦略の策定・施行能力は大きく相違しているからである。また、2008年から2012年まで、中央政府が承認した19件の省レベル地域発展戦略の大半は先進地域の東部に集中しているため、地域格差を是正するための発展戦略とは言えなくなっている。岡本論文は、胡錦濤政権の地域協調発展戦略が公平性を追求し、経済発展の効率性が犠牲にされたと指摘したが、その犠牲を次第に容認できなくなった東部地域は、中央政府の支援を得て更なる発展を求めようになると考えられる。そうなれば、中国の地域発展戦略は全体で再び「効率重視」に戻ることになる。今後中央政府の政策展開を注目していきたい。

On the Special Feature

Special Feature: The Directions for Regional Development Strategies in China and the Actual Situation Thereof

MU, Yaoqian

Research Fellow, Research Division, ERINA

In this special feature, continuing on from ERINA Report No. 103 which was published in January 2012, we examine the directions and actual situation for regional development strategies in China. In ERINA Report No. 103 we made examination by region (Heilongjiang, Jilin, and Liaoning provinces), but this time around we consider the subject by sector. More specifically, this special feature covers approaches from the aspects of: the background to the evolution of regional development strategies and the latest directions; policy frameworks and the problem points for implementation; the effect of the Regional Coordinated Development Strategy; and the formulation process of development strategies. For this special feature we received four papers from Chinese and Japanese experts and they have carried out analysis from their respective different viewpoints, and offered new insights. Below I shall briefly introduce the content of the papers.

First, Zhang Keyun, in his paper "The Ecological Civilization Regional Economic Coordinated Development Strategy: The background, content and policy direction thereof", in addition to summarizing the existing discussion on the evolution of regional development strategy from the founding of the People's Republic of China (1949) to the present, has raised a new method of dividing it up into six stages. That is: the "Construction of the Interior Strategy", the "Third-Line Construction Strategy", "Strategy Adjustment", the "Coastal Development Strategy", the "Regional Economic Coordinated Development Strategy", and the "Ecological Civilization Regional Economic Coordinated Development Strategy". The raising of the "Ecological Civilization Regional Economic Coordinated Development Strategy" is the signature feature of the paper and he has discussed its content in detail. There is no definitive translation of "*Shengtai Wenming* (Ecological Civilization)" in Japanese, but it denotes the material, psychological and systemic outcomes created in the process of actively improving the relationship between human beings and nature, with humanity protecting nature at the same time as utilizing it. The "Ecological Civilization Regional Economic Coordinated Development Strategy", transcending the research framework of "efficiency" or "equity" in the existing regional strategies, places importance on the maintenance of ecological balance, and is a fusional regional development strategy which also incorporates the related political and cultural factors. Amid the continuing serious destruction of the environment via regional development, the Chinese government is approaching an evolution of strategy incorporating the

conservation of ecological balance as the major aim of regional development strategy. Zhang Keyun's paper has focused attention on this and has clarified the very latest concerns and policy direction relating to regional development strategy.

Next, Wu Hao and Ma Lin, in their paper "The Factors in China's Formulating of the Large Number of Regional Development Plans and the Problem Points in Implementing Them", has divided up the current regional development plans in China into the five patterns of: "regional development plans of national strategic importance"; "integrated development plans for key or model regions"; "reform and development plans for national-level economic 'new special zones' "; "development plans for zones with specially designated functions"; and "regional development plans formulated by all levels of local government or the related policy documents". It is research in which he has summarized clearly the complex and numerous regional development strategies, beginning with their policy framework. In addition, because in regional development strategies there exist a large number of problem points, including lack of legally-binding force, a paucity of safeguards on the finance front, the tendency of local governments to pursue publicity, the mismatch among regional development plans, and the clash of rights with local residents, he has sharply point out that the splendid futures depicted in the regional development plans are not necessarily ones that can be realized. Lastly, regarding research into China's regional economies, in addition to having to place importance on the analysis of the basic elements, such as the geographical conditions, natural resources, cultural environment, population status and industrial foundations for each region, he has asserted that it is necessary to also take into consideration the specific modes of action of local governments.

Third, Nobuhiro Okamoto, in his paper "Has the Regional Coordinated Development Strategy of the Hu Jintao Administration Been Successful?", has verified the effectiveness of regional development strategies using a quantitative analysis method, and interesting conclusions have been obtained. 1) Via implementation of the Regional Coordinated Development Strategy of the Hu Jintao administration, growth in Western China was promoted, and the interregional disparities among the four major regions (the East Coast, Northeast China, Central China and Western China) have reduced. 2) The fixed capital investment in state-owned enterprises which readily reflects

national policy has moved inland from the coast, but the issue remains of investment efficiency being poor. 3) In spite of investment moving to the interior, employment in the interior has not risen. The reduction in disparity from 2005 has been accomplished through the lead of investment, and the interior's development was "growth without employment." 4) The effect of income redistribution was obtained as the outcome of investment having moved to the interior, but if coastal-driven investment had been carried out, then GDP of 7.9 trillion yuan should have been created throughout China in the period from 2000 to 2010. He has pointed out that the result of having pursued equity is that the efficiency of economic development throughout the country has been sacrificed, and that the Regional Coordinated Development Strategy of the Hu Jintao administration is a development strategy that has an "emphasis on equity". It can be considered that this is connected to the change to the after-mentioned "emphasis on efficiency".

Fourth, Da Zhigang's paper, "The Process of Formulating Regional Development Strategies in China: The case example of Heilongjiang Province", is important research in which he has elucidated the mechanism of formulation for regional development strategies, and analyzed the roles of government, think tanks, businesses, and the mass media and public involved in their formulation. For the formulation of regional development strategies in Heilongjiang Province it is possible to evaluate the points where the knowledge of government, think tanks, and businesses is put to maximum use to attempt the resolution of the actual and medium- and long-term challenges in Heilongjiang Province. Problem points, however, are also mounting up. For example, the personnel movements of top administrators in local government can have a negative impact on the stability of regional development strategies. Moreover, a great many researchers involved in the formulation of regional development strategies belong to government-affiliated think tanks, and, viewed in academic terms, lack independence. For businesses there is a tendency to place importance on the

benefits from the direct subsidies via the putting into effect of regional development strategies. The fostering of private-sector think tanks is becoming a pressing matter.

In his paper, Zhang Keyun has asserted that for the analysis of regional development strategies one has to transcend the framework of "efficiency" or "equity", yet the regional policies of postwar Japan have certainly gone back and forth between the two. When observing anew China's regional development strategies from this perspective, something new comes into view. That is the matter as to whether China's regional development strategies are continuing to shift from an "emphasis on equity" to an "emphasis on efficiency". From the second half of the 2000s locally-led regional development strategies came to be formulated and implemented on a frequent basis, and there is potential for the economic disparities between regions to expand further via them. This is because the financial scale, the state of reserves in human resource terms and the capability for formulation and implementation of development strategies for local governments vary greatly. Moreover, as the majority of the 19 provincial-level regional development strategies which the central government approved from 2008 to 2012 have been concentrated in the advanced region of eastern China, they cannot be called development strategies for the sake of rectifying regional disparities. In his paper, Nobuhiro Okamoto pointed out that the efficiency of economic development had been sacrificed with the Regional Coordinated Development Strategy of the Hu Jintao administration pursuing equity, but it is thought that the eastern region, which has progressively been growing unable to accept that sacrifice, will request further development by obtaining the support of the central government. If so, then China's regional development strategies in their entirety will go back once again to an "emphasis on efficiency". We would like to continue paying attention to the subsequent development of strategy by the central government.

[Translated by ERINA]

生態文明¹的な地域経済協調発展戦略—その背景、内容及び政策動向

中国人民大学地域・都市経済研究所教授、国家規画専門委員会委員 張可雲

はじめに

地域経済の協調的発展と生態文明の発展は、社会経済が一定の段階に達した後に生まれる新たなニーズである。両者は、互いに影響しながら支えあい、相互に欠かせない存在である。言い換えれば、生態文明の発展は、真の意味での地域間協調的発展を実現するための基礎的条件であると同時に、生態文明の実現には、地域経済の協調的発展なくしては成り立たない。しかし、地域発展戦略において、両者の依存関係を最初から認識したわけではない。地域経済の協調的発展の枠組みに生態文明の要素を取り入れるという新しい視点は、地域戦略が一定の段階に達したからこそ得られるものである。生態文明の視点の導入において、地域経済の協調的発展戦略に対し、どのような内容を追加するかについては、現段階では未だに共通認識には至っておらず、地域戦略の目標を実現するための政策体系は不十分である。

本稿では5つの部分に分けて検討する。第1部では、中国の地域戦略の変遷過程に対する既存の論点を整理する。第2部では、地域戦略の変遷過程に関する筆者の個人的見解を明らかにし、生態文明的な地域経済協調発展戦略の背景を考察する。第3部では、生態文明的な地域発展協調戦略の内容を明らかにする。第4部では、当該戦略の目標を実現するための具体的な政策を検討する。第5部で本稿をまとめる。

1. 中国の地域戦略変遷過程に対する既存の論点

1.1 地域戦略の概念

「発展戦略 (Development Strategy)」という表現は、アメリカの経済学者アルバート・O・ハーシュマン著『経済発展の戦略』で最初に取り上げられたものである。ハーシュマンは、不均衡の連続としての発展という発展プロセスの特徴を指摘し、これは発展戦略を検討・策定する基礎であると主張した。「発展に重大な影響を与えるものとして、所与の資源や生産要素についての最適結合を見つける

よりも、むしろ、隠された、散在している、もしくは利用の拙劣な資源や能力を、発展目的に即応して喚起し協力させることの方が重大である」²。したがって、発展戦略は未来に向けての全体的・基本的な構想又は予想図である。

于光遠は、中国で最初に地域発展戦略を研究した学者である。彼は著書『経済社会発展戦略』の中で、地域発展戦略の研究は、その定義、解決する問題、策定の根拠等を含まなければならないと指摘した³。すべての経済体には発展戦略が存在しており、はっきり見えるものと見えないものがあると主張した。中国の地域発展戦略は数々の変遷を遂げてきたが、それに関する本格的な研究は改革開放以後に始まった。

地域経済発展戦略は、「地域発展戦略」又は「地域戦略」とも言われている。1980年代から、中国の研究者はそれが内包するものについて幅広く議論をしてきた。概念についての記述は完全には一致しないが、将来性を持つ全体的な構想であるという性格については一致している。筆者は、地域戦略とは、「国がマクロ的目標を実現するために策定し、経済・人口・環境等についてどのような空間配置を行うかを確定する、明確な計画又は重点的空間構想である」と定義した⁴。一方、方創琳 (2002) によれば、地域発展戦略とは、地域発展の基礎的条件及び更なる発展の要求や目標に基づいて策定されたハイレベル且つ全体的なマクロ構想である。その核心的な内容は以下のとおりである。すなわち、地域発展の基礎的条件、発展の機運やチャレンジに基づき、一定の期間における戦略目標及びその目標を実現するための思想・方針・重点・プロセス及び対策を確定する。経済、科学技術、社会、人口の発展と資源、環境状況を総合的に検討し、長期的な視点から全体を把握するハイレベル・ハイグレードの科学的な政策手段である⁵。陶良虎 (2009) は、地域経済発展戦略とは、「特定地域における経済発展のための長期的・全体的な構想である」と定義した。すなわち、異なる地域の生産要素の分布状況と当該地域が国の経済体系における地位や役割に基づき、地域

¹ 「生態文明」(ecological civilization) とは、人類が自然を利用すると同時にそれを保護し、人間と自然の関係を積極的に改善する過程に生み出された物質的・精神的・制度的な成果を指す。詳細は張可雲・易毅・張文彬「生態文明取向的区域経済協調発展新内涵」『広東行政学院学報』2012年第2期、77～81ページを参照されたい。

² アルバート・O・ハーシュマン著『経済発展の戦略』(潘照東・曹征海訳) 経済科学出版社、1991年、5ページ。

³ 于光遠『経済社会発展戦略』中国社会科学出版社、1984年、254ページ。

⁴ 張可雲『区域経済政策』商務印書館、2005年、41ページ。

⁵ 方創琳『区域発展戦略論』科学出版社、2002年、24ページ。

の将来の目標・方向・全体的構想を示し、地域経済発展の指導的役割及び経済成長を促す役割を果たすものである。その内容には、経済発展戦略の方針・目標・プロセス・重点・経済の空間的配置・施策等が含まれる⁶。

ここで注意しておきたいのは、地域戦略にはレベルの区分があることである。国レベルの戦略もあれば、地方レベルの戦略もある。一般的には、地域戦略は国レベルのものを指しており、単独の地域又は地方政府レベルの発展戦略を意味するものではない。

1.2 中国の地域戦略の変遷過程

中華人民共和国が成立（1949年）して以来、地域戦略の変遷過程に対する捉え方については様々な議論があり、例えば2段階区分、3段階区分、多段階区分等が挙げられる。

2段階区分法は、中国地域経済研究を始めた初期段階に提示された区分法である。すなわち、改革開放前の均衡発展戦略と、改革開放後の非均衡発展戦略に分けるものである。1990年代より前の分析では、この2段階区分法を採用した研究が極めて多かった。しかし、この2段階区分法の基準は地域戦略の目標であり、具体的な空間的構想ではなかったため、いささか粗末なものであった。

3段階区分法は、2段階区分法を拡張したもので、区分の時期についても2段階区分法に基づいている。例えば、陸大道（2003）は、地域発展戦略の展開過程を1949～1978年、1979～1991年、1992年以後の3段階に分けた⁷。まず、1949～1978年では、生産の均衡配置と地域間格差の縮小を重要視し、国の投資は立ち遅れた地域を重点的に分配した。資源の配分や財政投入ではバラマキ的な地域平均主義方式を取っていた。次に、1979～1991年には、政策の重点を東部地域に移し、沿海部の対外開放、貧困地区への開発支援、民族地区への優遇策を実施した。地域間の格差は拡大し、中部・西部の農村貧困問題が深刻化した。旧工業地域の経済は悪化し続け、地域間の利益衝突と貿易摩擦が絶えず生じていた。1992年以後は全面的な対外開放政策を実施し、国の投資・産業政策を転換して貧困地区への開発支援を強化した。西部大開発戦略を実行し、中部・西部地域への投資が顕著に増加した。しかし、地域間格差は依然として拡

大した。

陸大道の3段階区分と類似する区分法も多く存在している。例えば、聂華林・李泉・楊建国（2006）では、地域経済均衡発展戦略、地域経済非均衡発展戦略、地域経済非均衡・協調発展戦略の3段階に区分している⁸。陳穎琼・陳玉菁（2010）では、1949～1978年は地域均衡発展戦略、1978～1990年代初期は非均衡発展戦略、1995年以後は新時代における国家発展戦略構想が促進する地域協調発展の3段階に分けている⁹。肖春梅・孫久文・葉振宇（2010）によると、1949年から2009年まで、中国の地域経済構造は3回にわたる戦略的調整が行われた。すなわち、1回目は第1次5カ年計画（1953～1957年）及びその直後の三線建設、2回目は改革開放以後の沿海部重視の発展戦略、そして、現在の地域協調発展戦略は、3回目の戦略的調整のきっかけになっている¹⁰。

4段階区分法も、2段階区分法をベースにしてそれを更に拡張したものであり、均衡（又は平衡）発展と非均衡（非平衡）発展を細分化した。例えば、廖丹清（1995）は中国の地域発展戦略を4つの段階に分けた。すなわち、1950年代の地域経済均衡発展戦略、1960年代の未発達地域重視による非均衡発展の是正の戦略、1980年代以後の沿海部の先進地域重視による非均衡発展戦略、そして1990年代以降は非均衡発展戦略を継続するとともに、地域全体発展戦略へ転換する準備を行う段階である¹¹。孫峰華・劉宝琛（2005）は、1950～1977年の地域経済均衡発展段階、1978～1990年の経済効率重視の地域経済非均衡発展段階、1991～1999年の効率・公平重視の地域協調発展段階、2000年以後の公平重視の地域経済発展段階の4段階に分けている¹²。

筆者は、地域発展戦略の時代的背景の視点から、その変遷過程を5段階に区分する研究を発表した¹³。すなわち、内陸建設戦略段階（1949～1964年）、三線建設戦略段階（1965～1972年）、戦略調整段階（1973～1978年）、沿海部発展戦略段階（1979～1991年）及び地域経済協調発展戦略段階（1992年～現在）である。

上述したように、中国地域経済の研究には、地域戦略の本質に対する論争は存在しないが、地域戦略の実践に対する捉え方は様々である。地域発展戦略の変遷過程に対する

⁶ 陶良虎『中国区域経済』研究出版社、2009年、69～70ページ。

⁷ 陸大道『中国区域発展的理論与实践』科学出版社、2003年、109～129ページ。

⁸ 聂華林・李泉・楊建国『發展区域経済学通論』中国社会科学出版社、2006年、695～732ページ。

⁹ 陳穎琼・陳玉菁『中国区域経済發展戰略變遷研究』『中国都市経済』2010年第12期、58～60ページ。

¹⁰ 肖春梅・孫久文・葉振宇『中国区域経済發展戰略的演變』『学習与实践』2010年第7期、5～13ページ。

¹¹ 廖丹清『区域不平衡性研究』『經濟学家』1995年第4期、34～44ページ。

¹² 孫峰華・劉宝琛『中国区域経済發展の杠桿原理与棋局戰略』『經濟地理』2005年第11期、761～767ページ。

¹³ 張可雲『区域經濟政策』商務印書館、2005年、438～491ページ。

区分が研究者によって異なっているのは、区分する基準に相違があるからである。筆者は、地域発展戦略の変遷過程に対する区分として、地域経済発展を取り巻く環境の変化を基準にすべきだと考える。以下では、上述の5段階区分法に基づき、地域発展環境の更なる変化を踏まえ、地域発展戦略に生態文明を取り入れた新たな6段階区分法を検討する。

2. 地域戦略の変遷過程とその背景

20世紀の半ば以降、中国の地域戦略は内外情勢の変化に伴って変わり続けてきた。時期が異なれば地域戦略の重点も相違する。地域発展の背景から分析すると、現在までの地域戦略は6つの段階に区分することができる(図1)。

2.1 第1段階：内陸建設戦略(1949～1964年)

第1段階は、経済回復期(1949～1952年)から経済調整期(1963～1965年)までの期間である。地域発展の重点を内陸部に置いたのは、当時の経済活動と人口分布状況から見れば、極端な地域間のアンバランスが存在していたからである。歪んだ地域分布を是正するために、内陸部に計画的に工業プロジェクトを配置することで、国全体の生産構造を改善し、沿海部と内陸部のバランスを取ろうとしていた。

2.2 第2段階：三線建設戦略(1965～1972年)

第2段階は、第3次5カ年計画(1966～1970年)から第4次5カ年計画(1971～1975年)の前期までの期間である。この時期に、経済建設の重点地域の「戦略的転換」を行った。すなわち、大規模な「三線建設」に全力を注ぎ、生産を西部地域へ集中的に移転・配置させた。その背景として、中国を取り巻く国際環境が悪化し、戦争に備えることが最

重要任務だったことが挙げられる。中国は建国初期ではアメリカとの関係が悪化し、1960年代に入るとソ連とも対立するようになった。「第4次5カ年国民経済綱要」によると、三線地区は四川省、貴州省、雲南省、陝西省、甘粛省、青海省及び河南・湖北・湖南3省の西部、広東省の北部、広西自治区の北西部、山西・河北2省の西部を含む。1965年8月の全国計画会議では次の戦略が策定された。すなわち、「国防建設を最優先とし、三線建設を加速化し、工業の空間的配置を徐々に転換させる」という方針に基づいて、国の投資を内陸部の「大三線」地域に集中させる。各省・自治区の投資をそれぞれの「小三線」(各省・自治区政府の戦略後方)地域に集中させる。

2.3 第3段階：戦略調整(1973～1978年)

第3段階は1973～1978年までの期間であり、地域戦略の調整期間であった。この時期に中国の国際環境は大きく変化した。1971年10月、国連における中国の合法的議席が回復した。1972年のニクソン大統領の中国訪問を機に、中米関係は改善に向けて大きく前進した。対外関係が徐々に改善され、中国をめぐる国際情勢も緩和された。この状況の中で、国防中心の工業配置構造は時代遅れとなり、三線建設の失策及び困難も顕著に現れた。三線建設への過大な投入は、国全体の経済発展に負の影響をもたらし、「文化大革命」は国民経済を崩壊寸前にまで追い込んだ。国家建設は必ず経済効率を考慮しなければならないことがわかった。国の工業配置は市場原理を尊重し、経済発展を促し、国民生活を改善してこそ、社会の安定と発展を促進することができることが認識された。

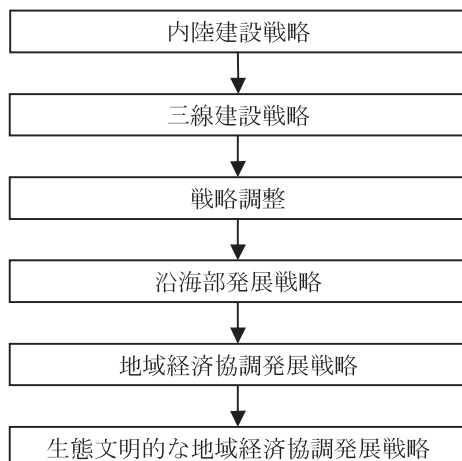
2.4 第4段階：沿海部発展戦略(1979～1991年)

沿海部発展戦略は、「沿海地域経済発展戦略」の略称である。中国が改革開放を実施する前の30年間は、経済が閉鎖状態にあり、社会経済発展は低い水準にあった。貧困から脱却するために、中央政府は改革開放の政策を打ち出した。外国との交流が極めて乏しかったため、比較的立地条件の優れた沿海部を優先的に開放した。沿海部発展戦略の狙いは、沿海地域の優位性を活かし、国際市場に向けての国際取引・国際競争を行い、開放型経済を発展させることであった。

2.5 第5段階：地域経済協調発展戦略(1992～2006年)

1992年、中国は社会主義市場経済の体制を構築するという改革目標を打ち出した。これにより、中央政府は地域協調発展を重視するようになった。

図1 中国の地域戦略の変遷過程



出所：筆者作成

第8次5カ年計画（1991～1995年）は引き続き沿海部の発展を促すと同時に、投資プロジェクトを中部・西部地域に優先的に配分した。国の予算における地域別投資割合をみると、東部沿海地域に比べて中部・西部地域の割合が高かったことが明らかである。

1995年9月に採択された「国民経済・社会発展の第9次5カ年計画及び2010年長期目標の策定に関する中国共産党中央の建議」では、「地域経済の協調的発展を図り、地域間の格差を徐々に縮小させる」方針を打ち出した。その後5カ年計画・規画はすべて地域協調発展を強調するようになった。1999年に発足した西部大開発戦略及び2002年に実施し始めた東北地域等旧工業基地の振興戦略は、いずれも地域協調発展戦略の構成部分である。

2003年10月、中国共産党第16期中央委員会第3回全体会議では、「中共中央の社会主義市場経済体制を完備する若干の問題に関する決定」を採択した。当該決定では、人間本位の堅持、全面・協調・持続可能な発展をキーワードとした「科学発展観」を打ち出した。具体的には、次の5分野の発展を統一的に企画することである。すなわち、都市と農村の発展、各地域の発展、経済と社会の発展、人間と自然の調和の取れた発展、国内の発展と対外開放を統一的に企画することである。また、地域発展の調和の推進と指導強化、西部大開発の促進、中部地域の総合的優位の有効的な活用、中部・西部地区の改革・発展の加速化、東北地域等の旧工業基地の振興、条件が整った東部の一部地域の現代化への実現等が求められた。これは、地域協調発展戦略の具体化を意味する。地域協調発展戦略は、西部開発のみならず、各地域の問題を全面的に考慮し、統一的に企画することを重視する戦略である。この戦略には、立ち遅れた西部地域、衰退した東北旧工業地域及び経済発展から取り残された中部地域が含まれている。

2.6 第6段階：生態文明的な地域経済協調発展戦略（2007年～現在）

2007年の共産党第17期大会では生態文明の概念を提起した。これは、地域経済協調発展戦略に新たな内容が追加されたことを意味する。生態文明と協調的発展の融合は、中国の社会・経済が一定の段階まで発展したときに必然的に生まれたもので、地域間の調和と人間・自然の調和を重要視している。生態文明に最初に言及したのは2003年に提出された「科学発展観」だが、その概念については明確に記

述されなかった。「科学発展観」（2003）と「主体機能区規画」（2005）は、生態文明を提起するための基礎を固めたと言えよう。

生態文明的な地域協調発展戦略を打ち出した背景には、以下の4点が考えられる。①地域問題の増加。国の近代化に伴う地域問題の増加は不可避の現実である。4大戦略区（東部、中部、西部、東北部）のいずれも問題点が山積している。特に、東部地域では経済の膨張による問題が目立っている。②複雑化する地域間の矛盾や利益衝突。地域間の矛盾や利益衝突は、従来から存在している問題である。改革開放してから30年余り、この間における地域経済の衝突は3周期を終えた。すなわち、1980年代、1990年代、2000年代の10年ごとに勃発し、現在は4周期目に突入している。いずれの期間においても、「重複・過剰投資→原料争奪→地域市場の閉鎖→過度な価格競争」の繰り返しであった。このような悪循環は、関係者の利益を損なわせるだけでなく、ほぼすべての社会・経済問題を深刻化させ、国全体の発展を妨げた¹⁴。③緊張する土地と人間の関係。主に資源消費量の激増及び浪費問題の深刻化、環境汚染等を指している。④増強する国全体の経済力。中国経済の高成長は、速くて質の良い地域発展を遂げるための基礎的条件を提供した。2006年における一人当たりGDPは2,000ドルを超え、全国財政総収入は39,373.2億元に達し¹⁵、中国は地域開発を全面的に推進する経済的条件が整った。経済力の増強と経済体制の健全化は、第11次5カ年規画が提起した主体機能区規画と、共産党第17期全国大会で提起された生態文明の推進の基礎を固めた。

以上、生態文明が提起された背景を述べてきた。地域問題の増加、複雑化する地域間の矛盾や利益衝突、緊張する土地と人間の関係は決して近年に生じた問題ではないが、なぜ第11次5カ年規画期間になって生態文明が提起されたのだろうか。これは、中国の経済体制と時代の特徴に関連している。すなわち、第11次5カ年規画期間以前は、中国の市場経済体制はまだ不健全で、地域発展を全面的にコントロールするための制度的環境が整っていなかった。また、改革開放以後、中国の経済力は高まっていたが、全国を範囲とする自然生態環境の改善や修繕、国土開発密度の管理、人口の空間的配置への調整等を行う経済的条件が備わっていなかった。言い換えれば、生態文明と地域協調発展の融合は、現段階における経済発展の要求であり、経済が一定の段階まで拡張した後に取りられるべき合理的な選択である。

¹⁴ 詳細は張可雲「警惕第四輪区域経済衝突」『中華工商時報』2011年6月29日、第7面を参照されたい。

¹⁵ 国家統計局『中国統計年鑑』2007年版より。

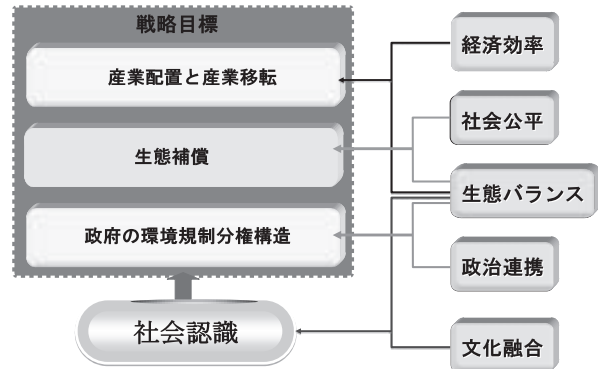
3. 生態文明的な地域協調発展戦略の内容

3.1 生態文明的な地域協調発展戦略の構成要素

生態文明の内容に関する中国国内の研究は1980年代の半ばから始まり、西側諸国に比べて一足早かった¹⁶。筆者(2012)は、生態文明的な地域協調発展戦略の内容について次のように提起している¹⁷。すなわち、生態文明的な地域協調発展戦略の本質は、地域発展における「科学発展観」と「生態文明建設」の根本的な要求であり、経済効率、社会公平、生態バランス、政治連携¹⁸、文化融合¹⁹の5つの要素を統合する地域発展戦略である。この中で、経済効率は地域経済発展の目標であり、地域協調発展の前提である。社会公平、生態バランス、政治連携、文化融合の実現は、地域間の関係を調和するためのものであり、地域経済の協調発展の基盤である。経済効率、社会公平、生態バランスはハード面の制約であり、政治連携、文化融合はソフト面の制約である。ソフト面の制約である政治連携と文化融合については容易に把握できないため、一般的にはハード面の制約が重視される傾向がある。

生態バランスとその他の要素との関係をまとめてみる(図2)。^①生態バランスと経済効率は、産業移転及び産業配置と地域間における資源環境負荷能力の相違との矛盾を反映している。^②生態バランスと社会公平は、生態補償問題に関わっている。^③生態バランスと政治連携は、環境保護をめぐる地域公共管理が直面する課題を反映しているのみならず、政府の環境規制分権構造に及ぶ可能性がある問題である。^④生態バランスと文化融合は、異なる経済発展段階にある地域では、生態文明の推進と地域経済協調発展に対する理解や態度の相違、特に政府の環境規制分権構造、生態補償メカニズム、産業移転における「汚染天国」効果等の問題に対する認識に関わっている。生態バランスとその他の要素との関係をうまく取り扱うには、伝統的な工業文明理念の下にある政府において生態関連機能が経済・社会発展機能に属している現状を改めなければならない。制度・管理・技術の改善により、環境面における政府管理構造の改革、産業移転における「汚染天国」効果の抑制、生

図2 生態文明的な地域協調発展戦略の要素と戦略目標



出所：筆者作成

態補償メカニズムの欠如の解決を推進しなければならない。この3つの問題については後に詳しく検討する。

3.2 生態文明的な地域協調発展戦略の政策枠組み

生態文明的な地域経済協調発展戦略の政策枠組みは、地域発展全体戦略と主体機能区戦略の組み合わせとしてみる事ができる²⁰。

地域発展全体戦略の原型は、2003年の共産党第16期中央委員会第3回全体会議で提起された。同会議では、「地域発展への調整と指導を強化し、西部大開発を積極的に推進し、中部地区の総合的優位を活用し、中部・西部地区における改革開放の加速を支援し、東北地域等旧工業基地の振興を促し、東部地域の一部が率先して現代化の実現に取り組むことを奨励する」方針を打ち出した²¹。2004年、温家宝首相は、政府工作報告で地域発展全体戦略の内容を明らかにした。すなわち、「西部大開発を推進し、東北地域等旧工業基地を振興させ、中部地域の台頭を促進し、東部地域の発展の加速を奨励する」²²。いわゆる「西部開発、東北振興、中部崛起、東部率先発展」である。

主体機能区規画は、2005年の「第11次5カ年規画建議」と2006年の「第11次5カ年規画綱要」において提起された。その後、2010年の「第12次5カ年規画建議」と2011年の「第12次5カ年規画綱要」において地域戦略として格上げされ、

¹⁶ 1980年代の半ばごろ、葉謙吉は「生態文明」という概念を使用し、生態文明の推進を呼びかけた。生態文明の核心的な理念は、「人間と自然の調和・触れ合い、社会と自然の調和・発展」だと強調した(詳細は劉思華『劉思華文集』湖北人民出版社、2009年を参照されたい)。これに対して、アメリカの著名作家ロイ・モリソンは『生態民主』という本の中で、初めて「生態文明(ecological civilization)」の概念を使用した。(Roy Morrison『Ecological Democracy』South End Press, Boston, 1995年)

¹⁷ 張可雲・易毅・張文彬「生態文明取向的区域經濟協調發展新內涵」『廣東行政學院學報』2012年第2期、77～81ページ。

¹⁸ 具体的には、生態文明の推進における中央政府と地方政府との縦の協力、地方政府同士の横の協力を指す。特に、環境規制をめぐる権力配分における中央と地方、地方政府間の連携である。

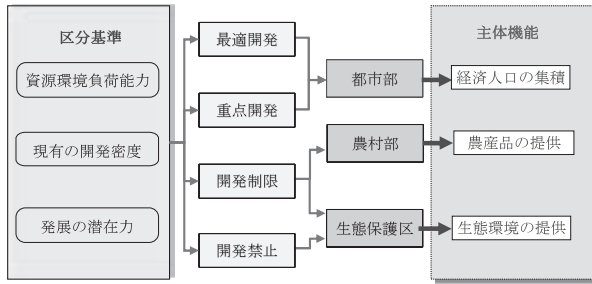
¹⁹ 具体的には、異なる地域、特に経済発展段階の相違する地域の間、生態文明に対する共通の理解の形成である。あるいは、異なる地域文化において、環境意識に関する共通認識の構築である。

²⁰ 地域発展全体戦略と主体機能区戦略の詳細は『中華人民共和國國民經濟・社會發展第12次5カ年規画綱要』を参照されたい。

²¹ 「中共中央の社會主義市場經濟體制を完備する若干の問題に関する決定」(2003年10月14日中国共産党第16期中央委員会第3回全体會議採択)より。

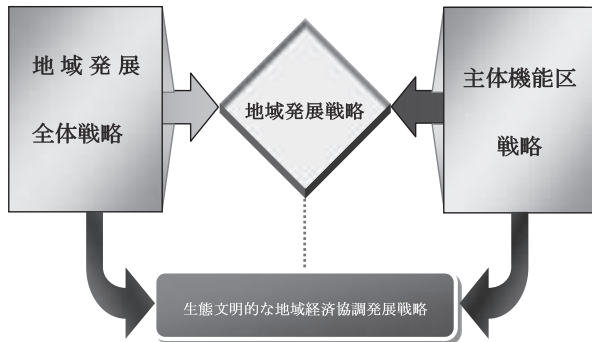
²² 温家宝「2004年政府工作報告」第10期全國人民代表大會第2回會議、2004年3月5日。

図3 主体機能区戦略の内容



出所：筆者作成

図4 生態文明的な地域経済協調発展戦略の内容



出所：筆者作成

2010年末に「全国主体機能区規画」が公表された。

論理上、地域規画と地域戦略は同次元の概念ではない。地域戦略は青写真的なプランであり、地域規画は地域戦略を具体化するツールである²³。したがって、主体機能区規画を戦略に昇格させることには理論的な矛盾が含まれる。この矛盾を解決するために、以下の説明が必要である。いわゆる主体機能区規画は、実質的には単なる地域区画を計画的に定めたものに過ぎないため、その内容から見て一般的な地域規画が求めるレベルまでには達していない。しかし、地域区画は地域管理の基礎であり、地域戦略の基本単位であると同時に、地域規画と地域政策の根拠でもある。厳密に言うと、主体機能区規画は主体機能区区画として見るべきである。このように理解すれば、上述の矛盾が解消される。

2007年に公表された「全国主体機能区規画の作成に関する国务院の意見」では、「全国主体機能区規画は戦略的、基礎的、拘束的規画であり、国民経済・社会発展の全体規画及び人口、地域、都市、土地利用、環境保護、生態建設、流域、水資源、海洋機能区画、海域の利用、穀物の生産、交通、防災等の分野別規画が空間開発と産業配置を行う基

礎的な根拠である」と指摘し、主体機能区の戦略性を明らかにしている。主体機能区規画について、「第11次5カ年規画綱要」では、地域発展全体戦略を実現するための手段と位置づけたが、「第12次5カ年規画建議」と「第12次5カ年規画綱要」では、地域発展全体戦略と横並びにして格上げしている。これは主体機能区戦略に対する認識がより深まったことを意味する²⁴。主体機能区の内容については図3を参照されたい。

上述したように、生態文明的な地域経済協調発展戦略の内容は、次のようにまとめることができる。すなわち、人間と自然の調和の取れた発展に基づき、西部開発、東北振興、中部崛起、東部率先発展を促進すると共に、地域間における明確な主体機能を持つ地域発展を構築することである(図4)。

4. 生態文明的な地域経済協調発展戦略の目標の実現に向けた政策展開

生態文明的な地域経済協調発展戦略の目標を実現するには、地域管理制度の基礎を健全化し、地域政策を改善する必要がある。中国では地域戦略が明確であるが、地域管理をめぐる基礎的制度が健全ではないため、地域政策も十分に完備されていない状況である。

4.1 地域管理をめぐる基礎的制度の不備

筆者は、中国の地域管理制度の基礎に不備があることを指摘し²⁵、その不備について4つの側面からまとめた²⁶。すなわち、①「だれが管理するか」、②「だれを管理するか」、③「どのように管理するか」、④「効果をどのように評価するか」である。

①「だれが管理するか」は、管理部門の設置に関わる問題である。中国国务院には20以上の省庁・委員会がある。その中で、規画機能を担う部門として国家發展改革委員会、住建部(居住・都市農村建設部)、国土資源部、民政部、農業部等が挙げられる。担当部門の数が多く、各部門の機能が重複しているが、明確な地域機能を持つ専門的管理部門は見当たらない。②「だれを管理するか」は、管理対象に関わる問題である。戦略地域(東部、中部、西部、東北部)は明確であるが、規画と政策の対象が明確でない。例えば、国务院が打ち出した「東北地域旧工業基地振興規画」では、東北地域のどの都市が旧工業基地であるかを明確に

²³ 張可雲『区域經濟政策』商務印書館、2005年。

²⁴ 張可雲「主体機能区規画：人与自然和諧的思考」『中華工商時報』2011年6月1日第7面。

²⁵ 張可雲『区域大戦与区域經濟關係』民主与建設出版社、2001年、516～519ページ。

²⁶ 張可雲「区域規画目前存在的問題与未来方向」『中国經濟報告』、2010年第5期、107ページ。

していない。東北地域全体が旧工業基地であることは不可能であろう。③「どのように管理するか」は、管理手段と管理プロセスに関わる問題である。地域管理の手段は規画と政策であるが、実行可能な規画には政策の支えが必要である。また、規画と政策は合理的な管理プロセスに従わなければならない。改革開放以来、多くの法律が策定されたが、その執行プロセスが不明確であったため、厳格に執行されてこなかったものも多い。「上に政策があれば、下に対策がある」というように、中央政府の政策が地方レベルまで徹底されないこともある。④「効果をどのように評価するか」は、監督・評価メカニズムを通じて規画の効果を考察することである。中央政府は多くの規画や政策を策定してきたが、合理的な監督・評価メカニズムを確定しておらず、その実施の効果についてはほとんど評価してこなかったのが現状である。したがって、生態文明的な地域経済協同発展戦略の目標を着実に達成するには、地域管理制度の基礎を完備しなければならない。すなわち、「だれが管理するか」、「だれを管理するか」、「どのように管理するか」、「効果をどのように評価するか」の4点を明確にするべきである。

4.2 地域政策の改善

地域管理をめぐる基礎的制度を健全化すると同時に、将来の地域政策では以下の3点に力を入れる必要がある。すなわち、問題地域の政策の明確化、主体機能区の政策の具体化及び両者の調和である。

まず、問題地域の政策を明確にするためには、問題地域の範囲を確定しなければならない。具体的には、①後進地域、衰退地域と膨張地域の範囲を確定する。②問題地域の種類・特性に合わせた政策ツールを制定する。③問題地域政策の枠組みに対して定期的な調整メカニズムを確立する。

次に、主体機能区政策を具体化するにあたって最も重要なのは、「全国主体機能区規画」が打ち出した財政政策、投資政策、産業政策、土地政策、農業政策、人口政策、民族政策、環境政策、気候変化対応政策等を、具体的に地域に細分化して徹底することである。「全国主体機能区規画」は、「経済・社会発展が各地域の主体機能と合致する誘導メカニズムを形成する」という基本的な方向を示したが、具体化するまでには至らなかった。

さらに、問題地域政策と主体機能区政策を調和させるには、次の3点から着手する必要がある。すなわち、組織間の調和を図る環境規制分権構造の調整、利益の調和を図る

生態補償メカニズムの構築、産業間の調和を図る工業地域の空間的配置の適正化である。この3点は、生態文明的な地域協同発展を実現する重要なツールである。その中で、組織間の調和は前提条件であり、利益の調和は保障であり、産業間の調和は基礎である。以下、詳細に検討する。

4.3 生態文明的な地域経済協同発展戦略の政策の重点

4.3.1 環境規制分権構造の調整

現在、中国の環境管理メカニズムは属地性が強く、現行の行政区分地域を環境管理区分地域としている。環境管理における行政機能の分担では、地方政府が主担当であり、国務院の環境保護部は調整・監督を行っている。また、環境問題は地域性が強いいため、一つの行政区内の空気汚染、水汚染、放射能汚染、一定程度の土地汚染は行政区画の範囲を超え、他の行政区画に影響を及ぼす可能性がある。地域間の環境は互いに影響し合っており、環境の改善は良質な公共財として強い波及効果を持っている。しかし、関連する管理制度・政策が、この波及効果を引き出すことができなければ、次の結果をもたらす可能性がある。まず、一部の地方政府が局部の利益を追求した結果、当該地域の持続的発展が困難となる。次に、有効な環境管理行為に対し、持続的な奨励策が提供できず、環境管理行為の改善にマイナスの影響を及ぼす。環境保護行為による外部経済の影響と汚染による外部不経済の影響が、関連する制度と政策に反映されなければ、政策の非効率を招く。また、環境保護実績の悪い政府はただ乗り（フリーライダー）状態となり、保護実績の良い地方政府が適切に評価されない可能性がある。地方政府の環境保全に対する積極性が低下し、環境保護投資を減らす恐れがある²⁷。工業文明の下では、政府の環境規制あるいは管理機能は、汚染排出削減等の技術的な生態保全と地方の環境問題の改善にとどまっている。政府の環境管理機能は、しばしば経済・社会発展促進機能に属される。中国では、生態文明を物質文明、精神文明、政治文明と共に、和諧社会を実現するための主要な内容と目標にすべきである。生態文明の推進における政府の環境規制・管理機能が、経済・社会発展促進機能と同様に重要視されなければならない。

政府機能の構造改革は、それに相応する政府管理構造の調整を要求する。どのようにして工業文明下の政府の管理構造を改革し、環境規制機能を強化するかは、当面解決すべき急務である。2007年の調査では、インタビューを受けた人の60%前後が中央政府の環境対策には満足しているも

²⁷ 万薇ほか「中国区域環境管理機制探討」『北京大學學報（自然科學版）』2010年第46卷第3期、449～456ページ。

の、地方政府の環境対策には満足していない²⁸。これは、経済分権と垂直型政治管理体制という政府管理構造と密接な関係がある。環境政策を実施する立場にある地方政府は、経済成長と財政増収を図るために環境規制を緩和し、地元企業の環境コストを低減させるとともに、他の地域から企業を誘致している。地方政府における環境規制緩和のいわゆる「底辺への競争（race to the bottom）」現象が生じている。中国の分権構造の下では、省エネ・排出削減等の環境対策が行政評価システムから排除されると、環境規制は実質上完全に分権された状態に陥る。したがって、現在の政府管理構造における評価メカニズムは、環境規制に対する地方政府の取り組みを疎かにし、越境する汚染問題を解決するために必要な協力枠組みが構築されず、地域間スピルオーバー効果を持つ生態問題を悪化させていると言えよう。政府管理構造を調整するには、長期間にわたり経済成長が独走し、環境を含む良質な公共財の提供が疎かになっている中国式分権の基本的管理構造の改善から始める必要がある。すなわち、異なるレベルの政府の枠組みの下で、環境規制機能の具体化を検討する必要がある。多くの環境問題には地域間スピルオーバー効果があり、このようなスピルオーバー効果の波及範囲は既存の行政区画範囲とは必ずしも一致しない。したがって、政府の環境規制機能を発揮させるには、中央と地方、地方政府間の関係を調整する必要がある。

4.3.2 生態補償メカニズムの確立

地域管理と地域協力は、汚染問題及び越境汚染により引き起こされた利害衝突・紛争の解決に寄与する。地域管理制度の下で、生態環境の協力と補償を同時に推進することができる。これにより、各利害関係者に適切な奨励を行うことができ、域内の環境保護行為の改善に有利である。例えば、河川流域における生態環境保護は、流域内の上流・下流における生態環境の提供者と需要者の間の利害関係を適切に調整する。これは行政区画を超えた問題であり、中国の地域経済の協調的発展及び生態文明の推進において、必ず直面する重大な問題である。

河川流域の環境負荷能力は極めて弱い。水源が汚染されると、全流域、特に人口密度が高く経済力が大きい下流地域を脅かし、倍以上の外部不経済を引き起こす可能性がある。そのため、水系の上流地域は全流域の生態保障義務を担わなければならない。すなわち、環境負荷能力の超過に

よる全流域、特に集約度の高い下流地域に対する脅威を防ぐことが求められる（外部不経済の低減）。また、上流地域の生態環境の修復と保護に努め、全流域、特に下流地域に良質な環境公共財を提供することが求められている（外部経済の増加）。さらに、河川流域経済は極めて高い関連性を持っている。具体的には、上流地域は下流地域に対し、二酸化炭素の吸収、酸素の放出、水・土の保持、水源保護等の生態環境の保障を提供する。下流地域は上流地域に対し、産業の拡大・波及支援、市場開拓支援及び生態補償等の経済的な「反哺」（恩返し）を行う必要がある²⁹。

流域生態補償とは、河川流域の水資源環境の改善を実現するために、生態環境の提供者と需要者が等価交換を行う契約行為であり、流域生態問題を解決する重要な手段である。環境負荷能力が流域の経済に与える影響、特に上流地域の経済発展に対する制約は、近年の環境主義と持続可能な発展観の普及に伴ってますます重要視されるようになった。上流地域住民は生活水準が比較的低いため、経済成長の刺激の下で、先進地域との格差を縮小するために、あらゆる方法で発展を促そうとする。その結果、流域の水資源環境の保護と管理が疎かになる。畜牧・養殖業、鉱業、化学工業等の汚染産業の発展及び資源の不適切な利用は、流域の生態環境にマイナスの影響を与えてきた。生態環境が破壊されれば、深刻な水・土砂の流出、生物多様性の喪失、土壌の物理的変化、地表・地下水資源の汚染等の問題が生じる。最終的には、人と自然の調和発展にマイナスの影響を与える。

流域生態補償の導入は、生態環境保護と経済利益の間の分配関係を調整し、河川流域の水資源環境を改善することができる。地域の生態環境の安全が保障され、人と自然の調和的な発展が可能となる。地方政府の交流・協議メカニズムを強化し、地方政府間の交流と協力を拡大する。上流地域住民の雇用を拡大し、所得を増加させる。発展が遅れている上流地域の経済成長を促進し、地域間の共同発展を図ることができる。

4.3.3 工業の空間的配置の適正化

汚染問題とその伝播範囲は行政区画の制限を受けない。例えば、大気汚染、河川流域の水汚染、海洋環境汚染、生物多様性等、問題の多くは行政区画の範囲を超えている。しかし、このような越境汚染は、汚染物質が物理的に行政区画の範囲を超えたことを指しており、資源消耗型生産物

²⁸ 中国環境意識項目辦公室「2007年全国公衆環境意識調査報告」『世界環境』2008年第2期、72～77ページ。

²⁹ 代明、丁寧、覃成林、陳向東「基于馬克思級差地租理論的流域經濟梯度差異分析」『馬克思主義研究』2010年第12期、65～74ページ。

の貿易、廃棄物の移転、汚染型産業の移転によるものは含まれていない。貿易により、汚染型産業は環境規制の厳しい国・地域から環境規制の比較的緩い地域に移転し、そこでより多くの汚染物を排出する可能性がある。したがって、経済が遅れている地域は、次のような現実に向き合わなければならない。すなわち、自由貿易の下で、環境規制の厳しい先進地域は「清潔型」製品の生産・輸出に特化する。また、環境規制の緩い地域から汚染集約型生産物を輸入する。やがて経済発展が遅れている地域に汚染型産業が移転する³⁰。「汚染天国」仮説は、比較優位性理論をベースに汚染問題を加えて分析を行ったもので、低所得地域における緩い環境規制が比較優位となり、それによって汚染型産業は環境規制の厳しい地域から緩い地域へと移転すると認識している。この仮説が成立する前提条件として、環境規制の強度は産業移転に影響を与える唯一かつ最も重要な要素である。もちろん、産業移転を行う際には、環境規制のほか、労働力コスト、市場等のその他の要素も考慮しなければならない。その他の要素の影響が大きい場合、「汚染天国」効果³¹が認められても、必ずしも汚染型企業が環境規制の厳しい地域から緩い地域へ移転するとは限らない。しかし、経済発展のレベルと環境基準の相違により、発展後進地域の工業化過程では、先進地域からの産業移転及びそれに伴う汚染の移転を受け入れざるを得ない。

Robert Lucas, Wheeler, Hettige (2004)の研究によれば、国の富が増えるにつれて、国内総生産（GDP）単位当たりの汚染量は減っていくが、これは当該国の生産構造が環境保全重視へ転換することによって得られた結果である。そして、汚染集約産業の割合が高い国ほど経済状況が悪いことも明らかになった。そのため、経済協力開発機構（OECD）メンバーの汚染集約産業に対する厳しい規制が汚染産業の地域間移転を引き起こし、発展途上国の工業汚染のスピードを加速させたと主張している³²。政府が投機的な政治を行うと仮定すると、貿易自由化により汚染型産業の関税が引き下げられた場合、汚染産業部門の損失が生じるため、投機的な政府は環境規制を緩め、その損失に対して補償を行う可能性がある。そして、貿易競争相手国が非最適環境規制基準を選んだ場合、利益最大化を追求する

政府も自国の環境規制基準を緩和し、産業移転と輸出がもたらす経済効果を得ようとする³³。そのため、先進国における環境規制の強化により、汚染集約産業が先進国から途上国に移転することは避けられない。中国では、「汚染天国」仮説及び「汚染天国」効果に関する研究は、国全体を対象としているものが多いが、国内地域間における環境規制と工業の空間的配置の関係に関する研究は少ない。また、国際産業移転が行われているなか、中国が外資にとって「汚染天国」になっているかどうかについての研究に関心が集まっている。これに関連する研究でも、貿易又は外国直接投資（FDI）が国内の環境に与える影響の分析に集中しており、国内地域間における産業移転と環境規制との関係についての研究は少ない。

中国では、産業が東部地域から中部・西部地域に移転していく過程において、汚染の移転、資源・エネルギー消費の移転が伴う可能性は十分にある。国内の環境規制は、国の統一基準に従うものであるものの、中部・西部地域では東部地域からの産業移転を受け入れるために、環境規制の執行を緩和することもあり得る。しかし、生態文明の視点から見れば、産業の空間配置の最適化を検討する際に、生産要素の比較優位原則、産業集積の効果、地域間格差の縮小という工業文明の視点を考慮すると共に、生態環境保護の目標を設定し、それを経済・社会発展目標と同様に重要視しなければならない。主体機能区の区分は、その必要性を踏まえたくえで行われたものであるが、現在の政府管理構造の下では、産業移転は依然としてGDPの成長を目標としている。生態文明視点からの産業の空間的配置に関し、その戦略目標、有効なメカニズム、実現プロセス等について今後、更なる研究が必要である。

5. 本稿の結論と課題

中国国内では、地域戦略の内容については共通認識を持っているが、その変遷過程については意見が異なっている。2段階区分法、3段階区分法等は一般に採用されている。筆者は、地域発展環境の変化という視点から、中国の地域戦略の展開を6段階に区分するとともに、現段階の地域戦略は生態文明的な地域経済協調戦略であると位置づけた。

³⁰ 李小平・盧現祥「国際貿易、汚染産業転移和中国工業CO2排放」『経済研究』2010年第1期、15～26ページ。

³¹ Copeland Taylorは、汚染天国効果と汚染天国仮説は異なるものとして認識している。汚染天国効果は、環境規制が厳しくなった場合、コストや収益に変化が生じ、それが産業の配置・移転に対して影響を与えると指摘している。詳細はCopeland, Brian R. and M.S. Taylor, Trade, "Growth, and the Environment", Journal of Economic Literature, No.42, 2004, 7～71ページを参照されたい。

³² Lucas, Robert E.B., David Wheeler and Hermamala Hettige, Economic Development, Environmental Regulation and the International Migration of Toxic Industrial Pollution: 1960～1988, in International Trade and the Environment. Patrick Low, Ed. Discuss. paper159, Washington, DC: World Bank, 1992, pp.67～86.

³³ Esty, Daniel C, "Revitalizing Environmental Federalism", Michigan Law Review, vol.95, no.3, 1996, pp.570～653.

生態文明的な地域経済協調戦略の本質は、経済効率、社会公平、生態バランス、政治連携、文化融合の統合である。政策決定の側面から見れば、この地域戦略の内容は次のようにまとめることができる。すなわち、人間と自然の調和の発展に基づき、西部開発、東北振興、中部崛起、東部率先発展を促進すると共に、地域間における明確な主体機能を持つ地域発展を構築することである。この目標を実現するための具体的な戦略として、地域発展全体戦略と主体機能区戦略が挙げられる。

今後の地域政策の重点は、問題地域政策と主体機能区政策の改善及び両者の調和にある。当面解決すべき課題は、環境規制分権構造の調整、生態補償メカニズムの確立、工業の空間的配置の適正化の3点である。地域管理の基礎的

制度の健全化は、この3つの問題を解決する前提である。中国経済の拡大に伴って地域問題が多発しているが、それを解決するために、地域管理と制度の革新は避けては通れない道である。しかし、生態文明的な地域経済協調発展戦略の目標の実現は、長い期間を要する難しい課題である。本稿は今後の政策展開についての議論に留まっており、具体的な政策設計については更なる研究が必要である。

中国は大国であり、国際的地位の上昇と国際的影響力の増強に伴い、国境を跨ぐ生態環境問題への取り組みが重要な課題として浮上している。これは、中国を取り巻く国際関係及び国内の発展の両方に影響を与えるため、更なる研究が求められる重要な課題である。

[中国語原稿をERINAにて翻訳]

The Ecological Civilization Regional Economic Coordinated Development Strategy: The background, content and policy direction thereof

ZHANG, Keyun

Professor, Institute of Regional Economics and Urban Management, Renmin University of China, and
State Five-Year Guidelines Specialist Committee Member

Summary

In this paper, in addition to summarizing the existing points relating to the evolutionary course of China's regional development strategies, I have raised a new method of dividing it up into six stages. Current regional development strategies are at the stage of the ecological civilization regional economic coordinated development strategy. The essential quality of the ecological civilization regional economic coordinated development strategy is the integration of "economic efficiency", "social equity", "ecological balance", "political coalition", and "cultural fusion". Raised as concrete strategies to realize this are regional development master plans and principal function region strategies. The focuses for subsequent regional policies are to attempt at making policy more robust in problem regions and principal function regions, and to undertake policy design so as to bring about a coordinated relationship between the two. Regarding the issues that should be dealt with for the moment, there is a decentralized structure for environmental regulations, a mechanism for ecological reparation, and a concrete policy on the spatial distribution of industry. Therefore it is necessary to attempt to make the basic regional management systems more robust.

[Translated by ERINA]

中国が大量の地域発展計画を策定する要因と実施上の問題点

吉林大学東北アジア研究中心副主任・教授 吳昊
吉林大学東北アジア研究院博士課程 馬琳

中国は「第11次5カ年計画」期間（2006-2010年）に入ってから、とりわけ2009年より、中央政府が大量に地域発展計画を策定・承認したほか、地方政府も相次ぎ地域発展計画を策定して中央政府の承認を申請した。中国社会では、大量の地域発展計画が策定・承認されたことに対し、「先熱後冷¹」という完全に相反する反応を示している。「先熱」とは、中央政府がある地域発展計画を承認した際に、対象地域の地方政府及び住民の関心が高く、意気揚々として地域発展計画の内容を宣伝し、それに関連する実施プランを積極的に策定することである。「後冷」とは、時間が立つにつれ、中央政府承認の地域発展計画が次第に多くなり、当該地域が実際に中央から得られる政策支援が少ないため、人々は当初の期待と現実との間に大きなギャップが存在することに気づくようになることである。地方政府と住民は地域発展計画に対する期待感がなくなり、関連する実施プランは全く施行されない場合がある。本稿は、中国における地域発展計画のパターン、地域発展計画を策定・承認する中央と地方政府の主要な意図及び地域発展計画の実施上の問題点を考察する。

1. 「第11次5カ年計画」期間中から現在までの主要な地域発展計画

2012年、範恒山国家発展改革委員会地区経済局長は、「中国区域経済発展ハイレベルフォーラム」において、「過去6年間（2006-2011年）、国は71件に及ぶ地域発展に関する政策文書と地域計画を打ち出した。しかし、『第10次5カ年計画』期間中（2000-2005年）には5件しかなかった」と指摘した。範恒山局長が指しているのは、中央政府が策定または承認した地域発展計画及び関連政策文書のことである。地方政府が策定したもの、または中央政府承認申請中の地域発展計画は含まれていない。いずれにせよ、中国における地域発展計画の件数は爆発的に増加している。こ

のような状態を「地域発展計画大躍進」または「地域発展計画花盛り」と表現してもおかしくない。各レベルの地方政府が策定した地域発展計画、もしくは地域発展の内容を含んだ政策文書の件数がどれぐらいに達したかについては、正確に集計をした研究者または研究機関はないが、中国の地域発展計画の全体像に対する研究には影響を与えないと考える。中国の地域発展計画は、以下5つのパターンがあると思われる。すなわち、国家戦略型地域発展計画、重点・代表的地域の総合開発計画、国家級「新特区」改革発展計画、特定機能地域特定分野の開発計画、各レベルの地方政府が策定する地域発展計画または関連政策文書である。²

1.1 国家戦略型地域発展計画

中国国内では、1つの地域発展計画が中央政府（国務院）に承認されたら国家戦略に昇格したと解釈されているが、これは誤解である。国務院の承認は、地方政府が計画通りの改革や開発を実行して良いと認めたことに過ぎず、中央が必ず関連政策を打ち出して当該地域の開発を支援する意味ではない。国家戦略型地域発展計画として位置付けられるのは、国全体の戦略的な目標及び具体的な支援政策が含まれる地域発展計画のみである。

この定義に従えば、これまでに中国政府が打ち出した国家戦略型地域発展計画は、「西部大開発第11次5カ年計画」（2006年）、「西部大開発第12次5カ年計画」（2012年）、「東北地域振興計画」（2007年）、「東北振興第12次5カ年計画」（2012年）、「中部地域振興促進計画」（2009年）、「全国主体機能区計画」（2011年）である。西部大開発、東北旧工業基地振興、中部地域振興等の関連計画は、地域格差を縮小させ、地域間の経済連携を促進する発展戦略の重要な構成要素であり、中国における地域発展戦略の核心的な内容である。この核心的内容に関連する諸地域発展計画は、必然的に国家戦略型地域発展計画に属することになる。

¹ 当初は関心が高かったものの、時間が立つにつれて、関心が薄れていく意味。

² 張（2012）は、中国の地域発展計画を「戦略的地域計画」、「地域計画」、「単独行政区発展計画」の3パターンに分類した。このような分類方法には一定の理があるが、大雑把で、混乱を招く恐れがあると考えられる。例えば、「単独行政区発展計画」について、その内容は不明確である。張（2012）によれば、「単独行政区発展計画」は対象地域が1つの行政区を超えない計画である。しかしながら、ここで言う「行政区」は何を指しているのか？省レベルか、市レベルか、県レベルかについて明確に示されていない。仮に省レベルを指しているのであれば、「地域計画」に分類された多くの計画は「単独行政区発展計画」に属されるはずである。「広西北部湾経済区発展計画」、「長株潭都市群地域計画」、「珠江デルタ地区改革発展計画要綱」、「閩中一天水経済区発展計画」等が挙げられる。なぜなら、これらの計画の対象地域は1つの省の行政区を超えていないからである。また、張（2012）の分類方法では、中国の各レベルの地方政府が策定したあらゆる地域発展計画を網羅していない問題もある。

「全国主体機能区規画」は、中国における国土空間発展戦略の実施プランである。同規画は全国の陸地国土空間・領域内の水域・領海（香港・マカオ・台湾は含まない）に対し、各地域の開発の度合い、開発の潜在力、資源と環境の負荷能力、文化価値と生態保護状況等に基づき、最適開発地域、重点開発地域、開発制限地域、開発禁止地域の4種類に分類した。「全国主体機能区規画」は、地域の発展の方向性を明確にし、各地域の具体的な発展規画の策定と実施に対して適切な制約を加える役割を持つ。

1.2 重点・代表的地域の総合開発規画

理論上、国土の一部を重点地域または代表的な地域として区分することは不適切である。なぜなら、あらゆる地域は国土空間を構成する重要な部分であり、分断することができない。また、地域ごとにそれぞれの特性を持っている。しかし、社会及び経済の発展への貢献度から見れば、特定の地域はある顕著な特徴を持ち、より大きな役割を果たすことは必然的なことである。中央政府が承認した多くの地域発展規画には、当該地域の経済発展、制度改革、インフラ整備、環境保護に関連する内容が含まれており、当該地域の発展の促進を目的としている。

これまで中央政府が承認した同パターンの規画として、「広西北部湾経済区発展規画」（2008年）、「長株潭³都市群地域規画」（2008年）、「珠江デルタ地区改革発展規画要綱」（2008年）、「閩中一天水経済区発展規画」（2009年）、「遼寧沿海経済帯発展規画」（2009年）、「江蘇沿海地域発展規画」（2009年）、「中国閩門江地域協力開発規画要綱」（2009年）、「長江デルタ地域規画」（2010年）、「海峽西岸経済区発展規画」（2011年）、「河北沿海地域発展規画」（2011年）が挙げられる。また、新聞記事によれば「京津冀⁴都市圏規画」、「中原経済区発展規画」の策定は完了し、国務院に申請して承認を待っている状況である⁵。このほか、2011年5月に公表された「雲南省の西南に向けて開放する重要な橋頭堡としての建設加速化支援に関する国務院の意見」、同9月公表の「国務院の河南省中原経済区の建設加速化支援に関する指導意見」も地域発展規画の性格を持つ政策文書である。

1.3 国家級「新特区」改革発展規画

2005年以来、国務院は11カ所の総合改革試験区の設立を許可した。具体的には、「上海浦東新区総合改革試験区⁶」（2005年）、「天津濱海新区総合改革試験区」（2006年）、「重慶市の都市と農村の一体的発展に向けた総合改革試験区」（2007年）、「成都市の都市と農村の一体的発展に向けた総合改革試験区」（2007年）、「武漢都市圏資源節約型・環境友好型⁷社会総合改革試験区」（2007年）、「長株潭都市群資源節約型・環境友好型社会総合改革試験区」（2007年）、「深圳市総合改革試験区」（2009年）、「瀋陽経済区国家新型工業化総合改革試験区」（2010年）、「山西省国家資源型経済転換総合改革試験区」（2010年）、「浙江省義烏市国際貿易総合改革試験区」（2011年）、「浙江省温州市金融総合改革試験区」（2012年）である。

総合改革試験区は、一般に国家級「新特区」とも呼ばれる。中国政府が総合改革試験区を許可する目的は、特定地域での政策試験を通じ、全国範囲での改革開放の深化のための新しい措置、経路と方法を探求し、改革の経験を蓄積することである。この目的は、改革開放当初に設立した深圳、珠海、汕頭、アモイ等の経済特区の目的と完全に一致している。「新特区」が許可された後、当該地方政府は、中央の要求に従って「改革試験プラン⁸」を策定することが求められ、国務院の承認を受けなければならない。「改革実験プラン」は、方針や文書の書式上において地域発展規画と相違があるものの、実質的な内容はほぼ同様であるため、地域発展規画の特殊なパターンとしても見ることができる。「瀋陽経済区新型工業化総合改革試験総合プラン」は典型的な事例である。瀋陽経済区には瀋陽市、鞍山市、撫順市、本溪市、営口市、阜新市、遼陽市、鉄嶺市の8都市が含まれている。「総合プラン」には教育、社会保障、交通、衛生、金融、検疫検査等における8都市の協力に関する内容が含まれるほか、瀋陽経済区一体化の目標及び措置が明記されている。規画という名を使わなかった地域発展規画として見なすことができる。

1.4 特定機能地域特定分野の開発規画

近年、国務院は特定機能地域における特定分野の発展規画を数多く承認した。例えば、「曹妃甸循環経済示範区産

³ 長沙市、株州市、湘潭市を指す。以下同じ。

⁴ 北京市、天津市、河北省を指す。

⁵ 詳細は「京津冀都市圏規画有望三月底报送国務院」『國際商報』（2007年3月1日）及び「中原経済区獲批在即」『21世紀經濟報道』（2011年8月10日）を参照されたい。

⁶ 中国語では「総合配套改革実験区」である。以下同じ。

⁷ 環境にやさしい。以下同じ。

⁸ 中国語では「改革実験方案」または「改革実験総体方案」である。以下同じ。

業発展総体計画」(2008年)、「甘粛省循環経済発展総体計画」(2009年)、「黄河デルタ高効率生態経済区発展計画」(2009年)、「鄱陽湖生態経済区計画」(2009年)、「重慶両江新区総体計画」(2010年)、「皖江都市帯産業受入移転模範区計画」(2010年)、「西咸新区総体計画」(2011年)、「中関村国家自主創造示範区発展計画要綱」(2011年)、「大・小興安嶺林区の生態保護と経済モデル転換計画」(2010年)、「浙江海洋経済発展モデル地域計画」(2011年)、「山東半島藍色経済区発展計画」(2011年)、「広東海洋経済総合試験区発展計画」(2011年)、「チベット高原地域生態建設と環境保護計画」(2011年)などがある。

これらの地域発展計画の対象範囲は比較的狭く、基本的には一つの省級行政区の一部の地域である。この理由で、張(2012)は理論的には地域発展計画とは言えないが、マスコミでは地域計画としてしばしば誤解されると指摘した。しかし、このような見方は明らかに正しくない。なぜなら、地域発展計画として位置づけられるかどうかの基準は、対象地域の範囲の広さや行政区を超えているかどうかではないからである。対象地域は市場の観点からみて独立性を持つ経済区⁹であれば、それに関連する発展計画は地域発展計画として位置づけられる。

無論、あらゆる地域発展計画はすべて中央政府の承認が得られるものではない。特殊のモデル的な機能を持ち、全国の社会経済の発展方向と合致する地域発展計画だけが中央政府に重視され、ひいては承認される。これらの地域発展計画には、中央政府が当該地域の発展方向を明確に規定するほか、その発展の方向は中央政府が今後社会経済の発展を導くための基本的な方向と合致しているという特徴がある。

1.5 各レベルの地方政府が策定する地域発展計画

これまで取り上げられた4種類の地域発展計画は、すべて中央政府が策定・承認した発展計画であり、中国における地域発展計画の政策体系において非常に重要な位置づけを占めている。しかし、その件数は全体のごく一部しかない。このほか、中央政府の承認を得ていない、または中央政府に承認申請さえ提出していない地方政府による地域発展計画は大量に存在している。このような地域発展計画は大きく分けて3種類がある。

第1に、地方の「第11次5カ年計画」と「第12次5カ年計画」である。これらの計画の対象地域は、市場の観点か

らみて独立性を持つ経済区ではないものもあるが、異なるレベルの行政管轄地域である。地方の「5カ年計画」は、地方政府が最も重視する計画として、当該地域の经济社会発展の青写真を示し、地域経済発展と地域経済の空間的配置構造に大きな影響を与える。

第2に、地方政府が確定した重点地域または代表的な地域の総合開発計画である。多くの地方政府、特に省級の地方政府は各自の実情に応じ、重点地域または代表的な地域を選定して関連の地域発展計画を策定している。例えば、「哈大齊(ハルビン市—大慶市—チチハル市)工業回廊産業配置総体計画」(2011年)、「珠江デルタ一体化計画」(2010年)、「長吉(長春市—吉林市)一体化発展計画」(2011年)は当該種類に属す。地方政府が策定したこれらの計画は、中央政府承認の重点・代表的地域の総合開発計画のベースとなっているものが多い。

第3に、地方間の地域協力発展計画である。近年、近隣地区との協力はますます地方政府に重要視されるようになり、互いに協力して共同で地域発展計画の策定に着手し始めている地域もある。例えば、珠海市政府の常務会議において決定された「珠港澳¹⁰協力発展第12次5カ年計画」(2011年)はこの類に属す。現時点で検討・策定中の「白通丹¹¹経済発展帯発展計画」も典型的な事例である。

2. 中国が大量の地域発展計画を策定する理由

中国の各級政府が大量の地域発展計画を策定するのは、「上から下へ」と「下から上へ」の双方向で推進した結果と言える。すなわち、地域発展計画に関して中央政府も地方政府も強烈的な策定意欲がある。しかし、両者の狙いは大きく相違している。

2.1 中央政府が地域発展計画を重視する理由

中央政府が地域発展計画の策定と審査を重視する理由は、中国経済の高度成長に伴い、より多く、より深刻な地域経済問題が発生したことにある。中央政府は地域発展計画を通じ、地域经济社会を管理し、様々な地域問題を解決しようと狙っている。具体的には、以下のような意図があると考えられる。

第1に、地域格差を縮小し、地域の協調的発展を促す。改革開放以来、中国の地域格差は拡大している。一人当たりGDPは、地域間格差を表す重要な指標の1つであるが、表のとおり、2005年以前は東部地区の一人当たりGDPが

⁹ 行政区と経済区の関係について、汪陽紅「正確処理行政区与経済区的关系」『中国発展観察』、Vol. 2、2009年、24～26ページを参照されたい。

¹⁰ 珠海市、香港、マカオを指す。

¹¹ 吉林省白山市、吉林省通化市、遼寧省丹東市を指す。

表 一人当たりGDPにおける東部・中部・西部地域と全国との比較

| 年度 | 東部 | 中部 | 西部 | 全国 |
|------|-------|-------|-------|----|
| 1997 | 1.686 | 0.759 | 0.629 | 1 |
| 1998 | 1.733 | 0.762 | 0.642 | 1 |
| 1999 | 1.774 | 0.756 | 0.647 | 1 |
| 2000 | 1.795 | 0.766 | 0.645 | 1 |
| 2001 | 1.784 | 0.761 | 0.646 | 1 |
| 2002 | 1.822 | 0.766 | 0.655 | 1 |
| 2003 | 1.857 | 0.776 | 0.670 | 1 |
| 2004 | 1.875 | 0.798 | 0.686 | 1 |
| 2005 | 1.904 | 0.811 | 0.703 | 1 |
| 2006 | 1.867 | 0.805 | 0.713 | 1 |
| 2007 | 1.789 | 0.796 | 0.706 | 1 |
| 2008 | 1.754 | 0.814 | 0.742 | 1 |
| 2009 | 1.747 | 0.821 | 0.754 | 1 |
| 2010 | 1.513 | 0.832 | 0.754 | 1 |

注：東部地域は北京、天津、河北、遼寧、上海、江蘇、浙江、福建、山東、広東、海南の11省（市）、中部地域は山西、吉林、黒竜江、安徽、江西、河南、湖北、湖南の8省、西部地域は四川、重慶、貴州、雲南、チベット、陝西、甘肅、青海、寧夏、新疆、広西、内モンゴルの12省（市）である。

出所：国家統計局「中国統計年鑑」1999-2001各年版より筆者作成

全国平均レベルを大幅に上回り、上昇傾向が続いていた。それに比べると、中部・西部地域は長期にわたり低い水準に留まっている。このような状況は、社会の公平と安定、経済の持続的な発展の実現にとって大きなマイナス要因と言える。この問題を解決するため、中国政府は「西部大開発」（1999年）、「東北旧工業基地振興」（2003年）、「中部振興」（2006年）等の地域発展計画を相次ぎ実施し、関連の戦略的な地域発展計画の策定にも着手している。

第2に、地域開発秩序の混乱と生態環境の悪化を改善する。国土開発秩序の混乱は中国が抱えている深刻な地域問題である。具体的には以下のとおりである。①地方政府は都市化の進展を過度に強調し、都市用地面積を急激に拡大させている。また、各地は基礎的な経済条件を無視して開発区の整備を競い合っており、開発区の件数及び面積を大幅に拡大した結果、大量の耕地が転用された。②地域開発の空間的構造に問題がある。工業・生産用地が多く、生活・居住・生態用の空間が少なくなったため、各種の都市問題は集中的に発生し始めている。③「過密」・「過疎」の現象が出現し始めた。珠江デルタ・長江デルタなどの一部の都市では過度な開発が行われる反面、その他の一部地域では、開発の条件が整っているにもかかわらず開発が行われていない。④地方政府は経済成長を重視するが、環境・歴史文化的遺産の保護に対して怠慢であるように見える。その結果、重要な生態システムと自然・文化遺産保護地は不適切

的に変更されたケースが多く、生態環境の脆弱化問題は深刻化している。中央政府は「全国主体機能区規画」等を策定・施行することにより、地域開発の秩序を保ち、社会経済の持続的な発展を実現することを狙っている。

第3に、地方間の悪性競争と地域保護を排除し、地域間協力と地域経済の一体化を促す。改革開放以来、地方政府は経済成長速度と域内総生産ランキングをめぐる熾烈な競争を展開している。経済成長率を高めるために、各級地方政府は、企業の投資誘致策を強化し続けてきた。環境基準を緩め、企業に安価な土地を提供し、インフラ整備を行って企業の投資コストを抑えようとしている。地方間競争は、中国における市場化改革の進展、対外開放の拡大及び経済成長の加速に重要な役割を果たしたと言える。しかし、マイナス面での深刻な影響も生み出している。例えば、地域の環境が悪化し、地方政府は公共財の提供に消極的になっている。また、地方政府は生産安全・食品安全・環境安全に対する重視の度合いが低下し、地域間における市場の分裂が長期にわたって解消されない等の問題が残っている。これらの問題は地方間競争と密接な関係がある（呉昊2006）。中央政府は、地域発展計画を通じて地方政府の行為を規範し、地域間の悪性競争を解消し、地方政府に地域協力と地域一体化の促進に参加させようとしている。

第4に、重点・代表的な地域の経済発展を支援し、全国経済の安定的な成長に寄与する。行き過ぎた地域格差を縮小することは、中国にとって長期的な戦略目標の一つであると認められるが、地域格差そのものの存在は正常である。格差は、各地域における異なる立地条件、自然・人文環境、基礎的経済条件、経済政策等が総合的に作用した結果である。地域格差問題の解決は長い期間を要する。拡大する地域格差を解消するために、主要な経済地域・大都市群の成長を制限し、その発展にマイナスの影響を与えてはならない。将来の長い期間にわたり、東部沿海地域、中部の主要都市群は、中国の経済成長を牽引する核心的な地域でありつづける。中央が重点・代表的地域の総合開発計画を承認する目的は、関連地域の発展の方向性を明確にし、各地域が抱えている社会面・経済面の重要な問題を適切に解決することである。

第5に、一部地域の政策実験を通じて、国全体の改革開放に新たな経験を蓄積する。周知のように、中国の改革は独特な漸進式改革であり、「石を探りながら川を渡る」とも呼ばれている。この改革方式において重要なのは、国が各地域・各省庁による問題解決策の模索を奨励・サポートすることである。その経験と教訓を取りまとめ、改革関連政策及び法律の策定の根拠とする。政策形成プロセスから

みると、「石を探りながら川を渡る」の核心的な内容は、地方（局地）の政策実験及びそこから得られた経験を国の政策・法律の策定に反映させ、現有政策と体制に対して漸進的な調整を行うことである（韓博天2010）。中国政府は、経済特区・試験区・開発区等を設立し、指定された地域において特殊な政策実験を実施して、制度改革と政策変更に寄与する「先行先試」（先に行い、先に試みる）を行っている。このような背景を踏まえて、各種の総合改革試験区（新特区）の設立を許可した。国務院は各実験区が策定する「改革試験総体方案」（地域発展計画の性格を持つ）を審査・承認し、地方政府が中央政府の調整のもとで政策実験を行うことを保証している。このような方法は、政策実験が制御不能に陥ることを避けながら、中央政府の権威を保つことに有効である。

2.2 地方政府が地域発展計画を重視する理由

中国では地域発展計画が大量に策定される大きな理由は、中央政府が各種の計画をますます重視するようになったことにある。しかし、地方政府がこれに対して積極的な態度を示さなければ、中央政府の重視だけではこのような状況にはならない。したがって、各級の地方政府が地域発展計画の策定・申請・承認等に大きな熱情を注いでいる点を見逃してはならない。地方政府が地域発展計画を重視し、中央政府の承認申請を積極的に取り組んでいるのは、当該地方に多方面の巨大な利益をもたらすことができると考えるからであろう。

第1に、中央政府または省級政府の視線を引き付け、より多くの政策支援を獲得する。地方の経済発展は、中央政府の政策または投資プロジェクト支援に大きく依存する部分がある。近年、地方政府による中央の投資プロジェクトの獲得をめぐる競争はますます激化している。当該地方の地域発展計画は中央政府の承認を得たら、より多くの建設用地枠とその他特殊優待政策を得ることができる。各種総合開発プランや重要なプロジェクトは、中央に承認された地域発展計画の枠内で推進することができる。それが実質上、地方政府にとってより大きな「発展の権利」と資源分配権限を得ることになる。このような状況の下で、各級地方政府は、それぞれの管轄地域内に重点・代表的な地域の発展計画を策定し、各種のチャンネルを駆使して中央政府の承認を取り付けようとしている。地域発展計画の策定と承認をめぐる地域間の競争はますます激しくなっている。

第2に、当該地域の社会経済発展の青写真を提供する。地方政府が地域発展計画の策定を重視することは、そこに適切かつ現実的な需要が存在していることである。すなわ

ち、社会経済発展のマクロ環境と当該地域の実情を分析し、それをベースに地方政府の基本的目標と重点任務を確定することである。経済の飛躍的な発展に伴い、各地方政府はより多くで複雑な現実の課題に直面するようになった。それを解決するために、地方政府は、マクロ環境の変化及び地域の特徴・課題を的確に把握する必要がある。地域発展計画の策定は、地域発展の環境を総合的に研究・把握することであり、問題解決のための方策を探求するプロセスでもある。したがって、地方政府が地域発展計画を重視するのは、当該地域の経済社会をより科学的かつ適切に管理しようとする願望の表れである。

第3に、地方政府における経済社会管理の方針を宣伝し、各方面の関心を引き寄せる。地方政府が策定した地域発展計画には、中央政府の承認申請手続きを踏んでいないものも多い。当該地方政府は、その発展計画が中央政府の承認を得られないことを承知している。それにもかかわらず地域発展計画の策定に積極的である。その理由は以下のとおりである。まず、地域発展計画という正式な政策文書を通じ、地方政府は社会経済の管理方針と政府の重点目標を社会に広報することができる。次に、地域発展計画は、上級政府の承認を取得できた場合、具体的な政策支援の有無にかかわらず、地方政府の役人の行政管理能力を示す重要な業績となる。第3に、地域発展計画は、国内外の投資家に当該地域の発展方針・方向性と関連政策を紹介する重要な手段である。知名度の向上と外資誘致のための重要なチャンネルである。最後に、地域発展計画は、地域住民にとって政府の方針と重点目標を理解するツールである。地域発展計画の策定は、地方政府の地域住民からの良い評価の獲得に寄与する。

3. 地域発展計画の実施上の問題点

中国が大量の地域発展計画を策定することには、正当性はあるが、厳しい現実に直面している状況である。すなわち、地域発展計画は、その内容が十分に検討され、適切に構成されたとしても、その施行は極めて困難である。多くの地域発展計画は策定・承認が終わった直後に棚上げされている。中国における地域発展計画の施行は多くの困難に直面している。

3.1 施行の拘束力の不足

「計画」は極めて中国的な言葉である。言葉の意味から言えば、「計画」は「計画」と大差がなく、今後の業務の根拠及び実行必要な行動プランである。しかし、中国の計画経済時代の発展計画と現在の発展計画とは性格上の相違

がある。計画経済時代の発展計画は、今後の業務の根拠を指し、完全に施行されなければならないプランであった。発展計画にある数値目標は、基本的に制約性のある目標であり、予測性の目標が少ない。それに対して現在の発展計画は、未来の発展状況に対する予測、展望及びそれをベースにした青写真であり、あらゆる項目をすべて完全に施行しなければならないということではない。発展計画の数値目標には予測的なものが多く、一部の最重要目標のみ制約性を持つ。言葉の意味だけみても、地域発展計画は計画経済時代の各種計画と対比すると、施行の拘束力が弱くなっている。

また、地域発展計画の策定・承認・施行等に関連する法的根拠はない。発展計画の策定は政府部門の業務に過ぎず、その審査・承認については法的手続きを踏んでいない。施行過程に必要な監督・評価メカニズムも欠如している。このような状況では、地域発展計画が効率よく施行されることは難しい。政権交代または地方政府の主要官僚が異動になったら、新任の官僚は前任者の下で策定された地域発展計画を二度と採り上げない場合もしばしばある。

3.2 財政面での保障の欠如

地域発展計画の施行には、巨額の財政資金が必要である。必要な資金的支持または財政投入がなければ、いくら素晴らしい地域発展計画でも実施が困難である。しかし、いまの中国では、多くの地域発展計画は投資項目に対して綿密な予算化を行っておらず、必要な財源が明確にされていない。中央政府承認の地域発展計画であっても、国家財政から資金的な支援を受けられるものは少ない。地域発展計画を施行するための資金は主に地方政府が調達している(穆亮芋2012)。しかし、地方政府が地域発展計画に対する中央の承認に積極的に取り組んでいるのは、中央から財政資金・投資プロジェクト・土地利用枠等の支援を得るためである。中央政府の財政的支援が少ない状況では、地方政府には「有名無実」(期待した中央政府の支援策が得られず)の失望感が生じる。これは地方政府の地域発展計画に対する実施意欲に大きなマイナスの影響を与える。

3.3 地方政府の機会主義傾向

世界各国の地方政府は、経済成長の促進・雇用の拡大、治安の維持、公共サービスの提供、環境保全等の政府の基本的な機能をバランスよく果たす必要がある。しかし、中国では制度上の理由により、地方政府は、経済成長、投資

誘致、プロジェクト建設を極めて重視するが、経済発展と直接に関係ないこと、特にそれに対してマイナス影響を与えることについては、消極的な態度を取っている。一部の地方政府は、生態保護の名を借りて地域発展計画を策定・申請するが、その施行で生態環境問題を十分に考慮したわけではない。これまでの地域発展計画には、生態経済発展の名を付けたものが多い。例えば、甘肅循環経済区、鄱陽湖生態経済区、黄河デルタ高効率生態経済区等が挙げられる。いまの状況から見れば、関連地方政府が発展計画を施行する際に重視するのは「生態」ではなく、「経済」である可能性が高い。「黄河デルタ高効率生態経済区発展計画」を例に取れば、計画地域は黄河が渤海に流入する入口に位置し、重要な湿原生態システム保有地と貴重な絶滅危惧鳥類の自然保護区である。しかし近年、黄河デルタの生態環境は悪化し続けている。これは黄河中上流における水流の一部遮断とデルタ地域における開発の加速と密接な関係がある。国家発展改革委員会が生態環境重視の目的でこの計画を位置づけた理由は分かるが、経済開発と生態保護の両立は困難である。地方政府が地域発展計画の名の下、保護区を開発区として建設するのではないかと憂慮されている。

3.4 異なる地域発展計画の間の矛盾

短い期間に、これほど多くの地域発展計画が異なる地域・部署で策定されたため、その間で内容的に互いに衝突し、矛盾を招くことは避けられない。一部の地域発展計画は、その地域に限定すれば適切性があると認められるが、全体から見れば全国経済の長期的な発展計画に相応するとは限らない。また、現有の国家級の長期発展計画と内容的に矛盾する地域発展計画もある。例えば、一部の地域発展計画と「全国主体機能区計画」とは明確な矛盾が存在し、「全国主体機能区計画」における地域分類¹²は多くの地域発展計画に徹底されていない。土地利用について、国の農地保護政策及び土地利用計画の枠を越えた地域発展計画も多くある。地方政府は、地域発展計画を施行する名の下で耕地転用規模を拡大し、開発禁止地域に属する生態保護区に建設プロジェクトを展開するケースもある。近年、中央政府は地域発展計画の策定と施行中の問題点に気付き始めている。例えば、重慶市が策定した「重慶两江新区総体計画」は國務院の承認を受けたが、大量の土地用途の変更や耕地転用が発生するため、中央政府が実質上、当該計画の施行を見合わせている。

¹²「全国主体機能区計画」では、国土を最適開発区、重点開発区、開発制限区、開発禁止区の4種類に分けている。

3.5 地域住民との利益の衝突

地域発展計画は、本来地域の経済と社会の発展を促進し、対象地域住民の福祉の向上に貢献するものである。しかし、中国の地域発展には「浮遊性」の特長が見られる。すなわち、地域発展計画は地域住民の利益から離脱し、その策定と施行の主体が政府または政府内の一部の役人に限定されている。その結果、地域住民は地域発展計画に対して一方的に受け身となり、多くの地域発展計画は地域住民の利益を十分に考慮していない。例えば、「海南国際観光島発展計画」は国務院の承認が受けられるという「良いニュース」の刺激の下、海南省の不動産市場は過熱化し、海口・三亜などの都市の不動産価格は急速に上昇した。その結果、多くの住民は住宅購買力を失うことになってしまった。また、一般消費品の物価上昇や海岸の観光スポット開発は、地域住民の福祉に大きなマイナスの影響を与えた。したがって、地域発展計画を施行する際に、地域住民の利益をいかに保護するかは、各級政府にとって極めて重視しなければならない新課題となっている。

4. むすびにかえて

本稿では、中国における地域発展計画の主要なパターンを紹介し、中央政府と各級地方政府の両方の視点から、近年に地域発展計画が大量に策定される原因を分析した。また、地域発展計画の実施上の問題点についても検討を加えた。本稿は、中国が地域発展計画を策定・施行する意義を否定するものではなく、地域発展計画の有効性に関する研究を深めることを願うものである。最近、中央政府は地域発展計画を大量に策定する問題点を意識し始めたのか、国務院は地域発展計画の審査・承認に対してペースダウンしている。

中国地域経済に対する研究の重点は、地域発展計画に置くべきではないと考える。なぜなら、あらゆる地域発展計画には必ず施行される保障はなく、そこに描かれた美しい未来は必ずしも実現できるものではないからである。中国の地域経済発展と地域経済構造の変化を理解するには、経済学の基礎的理論から出発し、各地域の立地条件、自然資源、文化環境、人口状況、産業基盤等の基本的要素を中心に分析を行うべきである。また、中国各級政府の行動様式、行動の動機、実際の動きを考慮する必要もある。このような基本的要素から離れて、地域経済発展計画の文面を研究したり、そこに描かれた内容を信じすぎたりしたら、正確な結論を出すのは困難であろう。

[中国語原稿をERINAにて翻訳]

参考文献

中国語文献

- 陳宣慶「關於我国区域規画問題的探討」『宏觀經濟管理』Vol. 7、2005年、18～21ページ
- 範恒山「我国促進区域協調發展的理論与实践」『經濟社会体制比較』Vol. 6 (158)、2011年、7～15ページ
- 耿雁氷「13個区域規画依循3条線索」『中国民營科学技術与經濟』Vol. 3、2010年、36～39ページ
- 韓博天「通過實驗制定政策：中国独具特色的經驗」『当代中国史研究』Vol. 3、2010年、104～113ページ
- 胡序威・陳漢欣・李文彦・楊樹珍「積極開展我国經濟区劃与区域規画的研究」『經濟地理』Vol. 1、1981年、15～19ページ
- 李煜興「区域一体化背景下区域規画机制的法学反思」『广西社会科学』Vol. 9、2009年、63～67ページ
- 李文実・黄民生「区域規画的新背景及其应对」『龍岩師專学報』Vol. 5、2003年、41～43ページ
- 李雪飛・張京祥・趙偉「基于公共政策道行畝区域規画研究—兼論中国区域規画的改革方向」『都市發展研究』Vol. 5、2006年、29～34ページ
- 秦嶺「地域經濟学理論与主体機能区規画」『江漢論壇』Vol. 4、2010年、12～15ページ
- 潘榮華・宋煜萍「我国地方政府体制改革路經的反思」『理論探討』、Vol. 4、2009年、21～25ページ
- 尹鴻偉「重慶土改試驗推倒重来」『南風窓』Vol.23、2008年、23～26ページ
- 王永欽・張晏・章元・陳釗・陸銘「中国的大国發展道路—論分權式改革的得失」『經濟研究』Vol. 1、2007年、5～17ページ
- 王欣・吳殿廷「区域規画中信息不对称問題初探」『地域研究与開發』Vol. 2、2004年、7～9ページ
- 吳昊「地方政府治理結構改革与職能轉變—從經濟学視角展開的分析」『學習と探索』Vol. 6、2006年、208～211ページ

日本語文献

- 張可雲「中国が頻繁に地域發展規画を策定する背景、意図及び展望」『ERINA REPORT』No.103、2012年1月、5～9ページ
- 穆克苒「中国における地域開發戰略の実態と課題—『中国閩門江地域協力開發規画要綱』の事例」『ERINA REPORT』No.103、2012年1月、38～51ページ

The Factors in China's Formulating of the Large Number of Regional Development Plans and the Problem Points in Implementing Them

WU, Hao

Vice-Director and Professor, Center for Northeast Asian Studies of Jilin University

MA, Lin

Ph.D. Student, Northeast Asian Studies Academy of Jilin University

Summary

After China entered the period (2006-2010) of the "11th Five-Year Program", and in particular from 2009, the central government formulated and approved a large number of regional development plans. These regional development plans can be divided into the following five patterns, namely: regional development plans of national strategic importance; integrated development plans for key or model regions; reform and development plans for national-level economic "new special zones"; development plans for zones with specially designated functions; and regional development plans formulated by all levels of local government or the related policy documents. That regional development plans have been formulated in large numbers is the result of the promotion of combining "top-down" and "bottom-up" approaches in administrative management. The objectives of the central government are: the reduction of regional disparities; the maintenance of order in regional development; and the accumulating of experience for the sake of nationwide reform. The objectives of local governments are to acquire support for financing, investment projects and frameworks for land usage from the central government, as well as to advertise them to society as local government achievements. As these regional development plans are not legally binding, and in addition the financial resources for their implementation are to be borne by local governments, many of them will not be fully implemented. As the splendid futures depicted in the regional development plans are not necessarily ones that can be realized, in order to research China's regional economies one shouldn't place importance on regional development plans.

[Translated by ERINA]

胡錦濤政権における地域協調発展戦略は成功したのか？

大東文化大学国際関係学部准教授 岡本信広

1. はじめに

2012年は中国にとっても中国共産党にとっても大きな節目の年である。秋に開催される第18回中国共産党大会にて、これまで10年続いた胡錦濤・温家宝体制から習近平を次期総書記とする体制に移行する。胡錦濤政権時代を振りかえると、2003年の「科学的発展観」を提示するとともに、「全面的小康社会の建設」、2004年の「和諧（調和）社会の構築」という目標が打ち出されてきた。胡錦濤色を出した国家運営の中心思想は「和諧（調和）」である。これは経済成長一辺倒から、経済社会環境に配慮したバランスのとれた発展を意味する。

地域開発においても、江沢民政権までは沿海部を中心とする発展、そして取り残される内陸部という二極化の傾向にあった。沿海地域という中国全体の経済発展を支える「中核」と沿海地域の経済をエネルギー面などで支える内陸部（「周辺」という中核-周辺という空間構造ができたのである（岡本2012））。

中国の地域開発は80年代の沿海地域中心の発展から90年代後期の模索期を経て、2000年より内陸開発に力を入れるようになった。1999年に提案され、2000年から本格的に始まった西部大開発から、東北振興、中部崛起と、各地域の開発戦略が打ち出された。その集大成が2006年からの第11次5カ年計画で示された地域協調発展戦略である。

本稿では、約10年間にわたって実施されてきた内陸開発を、その政策目標に照らして効果があったのか、どのようなものであったのか、簡単に数量的評価を試みることを目標とする。この期間は胡錦濤政権による国家運営であったが、胡錦濤政権の政策を評価するものに、大西編（2008）、三浦（2010）や佐々木編（2011）がある。それぞれ網羅的に胡錦濤政権の課題とその対応について論じている。本稿の特徴は、中国の地域開発戦略に焦点をあて、それを簡単な統計分析から政策を評価するという点にある。

本稿は以下の構成をとる。まず、胡錦濤政権時代の党の思想そして地域開発戦略の流れを確認する。これにより地域開発戦略の背後に流れる政策思想を把握する。次に、政策評価についての方法論を論じ、公式統計を用いて地域開発戦略を評価する。最後に結論を述べる。

ここで結論を先取りしておこう。胡錦濤政権の「科学的発展観」、「全面的な小康社会」、「社会主義調和（和諧）社会」というキーワードに表わされる国家の運営思想は、地

域間のバランスのとれた発展に結実する。一人あたりGDPという指標で地域間格差をみれば、格差は縮小し、地域間の分配面での公平は達成しつつある。しかし、国有企業を中心とする政策性投資が内陸の成長をもたらしており、内陸部の「雇用なき」キャッチアップであったのである。

2. 地域協調発展戦略

2.1 中国共産党の指導方針の変化

中国は一党独裁体制であるため、中国共産党の指導の下で中央政府の政策が決定され、実施される。中国共産党の最高議決機関は5年に1回開催される党大会であるが、実際の国家の運営にかかわる方針は、毎年9、10月頃開かれる中央委員会全体会議（中全会と略称される）で決定される。

鄧小平、江沢民、胡錦濤と指導部の代表が替わると、独自の方針が打ち出される。鄧小平が打ち出した改革開放路線を支える彼の重要な講話は鄧小平理論として、江沢民の考えは「三つの代表」（2000年）として表明され、それが党や国家の運営に影響を与えている。

近年の地域協調発展戦略につながった党指導部の思想の変遷について簡単に整理しておく。

第16回党大会（2002年）において、胡錦濤が総書記に就任した。胡錦濤の社会政策の重要な思想は「調和」のとれた経済建設を目指すものである。党大会において「調和（和諧）」という言葉が使われている。

2003年7月28日の講話の中で、胡錦濤は「科学的発展観」という思想を提出する。

2003年10月第16期三中全会で「中共中央の社会主義市場経済体制を完備する若干の問題に関する決定」が提出される。この決定の中で「全面的小康社会の建設」がうたわれるとともに、「五つの統籌（全体を統一的に扱う意。ここではバランス）」が提出される。その内容は都市と農村の発展、各地域の発展、経済と社会の発展、人と自然の調和のとれた発展、国内の発展と対外開放を統一的に企画することであった。経済発展戦略としては、地域のバランスのとれた発展、粗放型ではない環境を意識した産業構造の転換が重要な指導思想となった。

2004年9月第16期四中全会の「党の執政能力建設についての決定」の第7項目で「社会主義調和（和諧）社会を構築する能力を不断に向上する」とうたわれる。これ以降、

「調和（和諧）社会」という言葉が定着し、中国の特色ある社会主義建設の中で、「調和（和諧）社会」は執政の重要な戦略的任務となった。

2005年10月に開催された第16期五中全会では、「国民経済と社会発展の第11次5カ年計画の制定に関する建議」が採択された。「西部大開発を継続し、東北地区等の旧工業基地を振興し、中部地区崛起を促進、東部地区の率先発展を支援する。東中西部の相互の働きかけ、優位性を補い合い、ともに促進して、共同発展の新しい局面をつくる」としている。すなわちバランスのとれた地域開発を目指すことが確認されている。

2006年10月第16期六中全会には、「社会主義の調和のとれた社会（和諧社会）の建設に関する重大問題の決定」が正式に決められた。2020年小康社会への戦略的任務として7つの目標課題が出される。その中に地域や都市農村格差の縮小が入っている¹。

2007年の第17回党大会において「科学的發展観」は共産党の綱領にも入れられた。科学的發展観は、マルクス主義、毛沢東思想、鄧小平理論、「三つの代表」（江沢民）という党の重要な戦略思想の中で同等の位置に、位置づけられたことになる。これは中国の特色ある社会主義發展のために堅持すべき重要な戦略思想となったことを意味する。中国が2020年までに「全面的な小康社会」を建設するにあたっては、「社会主義調和（和諧）社会」建設が党の重要な任務として認識されるようになった。

このように2002年に船出した胡錦濤指導部の重要思想は、「科学的發展観」、「全面的な小康社会」「社会主義の調和のとれた社会」である。これらの概念について整理しておこう。

（a）科学的發展観

この内容は、「人間本位を堅持し、『五つの統籌（統一的規画）』（都市と農村の發展、各地域の發展、経済と社会の發展、人と自然の調和のとれた發展、国内の發展と対外開放を統一的に企画すること）に重きを置き、経済と社会の全面的な調和のとれた持続可能な發展を実現」（第16期三中全会の決定）することであり、経済發展至上主義を反省し、経済社会格差を解消しつつ、資源・エネルギーを節約し、環境生態保護を重視した成長方式への転換を図ることを目指している（田中2006）。

（b）全面的な小康社会

中国では、5つの發展段階を想定している。①貧困社会、

②温飽社会（衣食が満ち足りた状態）、③小康社会（部分的にいくらかゆとりのある社会）、④全面的小康社会（全面的にいくらかゆとりのある社会）、⑤富裕社会、である。全面的小康社会の建設にあたっては、生活の質を高め、貧富の格差をなくし、生活環境を改善することである（孟2012）。これにともなって国家統計局科学研究所は全面的小康社会建設のための指標を作成し、2011年12月19日に統計観測レポートが発表されている²。

（c）「社会主義調和（和諧）社会」の構築

この意味は「民主的法治を進める、公平と正義のある、信義誠実と友愛を旨とし、活力にあふれ、安定的で秩序立った、人と自然が仲良く共存する社会」を指す。ここでは、効率と併せ公平が重視され、「先富」から所得再分配による「共同富裕」への転換が指向される（田中2006）。

このように胡錦濤指導部の重要思想は、「バランスをとること」であり、これが2004年から2006年にかけて定着していき、地域開発戦略としても地域協調發展が第11次5カ年計画の策定に強く反映されていく。

2.2 地域協調發展戦略

1999年に西部大開発がうたわれ、2000年の一年間は、国務院西部開発弁公室によって政策の研究が行われてきた。その間に、共産党による第10次5カ年計画、青海からチベットへの鉄道をはじめとする十大プロジェクト、中西部地区外商投資優勢目録（外資投資優先分野リスト）等が発表されていき、その集大成の結果、2000年12月27日に国務院より「西部大開発の若干の政策・措置に関する通達」が発表された。通達の中で西部大開発の重点任務として、①インフラ建設、②生態環境保護、③農業の基礎固め、④工業構造の調整、⑤観光業の發展、⑥科学技術教育と文化衛生事業の發展があげられている。そして2001年に「西部大開発に関する若干の政策措置の意見」が発表され、政策を具体化する方向が示された。

第10次5カ年計画（2001年～2005年）では、西部大開発を進めることが示されていたが、具体的な内容は特に踏み込まれていなかった。それを踏まえて、2002年に「十五西部開発総体規画」が発表され、2004年には「西部大開発さらに一歩進める若干の意見」が出されて、西部大開発は本格化していく。

一方東北振興では、2002年の第16回党大会において東北などの旧工業基地の改革と改造を急ぐことがうたわれ、

¹ 7項目は以下のとおり。①社会主義民主法制、②地域・都市農村格差の縮小、③就労の保証、④全体的な社会保障体系、⑤行政による公共サービス、⑥健康と道徳の増進、⑦資源効率の向上と生態環境改善。

² 国家統計局科研所（2011）「中国全面建設小康社会進展統計観測報告」2011年12月19日。

2003年10月に「東北地区等旧工業基地の振興戦略の実施に関する若干の意見」が発表された。そして同年12月に国務院東北振興弁公室が設置された。意見によれば主要内容は①大型国有企業の改革、②重化学工業偏重の産業構造の転換、③資源依存している都市経済の再生、である。2007年には国家発展改革委員会より「東北地区振興規画」が公表され、全体像が整理された。

もともと発展していた東部沿海地域に加えて、西部と東北の開発が重点政策テーマとして議論されるようになると、中部地域の開発をどうするかも政策テーマとして注目されるようになる。

2004年の政府工作会議にて温家宝が中部地区崛起を報告したのをきっかけに、2006年「中共中央、国務院中部地区振興促進に関する若干意見」「中部地区振興促進の若干意見に関する関連政策措置の通知」が連続して提出された。その主な内容は、①社会主義新農村の建設、②エネルギー産業の振興、③交通運輸の要としての発展、④都市圏の開発、である。2007年には「中部六省が東北地区等旧工業基地振興や西部大開発政策を実施するに当たっての政策範囲の通知」が発表され、国務院に中部弁公室が設置された。全体の開発計画としては、「中部地域振興促進規画」が2009年に発表された。

この流れを受けて、計画を「規画」と変更した第11次5カ年規画（2006年～2010年）では、地域開発の章を、「西部大開発、東北振興、中部崛起、東部率先発展という地域発展総体戦略」と題し、全体像が公表されたのである³。東北振興、中部崛起などは計画に盛り込まれながらも、具体的な内容は別途検討されており、上記で述べたように、東北振興は2007年に、中部崛起は2009年に全体規画が出されている。

西部大開発から東北振興、中部崛起が提起されるように

なって、中国全土で開発戦略が実施されることになった。現在の中国における地域開発戦略は中国では「1334フレームワーク」としてとらえられている（張・候2008、p.38）。その内容は、1つの全体要求（総体的要求）、3つの基本環境、3つの対象、4つのメカニズムである。

1つの全体要求とは、地域開発の大きな要求はあくまで地域間の均衡を考慮した協調的発展である、ということを目指す。これが国家目標である。

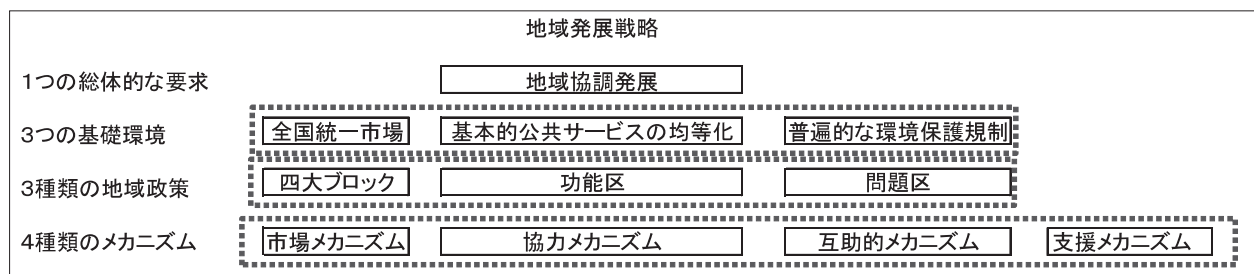
3つの基本環境とは、各地域に公平な経済環境を提供する、ということである、具体的には、①地域性の市場ではなく全国市場を統一すること、②どの地域であっても基本的な公共サービスは共通であること、③環境保護はどの地域でも適性にあった規制がなされること、の3つである。

3つの対象とは、地域開発のための対象地域を3種類用意していることを示す。一つ目は全国の各省を4大ブロックに分けて、各地域の実情に適した戦略を実施するということ。二つ目は主体機能区として最適開発区、重点開発区、開発制限区、開発禁止区の4種類に分けて国土空間を管理する。三つ目は貧困地域、資源枯渇地域などの各種問題地域である。

4つのメカニズムというのは、協調発展を達成するためにどのようなメカニズムを採用するか、ということである。地域の協調発展を目指す上で、利用する経済メカニズムは、市場、協力、互助、支援の4つを提示している。

2000年代の地域開発戦略を振り返ると、江沢民後期の2000年前後を境に、内陸開発の重要性が指摘され、開発政策が実施されるようになった。東北振興、中部崛起も提起されるようになり、2005年、2006年と地域協調発展戦略が地域開発の基本方針となった。この地域協調発展戦略は、共産党指導部の思想でも確認したように、地域格差の解消とバランスのとれた発展が目的である。

図1 地域協調発展戦略の枠組み



(出所) 張・候2008、p.38

³ 国土開発方針では、4つの主体機能区に分けて開発することが謳われている。「全国主体機能区規画」とは各地域を環境容量によって4種類に分類し、分類に合わせた開発を進めていくという規画である。すでに開発が進んでおり、環境容量が減少し始めている地域は環境制約の中で最も適した形で開発する「最適開発区域」、環境容量に余裕があり、経済・人口などの条件も優れている地域を「重点開発区域」、環境容量が低い地域を「開発制限区域」、自然保護区を「開発禁止区域」と分類する。

3. 地域協調発展戦略の評価

3.1 政策評価の考え方

中国共産党の国家を導いていく方向について、そして政府が実行する政策について評価を行うことは容易ではない。これらの指針や方向はある種の主観的価値観である。経済学では価値観を評価することはできない。ただし価値観達成のために実施する公共政策は評価できる。

公共政策の目的は一般に社会の厚生最大化である。社会を構成する個人の効用をすべて足し上げて、社会的に最大化できるような政策が厚生を最大化する政策である。これは経済学でいうパレート最適の概念である。パレート最適とは、他の誰の効用を下げない限り個人の効用を上げることができない状態である。

社会の厚生を最大化するために実施された公共政策は実際に社会厚生に最大化に貢献できたかどうかである。厚生最大化を考えるにあたっては、費用と便益が考慮される。海岸の渋滞を解消しようとして有料道路を設置する、大きな駐車場を設置するなどの政策が考えられるが、それによって用地を買収する、用地を借りる、道路建設費用がかかるなどの費用を考慮する。そして渋滞が解消することによって地域住民の生活が改善するという便益を比べて、もっとも費用が少なく便益が大きいものが公共政策として社会厚生を最大化する政策として考えられるのである（井上2005）。

社会の厚生最大化という目的は効率を目指したものである。何かを達成するためにどのようなものももっとも効率的かを考えている。一方で、富の分配も社会の厚生最大化をもたらすものであるが、これは難しい。1,000ドルを山分けしようとしても、お金持ちの1ドルの価値と貧乏人の1ドルの価値は違うからである（ウィンター2009）。

胡锦涛政権の「科学的発展観」「全面的な小康社会」「調和（和階）社会」というキーワードが示している思想は主観的である。その思想が具体化した政策は所得の公平性に関わっているため、単純な費用便益でその効率性を評価するのは適切ではない。ここに地域協調発展戦略の評価の難しさが存在する。

龍・佐々木（2000）は政策評価の手法を教科書的にまとめている良書である。やはりここでも、経済学が公共政策を評価する手法の基本は、費用便益分析である、としている。他にも政策の事前事後を分析するもの、クロスセクション、時系列、パネル分析などがあげられている。

本節では、統計資料にもとづき、地域協調発展戦略が打ち出される2005年を主な境として、事前事後を意識しながら政策を評価する。ただし、この地域協調発展戦略は、社会厚生を最大化というよりも地域間格差の縮小という分配公平面での評価が必要である。したがって単なる費用便益分析が有効というわけではない。ここでは、政策の事前事後の変化、公平面という観点から評価を行っていく⁴。

3.2 格差は縮小したか？

地域間格差がどうなったか、図2で確認してみよう。図2は改革開放以降の全国、各地域内、地域間の格差の動きを示している。縦軸は変動係数を表している。変動係数とは、各地域の一人あたりGDPの平均をとり、各地域がその平均からどれだけ離れているかを示すものである。数値が大きいと格差が大きいのを示す。

地域間格差の流れは、1980年代に縮小に向かい、1990年代から2005年頃まで一貫して格差は拡大してきた。しかし2005年頃から急激に格差は縮小しており、変動係数でみれば限り、中国全土を4地域に分けた地域間格差および31省市自治区間格差は2010年でもっとも小さいものとなっている。

ただし、沿海部の中の格差動向と全体の傾向が類似しており、沿海部内での格差縮小が全体の格差縮小をもたらしている。また西部内部では省間で格差が拡大していることに注意する必要がある。

新古典派経済成長論の「収束（Convergence）」という観点から格差縮小の動向を確認する。収束とは、経済発展が遅れている地域ほど経済成長率が高く、将来的には地域間の格差は収束するという考えである。収束概念では条件付き収束もあるが、ここでは無条件で収束傾向にあるかどうかをみる「絶対収束」をみてみよう。絶対収束は、経済水準が遅れているほどキャッチアップ（成長）が速いという仮説を直感的にみるには便利である。各省の2000年の一人あたりGDPを横軸に各省の10年間、5年間の平均成長率を縦軸に、各省をプロットしてみたのが図3である。これが右下がりになると経済水準が低い地域ほど経済成長率が高いことを意味し、収束してきていることを示す。

2000年の一人あたりGDPを基準にしての10年間では収束は観察されない。岡本（2008）では1996～2002の期間を見てみたが、かろうじて右下がりだったことが確認されている。発展が遅れている地域は発展がはやいという単純な関係にはないということである。ただし、2005年から2010

⁴ 厚生経済学では、市場での自発的取引の結果、パレート最適になることが示されるが、それが公平性を保障しないことはあきらかになっている。公平性は主観的価値の部分でもあるが、格差縮小という観点からの政策評価はある程度可能であろう。

年までの第11次5カ年計画期間を見てみると、一人あたりGDP（2000年）と成長率ではかろうじて右下がりになり収束傾向が観察されている。

収束を各省ごとにみるため、経済水準と成長率の順位を利用して、経済水準－成長指数を作ってみた。これは経済水準（一人あたりGDP）と経済成長率の全国での順位を比較して、経済水準は低いが経済成長率が高いというキャッチアップしている省はプラスになるようにしている。具体的には、経済水準と経済成長率の全国での順位を中位数（ここでは15）から引いて、その省が全国の真ん中より上位にあるのか下位にあるのかを示す。これを全国での位置づけ数とする。そして経済成長率の位置づけ数から経済水準の位置づけ数を引くことによって、経済水準に比べて成長が速かったかどうかを全国の中で位置づけることができる。

例えば、北京の場合、経済水準は全国で2位であるが、成長率は全国で18位であった。この場合全国での中位数は15、経済水準の位置づけ数は13（15－2）と経済成長率は－3（15－18）になる。経済水準－成長指数は－3－13＝

－16となる。この数値がマイナスの場合、経済水準に比べて経済成長率は低いことになり、この期間全国での位置づけは低下したと言える。一方、この数値がプラスの場合、経済水準に比べて経済成長率は高いことになり、キャッチアップが進んでいることを示している。

データをみてみると、沿海部内部での収束が顕著であるといえよう。北京、河北、上海、浙江、福建が経済水準に比べて成長が遅い。天津、江蘇、山東の成長が相対的に速い。これらの沿海地域内で格差縮小が全国データでみた格差を縮小させてきたといえそうである。

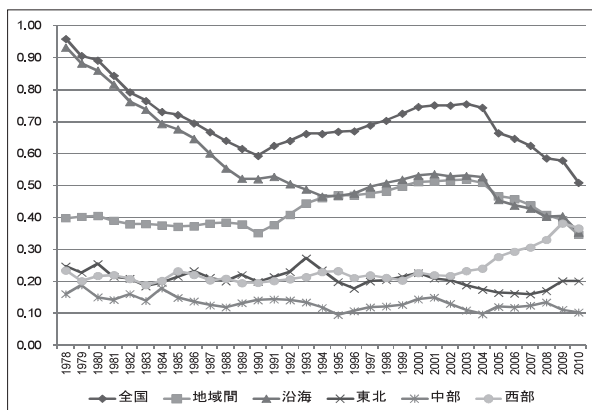
地域間の平均でみると沿海部の地位が低下し、西部の地位が上昇している。最も遅れていた西部の成長が加速することによって地域間の格差も縮小の方向に動いたといえる。東北では吉林が成長を加速させてきたが、遅れている黒龍江の発展が遅い。

西部では、全体としては遅れた地域は速い成長を実現し

表1 経済水準－成長指数

| 沿海 | 東北 | 中部 | 西部 |
|--------|---------|-------|---------|
| 北京 -16 | 遼寧 -4 | 山西 1 | 内モンゴ 15 |
| 天津 1 | 吉林 6 | 安徽 -2 | 陝西 24 |
| 河北 -15 | 黒龍江 -18 | 江西 8 | 甘肅 1 |
| 上海 -22 | | 河南 2 | 青海 14 |
| 江蘇 3 | | 湖北 -8 | 寧夏 2 |
| 浙江 -6 | | 湖南 0 | 新疆 -18 |
| 福建 -7 | | | 広西 9 |
| 山東 4 | | | 重慶 11 |
| 広東 -1 | | | 四川 12 |
| 海南 -11 | | | 貴州 4 |
| | | | 雲南 -5 |
| | | | チベット 16 |
| 平均 -7 | -5 | 0 | 7 |

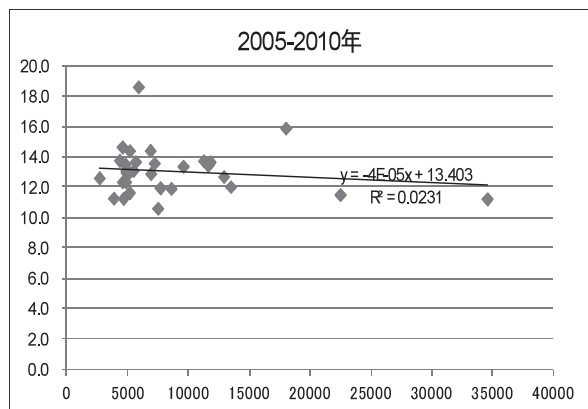
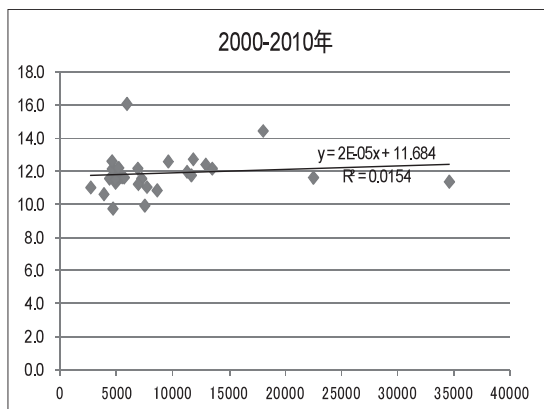
図2 中国における地域間格差の変化（1978年～2010年）



(出所) 中国統計年鑑各年版より筆者作成

(出所) 図2に同じ

図3 絶対収束（2000年～2010年）



(出所) 図2に同じ

てきた。ただし、陝西のように急速に成長している地域と新疆のように取り残されている地域もあり、とくに西北地域内での格差が西部全体の格差を広げているといえよう。

3.3 資本投資からの評価

地域協調発展戦略において重要なのは、投資の動向である。中国経済の原動力は投資である。どれだけの投資がなされ、どれだけのGDPが生み出されたのか。費用対便益の観点からみてみよう。

まず、全社会固定資本投資の地域別配分を見てみると、沿海の配分が2005年を境に大きく減少しており、東北、中部、西部ともに固定資本投資のシェアは徐々に上昇してきた。

政策性の投資として国有経済の投資動向を見てみよう。国有資本の固定資本投資は沿海から内陸に移動している。1999-2002の沿海シェアは約50%であり、2008-2010には35%にまで低下した。国有資本の内陸投資シフトはあきらかであり、とくに西北地域のシェア拡大がもっとも大きい。資源開発等の資本投資がみてとれる。

政策による投資環境の変化に反応する外資企業はどうか。外資系企業の資本投資は沿海が中心である。約8割が沿海であり、現在でも約6割以上が沿海に投資されている。政策性の国有資本と違って、外資系企業の内陸投資の移動は遅い。それでも東北と中部のシェアは国有資本とほぼ同じである。外資系企業の投資は西南と東北へのシ

表2 固定資本投資の変化（3年平均）

| 項目 | 99-01 | 02-04 | 05-07 | 08-10 |
|------------|-------|-------|-------|-------|
| 国有経済固定資本投資 | | | | |
| 沿海 | 49.1% | 45.7% | 39.6% | 35.5% |
| 東北 | 8.1% | 8.5% | 11.4% | 11.6% |
| 中部 | 19.7% | 20.2% | 21.2% | 21.9% |
| 西北 | 9.8% | 11.5% | 13.0% | 14.0% |
| 西南 | 13.3% | 14.1% | 14.8% | 16.9% |
| 外資固定資本投資 | | | | |
| 沿海 | 78.6% | 78.2% | 74.6% | 66.2% |
| 東北 | 5.6% | 7.0% | 9.1% | 12.5% |
| 中部 | 9.8% | 9.4% | 8.7% | 11.2% |
| 西北 | 1.2% | 1.3% | 2.2% | 2.9% |
| 西南 | 4.8% | 4.2% | 5.3% | 7.2% |
| 全社会固定資本投資 | | | | |
| 沿海 | 55.6% | 54.3% | 49.8% | 43.7% |
| 東北 | 7.2% | 7.9% | 10.6% | 11.9% |
| 中部 | 17.7% | 17.7% | 19.3% | 22.3% |
| 西北 | 7.6% | 8.3% | 8.6% | 9.3% |
| 西南 | 11.9% | 11.7% | 11.7% | 12.8% |

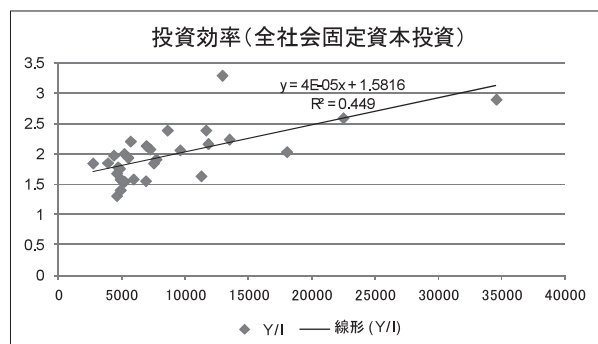
(出所) 図2に同じ

フトが目立つ。

次に、投資効率をみてみよう（図4～図6）。図は、10年分（2000年-2010年）のGDPの合計を同じ期間の全社会固定資本投資の合計で割ったもの（どちらも実質値）を縦軸とし、横軸は2000年の各省一人あたりGDPである。そして各省の数値をプロットした。

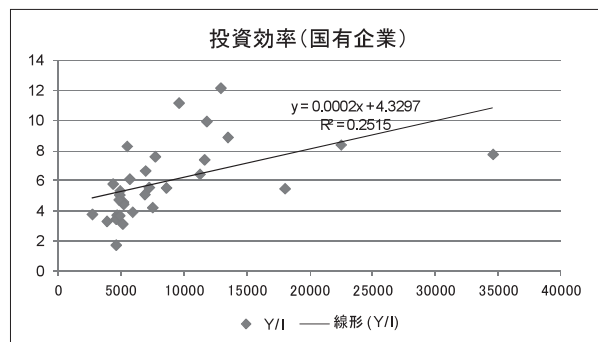
図4は国有企業や集団所有、株式制などさまざまな所有制を含んだ合計の全社会固定資本投資の投資効率を示す。各省の平均は1元の固定資本投資で1.964元のGDPを生み出している。全社会固定資本投資の投資効率は、一人あたりGDPが高い地域ほど高い。つまり発展が遅れている地

図4 投資効率（全社会固定資本投資）



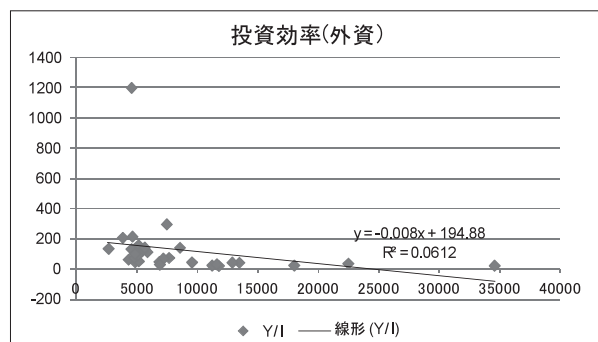
(出所) 図2に同じ

図5 投資効率（国有企業）



(出所) 図2に同じ

図6 投資効率（外資系企業）



(出所) 図2に同じ

表3 2000年から2010年までの就業者数変化 (万人)

| 年度 地域 | 2000-2005 | | 2005-2010 | | 全期間合計 | |
|----------|-----------|-----|-----------|-----|--------|-----|
| | 増加就業者数 | 伸び率 | 増加就業者数 | 伸び率 | 増加就業者数 | 伸び率 |
| 沿海 | 2,891 | 13% | 4,523 | 21% | 7,414 | 34% |
| 東北 | 211 | 5% | 552 | 14% | 763 | 20% |
| 中部 | 797 | 4% | 1,918 | 11% | 2,715 | 15% |
| 西北 | 406 | 8% | 438 | 8% | 844 | 16% |
| 西南 | 777 | 6% | 1,401 | 11% | 2,179 | 17% |
| 全国 | 5,082 | 8% | 8,833 | 14% | 13,915 | 22% |

(出所) 図2に同じ

域の投資効率は低く、発展がはやすい地域の投資効率は高い。

国有企業の投資効率がまったくほぼ同じ傾向にある(図5)。全社会固定資本投資の約6割を国有企業が占めており、国有企業の投資動向は全社会固定資本投資の動向に影響を与える。一人あたりGDPの低い内陸部の投資効率はあまりよくないことがわかる。一方外資系企業の固定資本投資は反対に遅れている地域の投資効率はやや高く、先進地域の投資効率は小さい(図6)。外資系企業では、内陸部に投資するのは沿海部よりも投資効率がよくないと投資を実行しないという経済原理が働いている。日本の分析においても、一般に政府投資と民間投資に分けて考えた日本の投資効率でも、民間の投資効率は図6とほぼ同じになる(原2007)。国有企業の投資が政策性を帯びており、外資系企業は市場メカニズムの原理で投資している、という行動原理の違いが表われている。国有企業は投資収益に関係なく内陸投資が実行されており、外資系企業は内陸部であっても投資収益が高いために内陸で投資が実行されている。

3.4 就業と所得の再分配

就業者数についてみてみよう(表3)。2000年から2010年にどれだけ就業者が増加したか増分だけを地域別に見てみると、この期間に全国で約1億4千万人の雇用が生み出されたが、半分以上の7,400万人が沿海地域である。また沿海地域の伸び率は30%以上と全国平均よりも高く、雇用は沿海で生み出されている。内陸の就業者伸び率では、東北が20%、中部、西部が約15~17%程度であり、沿海の半分にも満たない。

格差が縮小しはじめた2005年を境にみても傾向は同じである。沿海部の雇用は半分以上を占めており、内陸は「雇用なき」成長であったということがいえる。また内陸の経済発展は沿海の雇用を生み出しているともいえるかもしれない。

政策評価として再分配効果を考えてみる。1999年、2000

表4 GDPの再分配効果 (億元)

| 地域 | 予測値 - 現実値 |
|------|-----------|
| 沿海 | -248,415 |
| 東北 | 64,143 |
| 中部 | 65,690 |
| 西北 | 25,697 |
| 西南 | 13,917 |
| 中国全体 | -78,969 |

(注) 1999-2000年の投資構造で2000年から2010年の10年間投資されたと仮定して得たGDPから現実のGDPを引いたもの。

(出所) 図2に同じ

表5 GDPシェアの変化 (3年平均)

| 地域 | 99-01 | 02-04 | 05-07 | 08-10 |
|----|-------|-------|-------|-------|
| 沿海 | 53.5% | 55.5% | 55.8% | 54.3% |
| 東北 | 8.3% | 7.9% | 7.9% | 8.5% |
| 中部 | 20.5% | 19.2% | 18.9% | 19.2% |
| 西北 | 6.3% | 6.6% | 7.0% | 7.6% |
| 西南 | 11.4% | 10.9% | 10.4% | 10.4% |

(出所) 図2に同じ

年の地域間投資配分がそのまま沿海中心であるとして⁵、2010年まで投資されたとする。その投資額に各地域のGDP/投資(投資効率)をかけることによって仮想的な10年間のGDPを計算する。現実のGDPから得られた仮想GDPを引くことによって、投資が内陸に移動することによって、所得の地域間再分配がどれだけ行われたかをみる。

計算結果をみると(表4)、沿海地域から内陸地域への投資構造が変化していくことによって、この10年間沿海から内陸(東北、中部、西部)への再分配は確実に行われた。沿海は24.8兆元減少し、内陸部に約17兆元のGDPが増えることになった。中国全体としてみれば約7.9兆元のGDPはマイナスであるが、これは沿海の投資効率が高いために「効率」は犠牲になったが「再分配」には効果があったということができる。

実際、一人あたりGDPではなく、各地域のGDPシェア

⁵ 1999年に西部大開発が提起され、2000年に政策が検討されたので、この2年の地域間投資配分を初期値として考えた。

をみると、ほとんど変化していない。ここからも投資が地域間移動してもGDP規模に影響を与えておらず、投資効率が低かったことを示唆している。ただしあえていうならば成長著しい陝西、内モンゴル、青海を含む西北地域は若干上昇している。

4. おわりに

胡錦濤政権の指導方針「科学的発展観」「全面的な小康社会」「調和（和階）社会」から政策として結実した地域開発は地域協調発展戦略であった。「科学的発展観」とは、成長一辺倒ではなくバランスのとれた発展が必要という考え方であり、「全面的な小康社会」においては地域間の所得バランスが成り立って初めて可能であり、それにより「調和（和階）社会」が実現可能になる。したがって、この時期の地域協調発展戦略の政策目標は地域間の所得再分配という側面をもつ。

本稿では、地域間の格差縮小や所得再分配という観点に焦点をあてて、2005年前後を政策の境目として、政策評価を行なった。

地域間格差を縮小するという目標はある意味達成されてきていると言える。その中身をみると、沿海地域における先進地域（上海、広東、北京）などの成長スピードが低下し、新興地域（山東、江蘇、天津）などの地域の成長が追いつき、沿海内部で格差が縮小したこと、また西部地域の成長が促進されることによって4大地域間（沿海、東北、中部、西部）の地域間格差も縮小してきたことがわかる。キャッチアップについても、2005年以降内陸部と沿海部の格差は若干ながら収束傾向にある。ただし、省レベルで見ると地域内では格差が目立つ。東北では遅れている黒龍江、旧工業地域として中心的役割を果たした遼寧の発展は芳しくない。西部内部でも陝西、四川などでは内陸開発効果が現れているが、新疆や雲南といった地域で発展が取り残されている。

投資の地域間シェアをみると、沿海地域から内陸地域へ重点がシフトしてきた。国家の政策が反映しやすい国有企業の固定資本投資は沿海から内陸へ移動してきた。とくに2005年を境に固定資本投資の移動は大きい。国有企業は中央政府の政策変化に敏感かつ政策投資の実行主体である。ただし、投資効率で見た場合、一般に遅れた地域の投資効率は悪く、国有企業も同様の傾向が見られる。外資企業は反対に内陸部での投資効率が高いので内陸にシフトしてきたともいえそうである。

就業機会をみると、雇用の多くは沿海地域で生みだされた。投資が内陸部に移動しているにもかかわらず、内陸部

の雇用が上昇していないことをみると、2005年以降の格差縮小はまさに投資主導で成し遂げられたといえる。内陸部の沿海部へのキャッチアップは「雇用なき成長」によってもたらされた。

GDPの地域間再分配効果では、投資を内陸部に移転した結果の所得再分配効果はたしかに存在した。しかし、沿海主導の投資が行われていれば、中国全土で7兆9千億元が生み出されたはずであった。公平性を追求した結果、中国全土の経済発展の効率性は犠牲にされたといえるであろう。

今後の中国は、当面公平性を重視した成長を目指すこととなるであろう。中国政府が発表した2012年7-9月期のGDPの伸び率は、実質で前年同期比7.4%であり、2四半期連続で8%の大台を割った。海外メディアは「中国経済の減退か」と騒ぎ立てているが、中国は、今年の経済成長率の目標を7.5%にしているし、成長（効率性）から再分配（公平性）へ重点が移動していることが本稿の分析からも裏付けられている。したがって、中国経済は成長一辺倒という量的成長から地域間の構造転換という質的転換を成し遂げようとしている。

日本は、中国がすでに成長の中身を重視する転換期に入っているという観点が必要である。沿海部は中国の経済成長を支える支柱であるのは確かだが、内陸部への投資という流れは当面変わらない。北京、上海、広州、といった沿海大都市における投資機会の収益は減りつつある。中国政府が地域協調発展戦略を堅持する限り、沿海部ではなく、内陸部にビジネスチャンスがあるのは間違いない。

参考文献

- 井上裕『まちづくりの経済学-知っておきたい手法と考え方』（新版）、学芸出版社、2005年
- 大西康雄編『中国調和社会への模索-胡錦濤政権二期目の課題』（情勢分析レポートNo. 9）、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2008年
- 岡本信広『中国の地域経済-空間構造と相互依存』、日本評論社、2012年
- 佐々木智弘編『中国「調和社会」構築の現段階』（アジア研究選書24現代中国分析シリーズ5）、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2011年
- 関志雄「『全面的な小康社会』への布石となる『第11次5カ年計画』」『実事求是』、
(<http://www.rieti.go.jp/users/china-tr/jp/ssqs/051024ssqs.htm>、2011年2月26日アクセス)
- 田中修「中国第11次5カ年計画の研究-第10次5カ年計画との対比において」、内閣府経済社会総合研究所 ESRI

Discussion Paper Series No.170、2006年
(http://www.esri.go.jp/jp/archive/e_dis/e_dis170/e_dis170.html、2011年2月26日アクセス)
原勲『地域経済学の新展開 改訂版』、多賀出版、2007年
ハロルド・ウィンター『人でなしの経済理論－トレードオフの経済学』(山形浩生訳)、バジリコ、2009年
三浦有史「胡錦濤政権の理想と現実－第11次5カ年計画の達成度を評価する」『環太平洋ビジネス情報RIM』、日本総合研究所、Vol.10、No.37、2010年、48～83ページ
(<https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/report/rim/>

[pdf/4968.pdf](#)、2012年6月24日アクセス)
孟健軍「2020年全面的小康社会への展望」、RIETI Discussion Paper Series 12-J-009、経済産業研究所、2012年 (<http://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/12j009.pdf>、2012年7月19日アクセス)
龍慶昭・佐々木亮「『政策評価』の理論と技法」、多賀出版、2000年
張軍・侯永志『協調区域発展－30年区域政策与発展回顧』、中国發展出版社、2008年

Has the Regional Coordinated Development Strategy of the Hu Jintao Administration Been Successful?

OKAMOTO, Nobuhiro

Associate Professor, Department of International Relations, Daito Bunka University

Summary

In this paper I undertook an evaluation of policy, looking at the time around 2005 as the boundary for policy, and focusing on a viewpoint of the reduction of disparities among regions and the redistribution of income.

The objective of reducing the disparities among regions can be said to have been achieved in a certain sense. Looking at the detail thereof, the pace of growth in the advanced regions (Shanghai, Guangdong and Beijing), etc., in the coastal areas has decreased, the regional growth of the emerging regions (Shandong, Jiangsu and Tianjin), etc., has been catching up, and it can be understood that the disparities have reduced in the coastal hinterland, and in addition that the interregional disparities among the four major regions (the East Coast, Northeast China, Central China and Western China) have reduced via the promotion of growth in Western China. Regarding catch-up also, the disparity for the inland and coastal areas from 2005 has been on a convergent trend. Viewed at the provincial level, however, intraregionally the disparities stand out. In the Northeast, the development of Heilongjiang, which is lagging behind, and of Liaoning, which played a central role as a former industrial region, is poor. In Shaanxi and Sichuan, etc., within Western China, the effects of the development of the interior are apparent, but in regions such as Xinjiang and Yunnan development has been left behind.

Taking a look at the share of investment among regions, the emphasis has shifted from the coastal areas to the interior areas. The fixed capital investment in state-owned enterprises which readily reflects national strategy has moved inland from the coast. In particular the movement of fixed capital investment since 2005 has been great. State-owned enterprises are sensitive to central government policy changes and are agents for the execution of policy investment. In the case of looking at the efficiency of investment, however, generally the efficiency of investment of the regions which have lagged behind is poor, and a similar tendency is seen for state-owned enterprises also. Conversely for foreign-invested enterprises, it can be said that they have shifted to the interior, because the efficiency of investment in the interior is high.

Looking at employment opportunities, much employment was created in the coastal areas. Looking at the fact that employment in the interior has not risen, in spite of investment moving to the interior, the reduction in disparity from 2005 can be said to have no doubt been accomplished through the lead of investment. The interior's catching-up with the coastal areas was brought about by "growth without employment".

In terms of the effects of the redistribution of GDP among regions, there was certainly the effect of income redistribution as the outcome of investment having moved to the interior. If coastal-driven investment had been carried out, however, 7.9 trillion yuan should have been created throughout China. The results of having pursued equity can probably be said to have been that the efficiency of economic development throughout the country has been sacrificed.

The GDP growth rate for April-June 2012 announced by the Chinese government was 7.6% in real terms compared with the same period for the previous year, and for the first time in approximately three years dropped below the 8% level. The overseas media made a lot of noise that "Good Heavens, is the Chinese economy in decline?", yet China has set its economic growth rate target for this year at 7.5%, and that the emphasis has moved from growth (efficiency) to redistribution (equity) is backed up by the analysis in this paper.

[Translated by ERINA]

中国における地域発展戦略の策定プロセス－黒龍江省の事例

黒龍江省社会科学院北東アジア研究所長、研究員 笹志剛

はじめに

中国の改革開放30年余りの発展の歴史を見ると、特定地域における全体的、持続的、協調的な発展を行うための地域発展戦略は、地域の経済成長にとって重要且つ独特な役割を果たしてきた。地域発展戦略は、計画経済の均衡発展戦略から、計画・市場併存の非均衡的発展戦略、そして市場経済の協調的発展戦略に変化してきたが、発展戦略そのものは中国の改革開放を終始貫いている。現在の中国では、東部・中部・西部・東北部の4大地域ブロックが形成され、沿海地域・沿江地域・内陸地域の協調的発展が進められており、その中で地域発展戦略は重要な役割を果たしている。地域発展戦略の策定状況を見ると、1978年に改革開放戦略を実施し、翌年の1979年に深圳・珠海経済特区戦略を打ち出してから、直近の2012年9月に、国家發展改革委員会が「黒龍江と内モンゴル自治区東部の一部地域における沿辺開放帯規画」を承認し、現時点で同戦略の最終検討段階に入ったことまで、30年余りの間で、中央政府承認の国家級または準国家級の各種地域発展戦略は30件を超え、各地域が策定した省級の地域発展戦略も含めると100件¹を超えると推測する。このように、全面的、重層的、多分野にわたる地域発展戦略の策定と施行は、中国経済の適切な空間的配置、持続的な発展と社会の調和に大きく貢献しているに違いない。

一方、地域発展戦略件数の増加、重要性の増大及び実施効果の拡大に伴い、地域発展戦略の有効性と問題点の両方が表れるようになり、特に、策定プロセスの公開、透明性の確保及び科学的・民主的・効率的な政策決定が求められている。策定プロセスの改善は地域発展戦略の重要な課題となっている。現状では、国家發展改革委員会、財政部、商務部、工業・情報化部、農業部、国土資源部、環境保護部等の省庁が、国家級発展戦略の策定を担っており、その機能が強化されている。また、大学の研究者とシンクタンクの専門家による諮問的な役割も重要視されつつある。地域発展戦略の策定に関わる論証会（審議会）、聴証会（公聴会）等も行われている。

本稿は、地域発展戦略の策定の学術性、客観性を確保す

るための必要条件を検討しながら、黒龍江省における「哈大齊工業回廊建設規画」、「綏芬河総合保税區規画」、「黒龍江と内モンゴル自治区東部の一部地域における沿辺開放帯規画」に焦点を当て、その策定プロセスとメカニズムを明らかにする。また、政府、研究者、公衆のそれぞれの役割を検討し、地域発展戦略の策定の影響要因を分析する。最後に、地域発展戦略の策定に対して全体的な評価を行ったうえ、その課題と問題点を指摘する。

1. 黒龍江省の地域発展戦略の策定状況と役割

黒龍江省は、近年著しい経済成長を遂げているが、国家級と省級の地域発展戦略はそれに対して牽引的な役割を果たしている。中央政府は、2003年10月に東北振興戦略を打ち出し、2009年4月に綏芬河総合保税區を承認した。2012年7月には「黒龍江と内モンゴル自治区東部の一部地域における沿辺開放帯規画」も立案された。黒龍江省内では、8大経済区等の省級地域発展戦略が策定された。表は、近年の黒龍江省における地域発展戦略の策定状況を示している。

地域発展戦略の施行では、黒龍江省が中央政府から政策支援、資金援助、建設プロジェクト支援を獲得し、関連する投資波及効果を得ることができた。発展戦略により、黒龍江省は改革開放と経済成長を促進するための新しいチャンスを手に入れたと言えよう。地域発展戦略の施行は、貿易と投資を拡大し、産業の国際化を促した。その結果、黒龍江省は東部地域との経済格差を縮小し、地域内総生産（GRP）が拡大し、経済社会の大きな発展を遂げた。

地域発展戦略の策定と施行には、地方政府・シンクタンク・企業・マスコミ・公衆等が参加し、幅広い検討と不断の改善が行われている。地域発展戦略の科学性、目的性、実行性が向上し、策定者と施行者との関係がより公平・公開・合理的な方向に向かって進んでいる。地域発展戦略は政府の独断で行うというイメージが徐々に払拭され、政府・企業・大学・シンクタンクが協力し、共同で策定するようになりつつある。

¹ 地域発展戦略の件数については筆者の試算である。その中には、①西部開発・中部崛起・東北振興・東部率先發展等の国家戦略、②深圳特区・浦東新区・濱海新区等の経済特区、国家級開放開放新区、国家総合改革実験区、③黒龍江省8大経済区戦略・哈大齊（ハルビン市－大慶市－チチハル市、以下同じ）工業回廊等の省級地域発展戦略等が含まれている。

表 2003年から現在までの黒龍江省の国家級・省級の地域発展戦略

| 公表時期 | 発展戦略の名称 | 主な内容 | 全体評価 |
|----------------|---|--|---|
| 2003年 10月 | 東北地区等旧工業基地の振興戦略の実施に関する若干の意見(略称:東北振興戦略)(国家級) | 東北地区における旧工業基地の改造・調整を行い、当該地域の更なる改革開放を促進し、経済全体の発展を促す。当該地域を中国経済成長の「第4極」に発展させる。 | 政策と措置の連続性が認められる。東北地域の経済成長率は全国平均を上回り、その効果が評価できる。黒龍江省政府は関連の省級の地域振興計画を打ち出した。 |
| 2005年 | 哈大齊工業回廊建設規画(省級) | 15年間の間に、ハルビン市、大慶市、チチハル市を強い産業競争力を持つ黒龍江省の工業回廊地域に発展させる。 | 全体的には順調に施行されているが、国家級への昇格は頓挫した。 |
| 2007年 8月 | 東北振興規画 ² (国家級) | 内モンゴル自治区東部地域を含む「東北経済区」の概念を初めて提起した。「11次5カ年規画」期間を実施重点期間としているが、重要なプロジェクトについては2020年まで継続させる。 | 東北地区における地域間の連動的発展を促した点において評価できる。黒龍江省政府は東北振興「11次5カ年規画」と「12次5カ年規画」を打ち出した。 |
| 2008年 10月 | 8大経済区と10大プロジェクト戦略(省級) | 哈大齊工業回廊建設区、哈牡綏東 ³ 対ロシア貿易加工区、東北アジア経済貿易開発区等の8つの経済区、10件の民生プロジェクトを確定した。 | 経済規模が拡大し、経済の質も改善した。省内10大産業の形成に貢献し、域内GRPの成長と交通インフラの整備に牽引的な役割を果たした。比較的成功的な省級発展戦略と言える。 |
| 2010年 12月 | 大・小興安嶺林区の生態保護と経済モデル転換規画(国家級) | 経済発展方式の転換、林業地域における経済モデルの転換、環境に優しい産業の育成、森林面積の拡大等。 | 大・小興安嶺地域の生態機能が改善した。中国最初の低炭素・環境に優しい機能区である。 |
| 2009年 4月 | 綏芬河総合保税區(国家級) | 綏芬河を黒龍江省の海への出口とし、北東アジア輸出入商品の集積地に発展させる。ロシア、日本、韓国との国際協力のグレードアップを促す。 | 2010年8月に中央10省庁の認可により運営開始し、以降は順調である。綏芬河市が黒龍江省政府の直轄市に昇格した。 |
| 2012年 末(予測) | 黒龍江と内モンゴル自治区東部の一部地域における沿辺開発開放帯規画(国家級) | 綏芬河－満洲里間鉄道沿線地域の工業配置と物流面の優位を活かし、ロシア等の北東アジア諸国に開放する。全国の国境開放地域に占める東北地域、特に黒龍江省・内モンゴル自治区の地位を高める。 | 東北地域の北部における国家級の発展戦略である。北東アジア諸国とより高いレベルの地域協力が促進される。 |

出所：黒龍江省人民政府 (<http://www.hlj.gov.cn>, 2012年10月1日アクセス) と黒龍江省商務庁 (<http://www.hljswt.gov.cn>, 2012年10月10日アクセス) ホームページより筆者作成

2. 地域発展戦略の策定における学術性・客観性の確保

地域発展戦略の策定においては、理論的、学術的な根拠が研究者に提供され、地域発展戦略の科学性、先見性及び実行性を保障している。したがって、策定過程における理論面の検討、科学的な議論、内容の適切な構成は極めて重要である。この点については、政府が主観的に策定する発展戦略でも実態経済に求められる発展戦略でも同様である。黒龍江省では、ほぼすべての地域発展戦略の策定において理論面での研究者の貢献が含まれている。特に、基礎理論を現実に応用する研究については、地域発展戦略の質を保障するための重要な条件となっている。以下、3つの側面から発展戦略の学術性・客観性を保障する条件を検討する。

2.1 地域発展戦略の理論的根拠

行政担当者と研究者は、地域発展戦略のマクロ的目標について共通認識を持っているため、地域発展戦略の策定における理論的な支えの必要性は、行政担当者にも認められている。研究者の分析によって、理論と現実との関連性と矛盾点が明らかにされ、それが地域発展戦略の策定にとって極めて重要なことになっている。黒龍江省における「哈大齊工業回廊建設規画」、「綏芬河総合保税區規画」、「黒龍江と内モンゴル自治区東部の一部地域における沿辺開発開放帯規画」の策定は、地域経済学に関連する多くの基礎的理論を参考している。例えば、地域分業、発展の極、はしご理論、反はしご理論、産業集積、国際地域協力等の地域

² 2003年の東北振興戦略の延長にある国家級の重要な地域規画である。2003年から2011年まで、中央政府は東北振興戦略の下、十数件の国家レベルの施策を打ち出したが、東北振興規画はその中の重要な一つである。これは中央政府が東北振興の成果を拡大し、更なる改革開放を促す施策である。同規画では、東北三省及び内モンゴル自治区東部地域の経済発展の段階的な目標を設定し、実施プランと政策の重点を明確し、黒龍江省の発展に対して大きな影響を与えた。黒龍江省政府は同規画に基づいて省級振興戦略を策定した。

³ ハルビン市、牡丹江市、綏芬河市、東寧県を指す。

開発の基本的な思想が地域発展戦略に反映されている。

中国では、地域発展戦略の策定に利用されている基礎的理論として、Francois Perrouxの「発展の極」理論、ハーシュマンの経済発展の戦略の理論、Walt Whitman Rostowの経済発展の諸段階の理論、J.H.Thompsonの地域経済発展サイクルに関する理論、Johann Heinrich von Thünen と Alfred Marshallの産業立地・集積の理論等が挙げられる。中国人研究者の夏禹龍、馮之浚、何鐘秀等が地域経済発展の「はしご理論」を中国国内に適用し、東部、中部、西部地域における3大はしご地域が形成されていると主張した研究もある。また、郭凡生は反「はしご理論」を提起し、中国国内における地域間協力の重要性を指摘した⁴。これらの分析は研究者のみならず、政府担当者にも注目されている。その内容は地域発展戦略の策定・承認に関わる実務担当者の基礎的知識となっており、地域発展戦略の理論的根拠として重要視されている。

これらの理論と現実を適切に結び付けることは、研究者・研究機関の役割である。これはシンクタンクとして地域社会の発展に貢献するための最も有効な方法であろう。地域発展計画には、学術的で参考価値の高いモデル・図表が含まれることがある。発展計画の実行性と指導性を保つために、これらの内容は附属資料または補足説明として添付されている。

2.2 地域発展戦略の審議プロセス

地域発展戦略は、構想段階から承認段階まで、政策担当者がその内容を絶え間なく充実させ、研究者が重要な部分について吟味している。この他、当該分野の専門家と業界関係者が参加する審議会・公聴会も開催されている。審議会・公聴会は、発展戦略の正しい方向性を導き、その内容が現実と合致することを保障する地域発展戦略の策定にとって重要なプロセスである。「黒龍江と内モンゴル自治区東部の一部地域における沿辺開発開放帯計画」の事例を挙げてみる。同計画の策定にあたっては、黒龍江省発展改革委員会の主催により、現地調査に基づいて作成された草案に対して数回にわたる審議会・公聴会が開催された。参加者は、政府関係部署の責任者・担当者、研究機関・大学の専門家、企業担当者等である。審議会では、質疑応答、議論が繰り返される。草案には多くの修正・改善意見が取り入れられ、最終合意が形成される。この草案は再び政府の関係部署に戻され、改正の審査を受けて中央政府に承認申請を行う。黒龍江省では、一つの地域発展戦略を策定するには、少なくとも3～5回の審議会・公聴会が開催される。

研究者は、地域発展戦略の内容形成と改善に寄与している他、地域住民に広報し、社会から広く意見を吸い上げる役割も果たしている。彼らは主に地方政府直属の研究所、各級社会科学院、大学附属研究機関等に所属する研究者である。民意の代表としてしばしばメディアに登場し、国内外のマスコミと良好な関係を持っている。したがって、研究者は地域発展戦略を宣伝する意味において、一定の発言力と影響力を持っている。地方政府も研究者の広報的な役割を重視し、受託研究プロジェクトや資金協力を通じ、優秀な研究者を有する研究機関と良い関係を築こうとしている。

2.3 地域発展戦略を支える現地分析

地域発展戦略の策定に関わる地方政府の担当者は、鄧小平・江沢民・胡錦濤等の指導者及び中央省庁の責任者による地域の非均衡発展、協調的な発展に関する基本的指針を理解する必要があるが、地方のシンクタンクによる現地分析の文献も重視しなければならない。それは、地域発展戦略をめぐる地方の初期的・基礎的調査が、中央政府の意志決定に大きな影響を与えるからである。また、地方政府が地元シンクタンクの研究成果を重視・活用することは、地方における地域戦略の策定レベルの向上に寄与し、政策決定におけるシンクタンク機能強化にも繋がる。

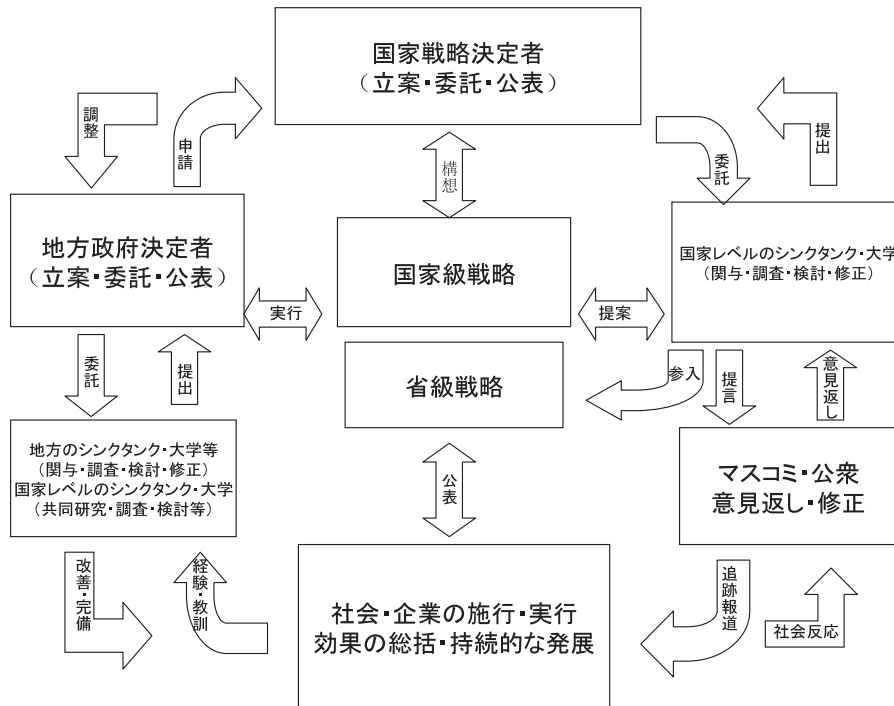
地方政府は、地方の学者の現地分析を重視し、それを地域発展戦略の策定に反映させると同時に、共同研究、特別研究、委託研究等を通じ、地方にある政府系政策諮問機関または民間シンクタンクによる積極的な政策提言を促している。黒龍江省の場合は、政府の責任者は暦年の『黒龍江省経済社会発展情勢予測』、『中国東北発展報告』、『中国東北アジア国家年鑑』等の現地分析を重視している。これらの文献は、黒龍江省の地域発展戦略の策定に対して基礎的事実と統計データを提供するとともに、青書・年鑑的な機能を持っているため、審議会・公聴会にも頻繁に使われている。地方発の学術文献と理論研究成果は、次第に政府担当者の手元に置くものとなり、政策決定に直接的または間接的な影響を与えている。

3. 黒龍江省の地域発展戦略の策定プロセスとそのパターン

黒龍江省における地域発展戦略の立案、調査、審議、修正、決定、公表等の一連のプロセスを見ると、その策定パターンは多様化している。具体的には、以下のパターンが挙げられる。まず、中央政府がある構想について国家戦略としての方向性を確定し、国家レベルのシンクタンクが調

⁴ 詳細は高新才（2008）を参照されたい。

図 地域発展戦略の策定プロセスと社会参加の仕組み



出所：筆者作成

査し、検討を経て基本的内容を形成するという中央主導の策定である。次に、中央政府が対象地方政府に委託し、地方政府が発展戦略の草案を策定して中央政府に提出し、国レベルで審議・検討するという地方・中央の共同策定である。第3に、地方政府が主導して発展戦略を提出し、中央政府の承認・支援を得るという地方主導の策定がある。また、中央・地方の研究者が、学術研究の成果として地域発展戦略の構想を提起し、政府担当者がそれを重視し、審議・検討を経て地域発展戦略を形成するという学術推進型の策定もある。東北振興戦略のように、複数の地方政府の要求を統一的に取りまとめる地域間の発展構想もある。このような地域発展戦略の策定には、多地域・多部門・多分野の協力が必要である。後ほど詳細に分析する。

地域発展戦略の策定プロセスの科学化、透明化、民主化への進展に伴い、策定に参加できる関係者の範囲は徐々に拡大している。また、マスコミによる社会監督機能が次第に強くなり、産学官の連携も強化されている。これらの変化は、戦略作りの誤りを防ぎ、国の実情に見合った地域発展戦略の策定に寄与する。中国の地域発展戦略は、より民意に近づき、高い実行性を持つものになりつつある。図は、地域発展戦略の策定プロセスと社会参加の仕組みを示している。以下、地域発展戦略の策定プロセスの代表的なパターンを検討する。

3.1 地域間の共通認識に基づく地域発展戦略の策定

東北振興戦略は、地域間の共通認識に基づく中央政府主

導の地域発展戦略である。同戦略は、東北地域の発展の歴史的な弊害を取り除き、地域間の連携を促して経済成長を促進するものである。地域政策の可能性を最大化し、東北地域の発展の方向性を明らかにしている。東北振興戦略は、省を跨る地域発展戦略として、大きな範囲の地域を対象としている。中国の地域発展が非均衡型発展戦略から均衡型発展戦略へ転換することを象徴するものである。

東北振興戦略の策定プロセスは、国家発展改革委員会が主導し、複数の地方政府が積極的に協力し、各政策に関連する諮問機関・シンクタンクの研究が幅広く参加するというものであった。各級地方政府、人民代表大会、政治協商会議等から様々な議案が提出され、研究者はそれに対して多方面から検討を加えて修正し、最終的に中央政府が確定した。中央政府は主導的な役割を果たし、各地域政府に対する調整機能を最大限に発揮した。

3.2 地方主導の地域発展戦略の国家レベルへの昇格

2009年4月21日、中国国务院は綏芬河総合保税區の設立を許可した。中国7番目の総合保税區、2番目の内陸国境保税區である。同保税區には、黒龍江省の対ロシア・日本・韓国の加工貿易、中継貿易の発展を促進し、黒龍江省企業の対外進出を促す役割がある。中国・ロシア・日本・韓国を結ぶ国際複合輸送ルートの構築に寄与し、内陸国境地域の対外開放を推し進めるものである。

綏芬河総合保税區の設立が国务院の許可を得たのは、地

方政府が積極的に働きかけ、主導的な役割を果たした結果である。黒龍江省政府、中国共産党綏芬河市委員会、綏芬河市政府は総合保税区の整備を重視し、中央の許可を得るために周到な準備を行った。綏芬河市の政策諮問機関とシンクタンクは、総合保税区の計画について検討を重ね、内容の改善に大きな役割を果たした。黒龍江省発展改革委員会と中国共産党綏芬河市委員会研究室の担当者は、現地調査を重ねながら数回にわたり検討会を開催し、計画の原稿を修正した。地方政府は中央省庁との連絡を密にした結果、同計画が最終的に国務院の許可を得た。綏芬河総合保税区の設立は、地方政府の積極的な働きによって中央政府の承認が得られた典型的な事例である。

3.3 学術研究の成果から生まれた地域発展戦略

2012年7月、黒龍江省発展改革委員会と内モンゴル自治区発展改革委員会は、「黒龍江と内モンゴル自治区東部の一部地域における沿辺開発開放帯規画」を策定しており、年内に国家レベルに昇格する可能性があることを明らかにした⁵。中央に承認されれば、全国の国境開放地域に占める東北地域、特に黒龍江省・内モンゴル自治区の地位が格段に高まる。2省は地理的にロシアと北朝鮮に近いと、その優位を活かして、中国と北東アジア諸国との地域協力を推進する橋頭堡と中継地の役割を果たす可能性がある。当該発展戦略の承認は、中国における国際地域協力の最前線が東部地域、東南地域から東北・中西部地域へ移転する可能性を意味する。

同戦略の原型は、黒龍江省と内モンゴル自治区の学者が応用経済の視点から提起した綏満⁶経済帯、中国東北北部開発開放等に関連する研究成果にある⁷。これらの成果に基づき、中国国務院参事室は2010年12月に、国家レベルの視点から黒龍江省沿辺開放帯の建設を重視する必要があると提言した。2011年、当該地域に対する現地調査が始まった。2012年1月、ハルビン市発展改革委員会と大慶市発展改革委員会は「黒龍江と内モンゴル自治区東部の一部地域における沿辺開発開放帯規画調査報告」のハルビン市と大慶市部分を完成した。これにより、綏満経済帯の中心都市と主要都市の発展の方向性が明らかにされ、同規画の早期の完成と承認申請に繋がった。地域間比較優位の補完性を重視する内容が盛り込まれ、地方シンクタンクの提言も取

り入れられている。戦略の内容は地域発展の実態に即しており、戦略作りのレベルはさらに高まったと言える。

4. 地域発展戦略の策定関係者の役割分担

黒龍江省における各地域発展戦略の策定、審議、公表、広報、実施、監督のプロセスに、政府は主導的な役割を果たしている。具体的には、政府は意欲的に地域発展戦略を策定し、社会から広く意見を求め、市場原理に基づいて発展戦略を実行している。一方、研究者、企業、公衆とマスコミの役割はますます重要となり、専門性も向上している。政府が地域発展戦略を策定する際に、研究者は複数のプランを候補として提出する。政府はその中で優れたものを選んで具体的な検証を行う。その後、調査・審議・修正を重ね、最終的には地域経済の成長と企業の発展に有効な発展戦略が策定される。政府は科学的、民主的な観点から研究者との交流を密にし、企業との実務的な対話を拡大し、社会公衆による戦略策定への関与の制限を緩和している。中央政府は地方政府の熱意を尊重し、地方政府は地域のシンクタンク及び社会公衆の役割を重視している。また、策定プロセスにおける情報公開と透明化は、発展戦略の正しい方向性と有効な自己改善機能を保障している。以下、地域発展戦略の策定関係者の役割を検討する。

4.1 政府

洗練された地域発展戦略には、構想段階から実行段階までの関係者として、少なくとも政府の政策決定者、地域問題と経済の研究者、戦略の実施者等が含まれる。また、必要に応じてその他の関係者も参加する可能性がある。その中で、政府は行政管理権、政策企画権、公共リソースの使用権等を有するため、地域発展戦略の策定の主導権を持っている。大きな権限を持っている政府は、経済プロジェクトの立案許可を求める下級政府、研究資金を求める研究機関、政策補助金等を求める企業等にとって最も注目される存在である。以上をまとめると、地域発展戦略の策定及び施行において、政府は主導的な役割を果たし、研究者と公衆は戦略の策定に参加し、企業は戦略の施行段階に関与するという構図になっている。

⁵ 詳細は「黒龍江省和内蒙古東部部分地區沿辺開發開放帶規画加緊制訂」黒龍江日報、2012年7月8日を参照されたい。

⁶ 黒龍江省綏芬河市と内モンゴル自治区滿洲里市を指す。以下同じ。

⁷ 具体的な研究成果として以下の文献が挙げられる。①張玉斌「東北北部地區沿辺開發開放帶研究與建議」『ハルビン市政府發展改革委員會經濟研究所調查報告』、2010年。②許広国「綏芬河：東北亞邊貿区之眼」『瞭望』、Vol.39、2005年。③朱乃振「全力打造黒龍江省沿辺開放先導区」『西伯利亞研究』、Vol. 5、2008年。④楊志才「牡丹江打造黒龍江省沿辺開放先導区構想」『黒龍江對外經貿』Vol. 7、2010年。⑤王楠・陳才「内蒙古東部地區口岸空間結構優化機制與模式研究」『内蒙古社会科学』（中国語版）、Vol. 4、2008年。

4.2 研究者

国家級・省級の地域発展戦略の策定には、政府直属の研究所・研究室、社会科学院、大学の附属研究機関等が理論的な根拠の提供に対して中心的な役割を果たしている。また、一部の民間シンクタンク、外部研究機関の役割も増大しつつある。地域発展戦略の構想から公表まで、研究者の影響が随所に見られ、大きな影響力を持っている。

具体的には、以下の4点にまとめられる。①研究者には政府部門経験者または政府傘下の大学・研究機関に勤務経験を持つ人は少なくない。彼らは政府と幅広い人脈を持っているため、政府主導の地域発展戦略の策定に参加しやすい。②研究者は書籍出版や研究発表等を通じ、国内外の学術交流イベントに参加したり、マスコミの取材を受けて専門家としての知名度を高めたりすることができる。高い社会的地位と影響力を持っているため、政府に注目されやすい存在である。③研究者は地域発展戦略が正式に公表される前に、個人の見解としてそれを発表し、社会の反応を探ることができる。その社会の反応は政府にとって重要な参考になり得る。④研究者は国内外の研究動向を把握しているため、海外からの最新情報を政府に提供し、政府は「他山の石」として参考することができる。研究者は海外に向けて地域発展戦略を宣伝することも可能である。

4.3 公衆

中国では、社会の発展に伴い、公衆の社会意識と利益意識はますます高まっている。地域発展戦略を含む経済政策の透明性を求め、公衆の知る権利ないし政策参加権に関する要求が高まっている。政府の独断で政策決定を行うことはますます困難となっている。長期的な視点から見ると、社会の発展と公共利益にかかわる政策の決定は、社会から議論・監督・批判を受けることは当たり前のことであり、常態化する必要がある。企業が地域発展戦略の策定に参加し、業界利益や経営に対する政策支援を求めることについても、その必要性を認識し、議論のテーブルに上げるべきである。黒龍江省の地域発展戦略の策定には、政府、シンクタンク以外の企業関係者、社会の有識者等の参加を促していることも、上述の時代のニーズに対応するための改革の一環である。

5. 黒龍江省の地域発展戦略の全体評価

黒龍江省における「東北振興戦略」、「哈大齊工業回廊建設規画」、「綏芬河総合保税區規画」、「八大経済区戦略」等の策定と施行に対し、肯定的な評価が主流となっているが、問題点も指摘されている。これらの地域発展戦略は、政策

決定を的確に行い、正しい方向性を保っている。戦略の実行性が高く、社会経済の発展に牽引的な役割を果たしていると評価されている。また、発展戦略の推進の必要性は、各級政府及び社会の共通認識となっており、戦略の施行により地域住民の生活は確実に改善されている。一方、発展戦略の策定において、候補プランの準備不足、実態経済の運営に対する指導性の欠如、政策対象がはっきりしない等の問題も残っている。以下、地域発展戦略の有効性を検討したうえで、戦略策定に関わる政府、研究者、企業等の問題点を分析する。

5.1 黒龍江省の地域発展戦略の有効性

黒龍江省の各地域発展戦略の策定は、現実的・中長期的課題を解決するために、政府・シンクタンク・企業の知恵を最大限に活かし、地域発展戦略の新分野と新モデルを探求した点については評価できる。戦略の策定には、社会・企業・公衆の要求を反映し、非営利的・公益的な業務委託を拡大し、「シンクタンクが世界を変える」という意識の存在が確認できる。政府と研究機関は、高い補完性を持って人材協力を進めるようになった。また、地域発展戦略の施行は、生態保護と持続的な発展の保持に最大限の配慮を行いながら、地域経済の活性化、調和の取れた社会の構築に寄与している。

5.2 黒龍江省の地域発展戦略の問題点

5.2.1 政府

地域発展戦略の策定における政府の問題点は、以下の4点にまとめられよう。①政府は地域発展戦略を策定する意欲が高く、より多くの自主権限と支配権を獲得しようとしているが、既存の制度・体制・観念・文化面の制約を受けており、発展戦略の創造的な策定及び最適な方法の選択にマイナスの影響を受けている。②政府は、策定の困難に直面する際には研究者の力を借りるが、両者の間に長期間にわたり有効な協力メカニズムが構築されていない。研究者により考案された内容の一部は、既存の政府機能の枠に制限されながらも、机上の空論になったり、現実に対する指導性が不足したりしている。一部の発展戦略の策定は形作りに陥り、実効性が低い。戦略作りの視野が狭く、一貫性もなく、持続的な発展を図るための基本理念を持っていないものもある。したがって、政策の柔軟性と透明性の向上は依然として重要な課題である。③効率とコストの問題。政府は発展戦略を策定・施行する時に、効率とコストを考慮せず、政策目標の最大化のみを追求するケースが見られる。④行政トップは多忙のため、戦略のマクロ的な部分に

については把握しているが、詳細まで把握しきれていない場合がある。特に、行政トップの任期は比較的短く、責任者が頻繁に入れ替わるため、発展戦略の連続性に悪い影響をもたらしている。また、責任者が異動になると、新任者は前任者の下で策定された発展戦略を二度と取り挙げず、本人の任期内に新しい発展戦略を別途立ち上げるという理不尽なこともしばしばある。

5.2.2 研究者

研究者の課題は以下の4点にまとめられよう。①地域開発をめぐる新しい理念が次々に生まれる状況の中で、研究者は最新の政策動向を的確に把握し、科学的な分析を通じて正確な経済予想を行うことが重要である。②独立性の問題。研究者は、研究プロジェクトと研究資金の大半を政府に依存しているため、発展戦略における政府の役割を過大に評価し、政府の利益を中心に戦略作りを行う傾向がある。現状では、民間シンクタンク・独立系研究機関の力はまだ弱く、政府からも信頼されていないため、研究プロジェクトと資金は政府に幅広い人脈を持つ政府系研究機関に流れる傾向が強い。しかし、政府系研究機関の独立性が弱いため、発展戦略に対する批判が不足している。③基礎データの信頼性問題。政府系研究機関が使用する基礎データは、政府またはその傘下の情報機関から収集するものが多く、統計データまたは分析内容の信頼性に問題があるものもある。特に、発展戦略の策定に参考とする基礎的分析には、実績の過大評価や現実離れた内容が含まれる場合がある。④地域発展戦略の種類や内容はますます複雑化しており、学際的な分野や偏狭な分野についても把握する必要があるため、研究者はそれにしっかり対応しなければならない。しかし、現実研究機関の体制に不備があったり、専門分野が狭かったりしてうまく対処できていない。さらに、研究資金の制約や高度な人材の不足等、研究者の独立的な発想やオリジナリティの創出が妨げられている状況である。

5.2.3 企業

企業が、政府からの支援を「待ち、依存し、要求する」という既成観念は依然として強く残っている。地域発展戦略の施行により政府から得られる優遇政策やプロジェクト支援を受動的に待っている企業が多く、戦略策定への参加意欲が低い。政府にプロジェクトや補助金を期待するより、地域発展戦略における政府の市場改善の努力を促すべきであろう。また、発展戦略の策定には、政策決定者と研究者の参加が重視されているが、戦略の施行段階において重要な役割を果たす企業の参加については軽視される傾向があ

る。これは企業が市場関係者として戦略の策定に参加することを妨げている。

5.2.4 民間・独立系シンクタンク

近年、政府から独立する民間シンクタンクはますます発展している。彼らが地域発展戦略の策定に参加することは未来の趨勢であろう。なぜなら、政策策定における多様な利益の要求は、政府が民間・独立系シンクタンクを利用することを求めているからである。政府系政策詰問機関も含めて研究機関同士の競争を促すことも必要であろう。今後、研究資金や研究プロジェクトの分配がより公平になり、透明性が向上することを期待する。

6. むすびにかえて

黒龍江省における地域発展戦略の状況をみると、中国は「地域発展戦略花盛り」の時代に入り、戦略の策定と施行には様々な変化が見られる。まず、経済社会の発展に対する地域戦略の役割がますます重要視され、地域間協力が促進されている。発展戦略の策定の権限は徐々に地方に移譲され、地方政府が地域協力に参加する権限は拡大している。次に、複数の省を跨る大きな範囲の地域協力が未来の趨勢となる。地域協力戦略の策定と承認は、地域発展の正しい方向性を導き、政策支援・経済プロジェクト支援を獲得しようとする地方政府の重要な目標である。中央政府も地域間バランスを改善するために地域間協力を促している。さらに、地域発展戦略の策定は、科学的・民主的な政策決定の促進及び質・効率重視が求められており、今後より多様な参加者が関与し、制度的に保障されたプロセスにより民主的に進められよう。独立系シンクタンクの役割も一層重要視されよう。黒龍江省は、国家級戦略の策定参加及び省級戦略の策定を通じ、未来の戦略策定に向けて有益な試みを行い、良好なヒントを得たと言える。今後も地域発展戦略の策定の変化に注目し、その方向性を見守りたい。

参考文献

- 鄧小平『鄧小平文選』第3巻、人民出版社、1993年
 馮之浚『区域經濟發展戰略研究』經濟科学出版社、2002年
 曲偉・劉爽・宣志剛『中国東北亜国家年鑑(2012)』黒龍江人民出版社、2012年
 高新才「与時俱進：中国区域發展戰略的嬗變」蘭州大学学报社科版、Vol. 5、2008年、8～22ページ
 夏禹龍「梯度理論和区域經濟」『科学学与科学技術管理』Vol. 2、1983年、7～8ページ

The Process of Formulating Regional Development Strategies in China: The case example of Heilongjiang Province

DA, Zhigang

Director and Professor, Northeast Asia Research Institute,
Heilongjiang Provincial Academy of Social Sciences

Summary

China has frequently formulated regional development strategies, yet the process of their formulation has for the most part not been clarified. In this paper, focusing on several regional development strategies within Heilongjiang Province, I examine the theoretical basis and the actual support connected with their formulation, and summarize the formulation patterns for regional development strategies. In addition, I clarify the formulation mechanism for regional development strategies, and examine the roles of government, think tanks, businesses, and the mass media and public.

For the formulation of regional development strategies in Heilongjiang Province it is possible to evaluate the points where the knowledge of government, think tanks, and businesses is put to maximum use to attempt the resolution of the actual and medium- and long-term challenges in Heilongjiang Province. Problem points, however, are also mounting up. For example, the personnel movements of top administrators in local government can have a negative impact on the stability of regional development strategies. Moreover, a great many researchers involved in the formulation of regional development strategies belong to government-affiliated think tanks, and, viewed in academic terms, lack independence. The fostering of private-sector think tanks is becoming a pressing matter. For businesses there is a tendency to place importance on the benefits from the direct subsidies via the putting into effect of regional development strategies.

[Translated by ERINA]

On the Special Feature

Sh. Enkhbayar

Senior Research Fellow, Research Division, ERINA

Mongolia is a country remarkably rich in natural resources and the country plans to leverage its abundant resource base for transforming the economy into a modern, diversified and higher income economy. Foreign direct investments in the mining sector have been continuously on the rise. Mongolia's real GDP growth achieved a record rate of 17.5% in 2011—the highest rate in the world. However, the heavy dependence of Mongolia's economy on mineral resources makes it extremely vulnerable to external shocks amid the gloomy outlook of the global economy. Additionally, there is concern about the "resource curse" and the "Dutch Disease" phenomenon.

Against this background, ERINA, jointly with the Institute for Strategic Studies (ISS), a government-funded think-tank affiliated with the National Security Council of Mongolia, organized a workshop on 15 August 2012 in Ulaanbaatar to discuss issues related to various aspects of Mongolia's contemporary economy. This special feature delivers presentations made at this workshop. The key messages of the presenters were:

- The mining sector can act as the engine that drives growth and resources in the rest of the economy through its twin roles of providing investible resources on the one hand, and stimulation of demand on the other. The right combination of trade liberalization and investment policies will be useful for neutralizing the effect of the "Dutch Disease" (N. Batnasan);
- Some distortions were observed in the consistency between the labor productivity and wage increases in the country's mining and quarrying industry. Therefore proper attention should be given to productivity issues (A. Demberel);
- As a landlocked country, the current shortcomings of Mongolia's transportation system are the major obstacle to the country's efforts to diversify the markets of its core trading commodities, such as coal. Northeast Asian countries have always been strategically important partners for Mongolia. However, Mongolia is still inactive in participating in the regional economic integration talks. Establishment of the Northeast Asian Coal Association would be one of the potential solutions for Mongolia to address these issues. (Ch. Oyunjargal);
- In addition, the prerequisites for participating in regional integration should be created primarily through expanding and promoting bilateral relations with all the countries in the region, including the DPRK. Mongolia's securing of sea access to the Pacific via DPRK ports is highly strategic (N. Dorjsuren);
- The development of industry, services, and social sectors, such as education and healthcare, in the cities, is fuelling rural-to-urban migration, especially to Ulaanbaatar. Despite various hurdles associated with overpopulation, the high concentration of population could also be one of the key drivers of the city's, as well as the country's, further development (Ch. Bayanchimeg and B. Batbayar);
- Notwithstanding the increasing share of the urban population, many low-income people are still lacking access to finance for purchasing houses. Therefore, development of a sustainable mortgage market in Mongolia would help make housing finance more affordable (Ts. Enkhbayar).

特集にあたって

ERINA 調査研究部主任研究員 Sh. エンクバヤル

天然資源に非常に恵まれたモンゴルは、その豊富な資源基盤を利用して、近代的で多様な、より付加価値の高い経済に変わろうとしている。鉱業部門における海外直接投資は、引き続き増加している。2011年のモンゴルの実質GDP成長率は記録的な17.5%を達成し、世界最高となった。しかし、鉱物資源に大きく依存する経済は、世界経済の見通しが暗い中で、外からの衝撃に極めて弱い。加えて、「資源の呪い」や「オランダ病」現象の懸念もある。

このような背景の中、ERINAは、モンゴル国家安全保障委員会に関係する政府資金で作られたシンクタンクである戦略研究所（ISS）と共に、2012年8月15日にウランバートルでワークショップを開催し、現在のモンゴル経済の様々な側面について議論を交わした。本特集では、このワークショップでの発表を紹介する。発表者の発言の焦点は、以下のとおりである。

- 鉱業部門は、投資可能な資源の提供と需要の刺激という2つの役割を通じて、その他の経済の成長と資源を促す機動力となり得る。貿易自由化と投資政策という正しい組み合わせで、「オランダ病」の影響を中和することになろう。(N. バタナサン)
- 国内の採掘・採石業における労働生産性と賃金の増加の間の一貫性には、ねじれが見られる。そのため、生産性の問題に適切な注意を払うべきである。(A. デンベレル)
- 陸に囲まれた国のために、現在のモンゴルの輸送システムの不足は、石炭など、主要貿易商品の市場多

様化に向けた努力に対する重要な障害となっている。北東アジア諸国は、モンゴルにとって常に戦略的に重要なパートナーである。しかし、モンゴルは、地域経済統合の話し合いに積極的に参加していない。北東アジア石炭協会の設立は、これらの課題に取り組む潜在的な解決方法の一つである。(Ch. オユンジャルガル)

- さらに、地域統合への参画に伴う前提条件は、主に、北朝鮮を含む域内各国との2国間関係を拡大・発展させることを通じて作られるべきである。北朝鮮経由の太平洋へのアクセス確保は、モンゴルにとって戦略的に意義が大きい。(N. ドルジスレン)
- 都市部における鉱工業、サービス、教育・健康などの社会部門の発展が、農村部から都市部、特にウランバートルへの人口移動に拍車をかけている。人口過剰がもたらす様々な障害にもかかわらず、人口集中はウランバートルと国の今後の発展への大きな推進力にも成り得る。(Ch. バヤンチメグ、B. バーサンフー)
- 都市人口の割合が増加しているにもかかわらず、低所得者の多くは未だに住宅購入資金調達の手段がない。そのため、適切な抵当流通市場を構築することにより、住宅融資がもっと手頃に受けられるようになる。(Ts. エンクバヤル)

[英語原稿をERINAにて翻訳]

Mongolia's Mining-Based Development and Trade Policy

N. Batnasan

School of Economic Studies, National University of Mongolia

This paper analyzes the relationship between the mining-based economic development and trade policy in Mongolia by employing a multi-sector dynamic CGE model. Seven different scenarios, including those with the implementation of the Oyu Tolgoi and Tavan Tolgoi projects, were considered. Investigation of several important mining-related aspects of Mongolia's trade, such as trade and growth forecasts, the impact of the "Dutch disease", income distribution, and others, were employed in this paper.

1. Trade and Economic Overview of Mongolia

Twenty-two years ago Mongolia made a historic decision to change both its political and economic systems and started the transition to a democratic society and market economy. However, at the beginning of the transition, Mongolia faced several turbulent episodes; the country went a long way towards restructuring its obsolete economic system and putting in place a system with a greater degree of competition and a more broad-based ownership of assets, all of which have helped in overcoming the economic downturn of the initial years of transition and to stabilize the economy.

The economy has been on an upward trend since 2000, and there are signs that the transition process is coming to an end. The measures adopted to stabilize the economy and to encourage foreign and domestic investments enabled Mongolia to haul its economy out of the deep crisis of the early years of transition. Its GDP, which was declining on the average by 7.3% a year during the period 1990-1993, grew by an average of 7.9% a year during the period 2005-2010¹. According to the World Bank, Mongolia's GNI per capita had reached US\$1,890 in 2010.

One of the most prominent features of the Mongolian economy since the 1990s has been the liberalization of international trade under conditional agreements with the IMF and the World Bank, as a part of the Structural Adjustment Program and under the multilateral trade regulations of the WTO. During this period, Mongolia has gradually implemented policies to liberalize its foreign trade and foreign investment regimes, to support economic growth and economic sectors through an active trade policy, and increase the country's exports.

On 29 January 1997 Mongolia officially joined the World Trade Organization (WTO). After becoming a member of the WTO, Mongolia made major improvements in its trade and business climates. Mongolia guaranteed to reduce tariff and non-tariff barriers to trade. Mongolia reduced its average nominal tariff to 5 percent and eliminated almost all licenses for export and import

commodities. Mongolia reduced barriers to foreign direct investment in many industrial sectors, except in the air transport, telecommunications and power sectors. Mongolia has also eliminated all export and domestic subsidies for all sectors of the economy, eased customs procedures, sanitary and phytosanitary restrictions, and product specifications.

However, an ultimate goal of trade policy was to integrate Mongolia into the regional and world economy, but even today Mongolia has not signed any Free Trade Agreement (FTA) yet. Mongolia is the only WTO member which doesn't belong to any trade bloc or FTA. Nevertheless, Mongolia promotes an open and liberal trade policy and the country is seeking ways to sign effective FTAs with its major trading partners within the framework of multilateral trade regulations. Nowadays this is becoming more important, with the country having gone a long way towards a sustainable growth path and increasing its trade volume.

In general, Mongolia's trade policy since its transition to a market economy was aimed at quickly adapting to the changing economic environment, along with resolving the country's economic difficulties and softening challenges resulting from the transition and integrating into the world economy.

Following the above measures, Mongolia experienced some very important changes during this period that might have important implications for the sustainability of its future trade. Since 1990 Mongolian exports and imports have diversified not only in geographical terms, but its trade turnover has grown nearly 6.8 times compared to its pre-transition level. In 2011 the total value of exports reached US\$4,817.5 million and total imports amounted to US\$6,598.4 million². Apart from the former Soviet-bloc countries, China, Japan, the ROK, Germany, the United Kingdom, and Kazakhstan have become the major trading partners of Mongolia.

Moreover, trade has come to be rooted much more on the fundamental strengths of the economy instead of the political favors from the Soviet bloc which used to prop it up in the past. In a globalizing world, expansion of the tradable sector must conform to the principle of comparative advantage. In Mongolia, comparative advantage lies in its natural-resource-intensive industries, where there are two major types: livestock-based processing industries, such as textiles, leather and dairy; and the mining industry.

Mining- and livestock-origin raw materials, and textile products account for most of Mongolia's exports. In 2011, the percentage share of those products accounted for 95% of the country's total exports. Therefore, the Mongolian

¹ Statistical Yearbook of Mongolia: 1990-2011.

² International Trade Commodity Statistics 2011, General Customs Administration of Mongolia

economy has remained vulnerable and dependent on the international market prices of its major export commodities.

Today the Mongolian economy has entered into a new era of economic development and the country holds vast potential for economic development, thanks to the discovery of its world-class mining deposits. Mongolia experienced rapid growth in recent years and the country's GDP grew 17.3 percent in 2011. The country is estimating more rapid growth in the forthcoming years and this is primarily linked to two large mining development projects: Oyu Tolgoi (OT) and Tavan Tolgoi (TT).

The Oyu Tolgoi (OT) copper and gold deposit in the South Gobi holds over 35 million tonnes of copper and 1,275 tonnes of gold. Its production is expected to start in 2013 and reach full capacity by 2017-2018 which will supply 1.8 million tonnes of copper concentrate a year, which is close to 3 percent of world output. In October 2009, the government of Mongolia signed an investment agreement for the development of OT with Ivanhoe Mines of Canada and Australian mining giant, Rio Tinto.

Another big deposit, Tavan Tolgoi (TT), holds reserves of over 6 billion tonnes of coal, one third of which is coking coal. Although Tavan Tolgoi has been in operation since 1967, the production has not reached a substantial level. Yet coal production increased sharply when a state-owned mining company Erdenes TT and a consortium of private corporations, Energy Resource Group, started mining at the Tavan Tolgoi deposit site.

These investment projects present a unique development opportunity for the Mongolian economy as a whole. At the same time, the mining boom presents large policy challenges. The key challenge is to sustain economic growth over the long term. International experience has demonstrated that resource-rich countries tend to underperform compared with resource-poor countries and this tendency has been called the "resource curse".

The changing situation and changing opportunities requires the rethinking of new development objectives for the country. Also, there is a need to formulate new policy objectives for trade policies that will ensure equitable and stable economic growth. Therefore, the role of effective policymaking has great importance.

2. Mining-Based Economic Development Prospects for Mongolia

As mentioned earlier, the mining sector is becoming the most important sector of the Mongolian economy. Mining is not a labor-intensive sector; therefore this sector is unlikely to provide much employment directly. However, the importance of the mining sector is two-fold. First, it is the main source of income, in terms of both budget revenues and foreign exchange earnings. These earnings will be invested in other sectors and will support the development of other sectors. Secondly, the aggregate demand, generated by the export of minerals, will stimulate output and employment in the manufacturing and service sectors.

The economic impact of the mining sector on our economy is very large; therefore any assessment or analysis of the Mongolian economy without the mining sector's impact will be inadequate. Accordingly, in order to

determine the economic development prospects for Mongolia for the forthcoming years, this paper analyzes the mining sector's impact on the country's economy by employing a dynamic Computable General Equilibrium (CGE) model.

This study covers the impacts of two large investment projects, Oyu Tolgoi (OT) and Tavan Tolgoi (TT), to be started in the coming years. The government of Mongolia offers two different options of coal extraction at Tavan Tolgoi: 20 million tons (TT1) or 40 million tons (TT2) a year. In considering these options, six different scenarios in addition to the baseline scenario have been investigated in this study. These are:

1. The baseline scenario;
2. OT + TT1 in base-year prices;
3. OT + TT1 in low prices (metal prices on the world market decrease by 20%);
4. OT + TT1 in high prices (metal prices on the world market increase by 20%);
5. OT + TT2 in base-year prices;
6. OT + TT2 in low prices (metal prices on the world market decrease by 20%);
7. OT + TT2 in high prices (metal prices on the world market increase by 20%);

Description of the Model

We applied a small-and-open-economy model and three principal conditions of general equilibrium; an income balance condition, a market clearance condition and steady state conditions are used in the model. We assume forward-looking behavior by consumers and producers, in the sense that they have perfect foresight with regard to their incomes, resources and commodity prices in the economy. In the model, indefinitely-living households allocate their lifetime income to maximize lifetime utility, which is defined as:

$$U(C_t) = \frac{1}{(1-1/\sigma)} C_t^{1-1/\sigma} \quad (1)$$

where C_t – consumption in period t ;
 C_{t+1} – consumption in period $t+1$;
 σ – elasticity of time preference;

Composite consumption covers N sub-composite goods in the model:

$$C = \psi \left(\sum_i \delta_i^c CC_i^{\frac{\sigma-1}{\sigma}} \right)^{\frac{\sigma}{\sigma-1}} \quad (2)$$

where CC_i is the i th good composite of domestic and imported consumption goods, ψ is the unit parameter of the CES (Constant Elasticity of Substitution) composite function and δ_i^c is the share of the consumption good. The overall value of composite consumption should satisfy:

$$P \cdot C = \sum_i P_i \cdot CC_i \quad \text{for } i=1..N \quad (3)$$

The term P is the net price of composite consumption with indirect taxes, and CC_i is the composite consumption good of both the domestic and imported i th good.

The total supply, A_i , for each sector is produced using domestic and imported goods, and is given by a CES (Armington (1969)) function as follows:

$$CC_i = \phi \left(\beta QM_i^\delta + (1 - \beta) QD_i^\delta \right)^{\frac{1}{\delta}} \quad (4)$$

where A_i is the CES aggregate of domestic supply D_i and imported supply M_i , δ_i^d is the share of domestic supply for good i , δ_i^m is the share of imports in good i , σ_m is the elasticity of substitution in the aggregate supply function, and ϕ is the shift parameter of the aggregate supply function.

The standard procedure where a consumer maximizes utility subject to a budget constraint yields the import demand per unit of domestic demand as a function of the relative price:

$$\frac{QM_i}{QD_i} = \left[\left(\frac{\beta_i}{1 - \beta_i} \right) \frac{PD_i}{PM_i} \right]^{\sigma_i} \quad (5)$$

Overall market clearing in the product market implies that:

$$A_i = CC_i + G_i + I_i \quad (6)$$

where G_i and I_i represent composite consumption by the government and investment, respectively, as discussed below. In value terms:

$$PC_i QC_i = PD_i D_i + PM_i M_i \quad (7)$$

where D_i and M_i are the domestic and imported supply at prices PD_i and PM_i , respectively, and PC_i is the price of total supply in sector i .

In the above equation, domestic supply, D_i , is the part of the output sold on the domestic market. The rest of domestic output is sold abroad, and given by the product transformation function:

$$XS_i = \left(\eta QE_i^\delta + (1 - \eta) QD_i^\delta \right)^{\frac{1}{\delta}} \quad (8)$$

where QE_i is exports, QD_i is domestic supply, σ_y is the elasticity of substitution in total supply, η is the share of exports, and δ is the shift parameter in the production function. The total value of gross domestic product is composed of the values of domestic sales and exports.

The producer maximizes profit subject to:

$$PX_i Y_i = PD_i QX_i + PE_i QE_i \quad (9)$$

Production is based on a nested structure of CES

functions. Each sector produces a gross output, XS_i , and the producer chooses a mix of a value-added aggregate, QVA , and an intermediate-demand aggregate, $QINT$. In mathematical terms, this leads to the following formulation:

$$XS_i = \left(\omega QVA_i^\rho + (1 - \omega) QINT_i^\rho \right)^{\frac{1}{\rho}} \quad (10)$$

$$\min PX_i Y_i = PVA_i QVA_i + PINT_i QINT_i \quad (11)$$

where PVA is the aggregate price of value added, $PINT$, is the price of the intermediate aggregate, ω and $1 - \omega$ are the CES share parameters, and ρ is the CES exponent.

Producers use labor and capital in each of N sectors to yield value added. This is also given by CES functions:

$$VA_i = \Omega_i \left((1 - \delta_i) (K_i)^{\gamma_i} + \delta_i (L_i)^{\gamma_i} \right)^{\frac{1}{\gamma_i}} \quad (12)$$

where VA_i is the gross value added of sector i , Ω_i is a shift parameter in the production function, K_i and L_i are the amounts of capital and labor used in sector i , δ_i is the share parameter of labor in the CES function, and γ_i is the CES factor substitution parameter.

Applying the CGE model requires SAM (Social Accounting Matrix) data and some other sources for the calibration process. Therefore, one of the most important tasks of this study is the identification and organization of data into a SAM. The availability of the *2005 Input-Output Table of Mongolia* has given an opportunity to construct the SAM for the year 2011. Technological coefficients in the SAM have been updated by using the RAS method.

In the SAM, there are nine production activities with nine counterpart commodities, nine household groups, one government account with six types of taxes included, one investment/savings account, and one account related to foreign trade and capital flows. All of these accounts are combined in a 9x9 matrix.

The Simulation Results

Our study confirmed the important role of the mining sector in the Mongolian economy, as was pointed out earlier. The simulation results show that the two large investment projects will significantly increase Mongolian GDP, up to 7.56 times depending on the world market price movements of copper, gold and coal. Estimations of Mongolia's GDP growth for different scenarios in the forthcoming years are illustrated in Figure 1.

The simulation results also indicate that mining-based growth will lead to a significant increase in Mongolia's exports and improvement of the trade balance. The basic trade-related indicators for each scenario are described in Table.

Recent empirical studies suggest that the growth of a booming natural-resource abundant sector could hurt economic growth and the sustainability of a national

Figure 1: GDP Growth Estimation for Mongolia / GDP2011=1.0

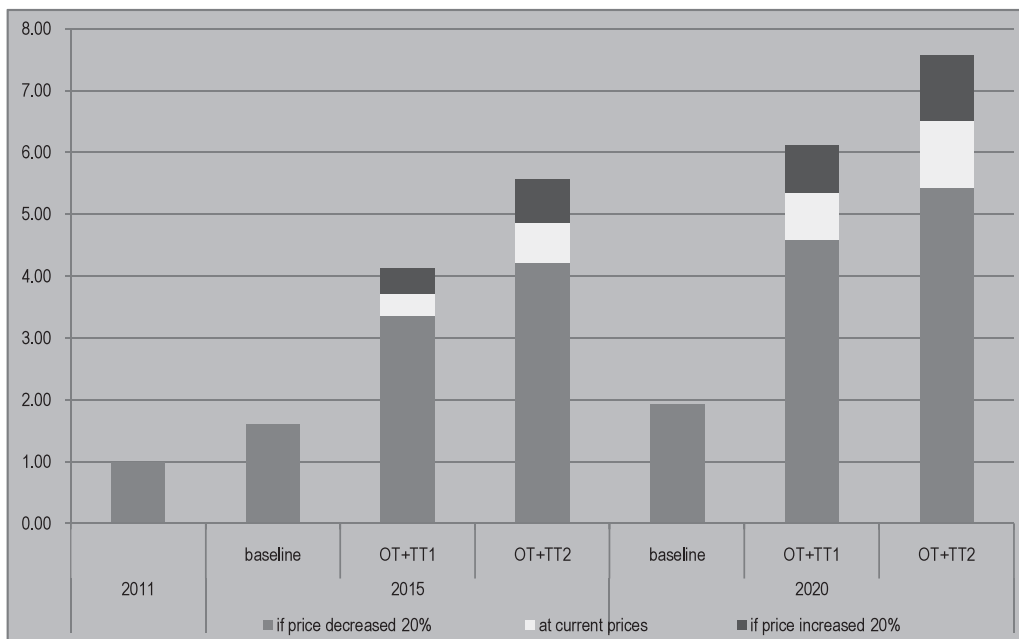
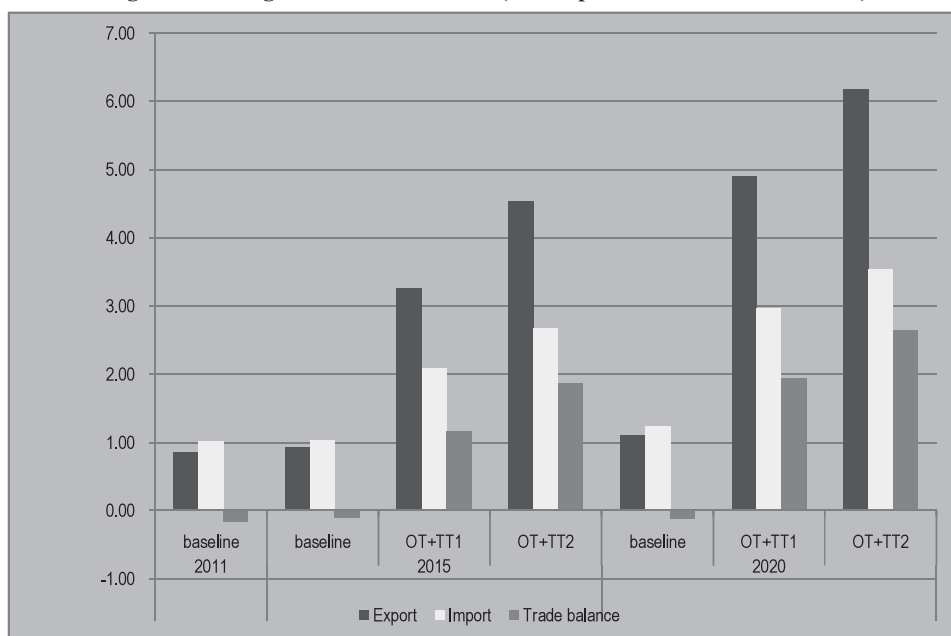


Table: Mongolian Trade Projections under Different Scenarios

| Scenarios | 2011 | 2015 | 2020 | 2011 | 2015 | 2020 | 2011 | 2015 | 2020 |
|---------------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------------|---------|---------|
| | Export | | | Import | | | Trade balance | | |
| Baseline | 0.8465 | 0.9261 | 1.1108 | 1.0169 | 1.0326 | 1.2386 | -0.1703 | -0.1065 | -0.1278 |
| OT+TT1 | | | | | | | | | |
| at current prices | | 3.2560 | 4.9042 | | 2.0897 | 2.9596 | | 1.1663 | 1.9445 |
| if price increases by 20% | | 3.7158 | 5.7588 | | 2.2983 | 3.3473 | | 1.4175 | 2.4114 |
| if price decreases by 20% | | 2.8716 | 4.0496 | | 1.9153 | 2.5719 | | 0.9563 | 1.4777 |
| OT+TT2 | | | | | | | | | |
| at current prices | | 4.5319 | 6.1800 | | 2.6686 | 3.5385 | | 1.8633 | 2.6415 |
| if price increases by 20% | | 5.3161 | 7.3590 | | 3.0244 | 4.0734 | | 2.2917 | 3.2856 |
| if price decreases by 20% | | 3.8230 | 5.0010 | | 2.3470 | 3.0035 | | 1.4761 | 1.9974 |

Figure 2: Mongolian Trade Forecast (in comparison with GDP for 2011)



economy indirectly, primarily through the "Dutch disease". The growth in production and export of the booming mineral sector may raise the real exchange and real wage rates that create the "Dutch disease"; and this in turn will reduce the competitiveness of economic sectors, making export diversification more difficult. This could be observed in labor-intensive sectors especially, as a result of their excessive wage costs. Growth in the mining sector increases the labor wage rate in intensive sectors, and reduces their competitiveness. Thus growth in the mining sector may lead to stagnation in labor-intensive sectors, within which most poor people work.

Therefore a rapid growth of mineral exports may become a cause of economic volatility, income inequality, and the crowding-out of productivity growth in the non-mining sectors; all of these effects could increase poverty and hamper human well-being.

Thus all economic policies should be aimed at preventing market distortions created by the resource boom. The major tasks of macroeconomic policy in the short and medium term should aim at preventing excessive overheating of the economy, appreciation of the exchange rate, and cost increases that may reduce the competitiveness of the non-mining tradable sectors.

3. Trade Policy Issues

Summing up the above conditions, Mongolian trade policy should be aimed at enhancing the strong growth rate, to diversify the economy and reduce poverty. Trade policy should act as a bridge between the growth and equity of the economy, and should perform twin roles in providing more sustainable growth in the economy: on the one hand it should be aimed at preventing the market distortions created by the "Dutch disease", and on the other hand it should be aimed at integrating the Mongolian economy into the world economy.

In that sense the trade policy of Mongolia needs to take into consideration the following important issues:

First, trade policy should be aimed at neutralizing the market distortions created by "Dutch disease" and to diversify the production and exports of non-booming sectors. Mongolia should not use protective instruments of trade policy to achieve these ends, because tariff or other protective instruments will reduce imports and the demand for foreign currency. In doing so this may in turn accelerate the "Dutch disease". Here I should mention that the combination of trade liberalization and the right investment policies will be useful for neutralizing the effect of the "Dutch Disease."

Second, trade policy should be aimed at integrating Mongolia into the global economy, eliminating tariff and non-tariff barriers to trade, and reducing transportation costs. However, Mongolia liberalized its trade, and transportation costs were left as a major barrier to its exports and imports. The reason is because Mongolia has always been a landlocked country and isolated from the sea. Resulting from the country's specific problem of "landlockedness" Mongolian trade policy should be aimed at reducing higher transportation costs, at ensuring producers' greater competitiveness in the global market, and

at guaranteeing its citizens a wealthier standard of living.

Even though FTAs and RTAs are useful for cost reduction, the overlapping effect of FTAs and the "Dutch disease" may reduce the production and competitiveness of non-booming sectors. From this point of view, FTAs or RTAs are useful only in terms of Mongolia's new production structure. FTAs or RTAs may help Mongolia export new products from the booming sector, gaining advantage from preferential market access. Those agreements are useful in the dissemination of fresh knowledge and technology transfer which is needed for enhancing productivity.

Here I should mention Mongolia's need for economic cooperation with Northeast Asian countries. Historically, Northeast Asian countries have always been strategically important partners for Mongolia in terms of their geographical proximity, historical relationships and low transportation costs. Now those countries are becoming the most important partners for Mongolia, resulting in a growing number of areas of common interest.

Third, by considering equity issues for the population, the regions of the country and the sectors of the economy, trade policy should be aimed at ensuring more equitable and stable growth. For these purposes export promotion and diversification is needed, especially in labor-intensive sectors, including agriculture. This is because most poor Mongolians work in the agricultural and service sectors.

Fourth, the sustainability of the economy is important for Mongolia. It requires paying attention to ecological problems, investing in education, health and other human development fields, and promoting investment in infrastructure.

Conclusion

Even though Mongolia is one of Asia's smallest countries in terms of the size of its economy and trade turnover, it is a rich country in terms of its land area and natural deposits, and is a country which has good prospects for economic growth. Mongolia is becoming one of the important suppliers of minerals to the world market.

Our study reveals that the mining sector can act as the engine that drives growth and resources in the rest of the economy through its twin roles of providing investible resources on the one hand and the stimulation of demand on the other. A crucial policy concern here is how to develop an integrated and balanced economic development strategy that will ensure that the resources and demand generated by mining do actually promote the other sectors of the economy and improve the living standard of Mongolian citizens. In the new era of globalization, every country aims at boosting people's incomes and the quality of life, by improving the terms of trade using demand opportunities in foreign markets, increasing the efficiency of trade participation, and improving the trade balance. In doing so, sound and strong policies are needed that target well-defined market segments, particularly in specific geographical regions.

References

Albertino, Alesina, Enrico Spolaore, and Romain

- Wacziarg, "Trade, Growth and the Size of Countries", *Handbook of Economic Growth*, Volume 1B, 2005
- Armington, P. S., "A Theory of Demand for Products Distinguished by Place of Production" *International Monetary Fund Staff Papers*, 16: 159-178, 1969
- Arrow, K.J., and G. Debreu, "Existence of an Equilibrium for a Competitive Economy", *Econometrica*, 22, 265-290, 1954
- Athanasios Vamvakidis, "Regional Integration and Economic Growth", *The World Bank Economic Review*, Vol. 12, No. 2: 251-270
- Banerjee, A.V., Newman. A.F., "Credit, Growth, and Trade Policy", 2004
- Bhattarai, K., "Small Open Economy Model of the UK", mimeo, University of Warwick, July 1999
- Cheng, Kevin C., "Growth and Recovery in Mongolia during Transition", IMF Working Paper WP/03/217, Washington D.C., November 2003
- Cornia, G.A., and others, "Pro-Poor Macroeconomics", UNRISD, 2006
- Dollar, D., and Kraay, A., "Trade, Growth and Poverty", *The Economic Journal*, 114 (February), F22-F49, 2004
- Davis, G.A., "Extractive Economies, Growth, and the Poor", Springer-Verlag, Berlin and Heidelberg, 2009
- Dervis, K., J. DeMelo, and S. Robinson, "General Equilibrium Models for Development Policy", CUP, New York, 1985
- Devarajan, S., Robinson, S., "The Influence of CGE Models on Policy", *TMD Discussion Paper No. 98*, August 2002
- Gylfason, T., "Nature, Power, and Growth", *CESifo working paper No. 413*, 2001
- Gylfason, T., Zoega, G., "Natural Resources and Economic Growth", *Central Bank of Chile Working Paper No. 142*, 2002
- Osmani, S.R., "Towards an Employment-Oriented Pro-Poor Development Strategy for Mongolia: A Background Paper", UNDP, Mongolia, 2006
- Pasha, H.A., "Pro-Poor Policies", UNESCAP, 2002
- Pedro, A.M., "Mainstreaming Mineral Wealth in Growth and Poverty Reduction Strategies", *ECA Policy Paper No. 1*, 2004
- Reinert, K. A., and D. W. Roland-Holst, "Armington Elasticities for United States Manufacturing Sectors", *Journal of Policy Modeling* 14, No. 5(1992): 631-639, 1992
- Robison, S., Cattaneo, A., "Updating and Estimating a Social Accounting Matrix Using Cross Entropy Methods", *Economic Systems Research*, Vol. 13, No. 1, 2001
- Rodrik, D., Grossman, G., Victor Norman, "Getting Interventions Right: How South Korea and Taiwan Grew Rich", *Economic Policy*, Vol. 10, No. 20, pp. 53-107, April 1995
- Roemer, M., and Gugerty, M., "Does Economic Growth Reduce Poverty?", technical paper, Harvard Institute for International Development, March 1997
- Ross, M., "How Does Mineral Wealth Affect the Poor", 2003
- Rosser, A., "The Political Economy of the Resource Curse: A Literature Survey", *IDS Working Paper 268*, 2006

鉱業を基盤としたモンゴルの開発・貿易政策

モンゴル国立大学経済学部教授 N. バタナサン

(要約)

モンゴル経済は新しい経済成長の時代に入った。世界有数の鉱床探査のお陰で、経済成長の可能性が大いに高まっている。近年、モンゴルは急速に発展を遂げ、国のGDP成長率は2011年に17.3%となり、今後、さらに目覚ましい成長が期待されている。この成長は、主にタバントルゴイとオユトルゴイという2つの大規模鉱山開発事業に関連している。

タバントルゴイとオユトルゴイの投資事業は、モンゴル経済全体に比類なき発展の機会をもたらした。同時に、この鉱業ブームは政策を大きく変えている。主要課題は「資源の呪い」である。

本論文では、これからのモンゴル経済発展の見通しを判断するため、ダイナミックな計算可能一般均衡（CGE）モデルを使い、鉱業部門が国の経済に与える影響を分析する。

本研究は、上述のようにモンゴル経済における鉱業部門の重要な役割を裏付けた。シミュレーションの結果、この2つの大規模投資事業は銅、金、石炭の世界市場価格に応じて、モンゴルのGDPを最大7.56倍まで飛躍的に増大させることが示された。また、鉱業を基盤とした成長は、モンゴルの輸出を大幅に増大させ、貿易収支を改善に導く。

「オランダ病」の場合、急激な鉱物輸出は、経済の変動、所得の不均衡、非鉱業部門における生産活動成長のクラウディングアウトを招きかねない。これらの結果、貧困が増え、人間の福利が妨げられる可能性がある。

そのため、貿易政策によって経済成長と公平さの均衡を図り、モンゴル経済と世界経済の統合を目指しながら、一方でより持続可能な経済成長を規定し、他方で「オランダ病」から生まれる市場の歪みの抑制を目指すという二重の役割を果たす必要がある。

本研究は、投資可能な資源と刺激的な需要という鉱業部門の2つの役割を通じて、その他の経済の成長を促す機動力となることを明らかにした。鉱業によって生み出された資源と需要が、実際にその他の経済部門の成長と、国民の生活水準の向上を保証する統合されたバランスの取れた経済成長戦略をどのようにして発展させるかが、重要な政策的関心事である。

グローバリゼーションの新しい時代において、各国は海外市場における需要の機会を基盤とした貿易条件の改善、貿易参入の効率の向上、貿易収支の改善を通じて国民の収入と生活の質の向上を目指している。そうした中、とりわけ特定の地理的地域において、明確に定義された市場区分を狙った安定した強い政策が求められている。

[英語原稿をERINAにて翻訳]

A Productivity Analysis of Mongolia's Mining and Quarrying Industry

A. Demberel

Senior Advisor, National Statistical Office of Mongolia

1. Introduction

The mining and quarrying industry plays an important role in the economy of Mongolia. The annual average growth of the value added in the mining and quarrying industry at 2005 constant prices was 4.0% in 1996-2000, 8.2% in 2006-2010, and 2.8% in 2011. In 2011, 21.7% of the country's GDP was produced in the mining and quarrying industry. In addition, 89.2% of export earnings were contributed by this industry. The share of coal and lignite mining and extraction of peat equaled 34.6% of the gross mining and quarrying industry output, which increased by 23.4 percentage points from the figure in 2000. The mining and quarrying industry is also playing an important role as a major source of Mongolia's state budget revenues (Table 1).

Productivity is measured by the value added per MNT 1,000 of expenditure on production and services. At the

national level, productivity is measured by GDP and measured by the value added at a sectoral level. Thus, productivity is estimated by the ratio of the value added to the sum of intermediate consumption, labor (remunerations) and fixed capital (consumption of fixed capital) multiplied by 1,000. The basic factor productivity determines the efficiency of the labor and capital utilization in production processes. Labor productivity is one of the total factors of production and determines the efficiency of labor. Labor productivity is calculated by the ratio of value added to the annual average number of employees.

2. The Productivity of Mongolia's Mining and Quarrying Industry

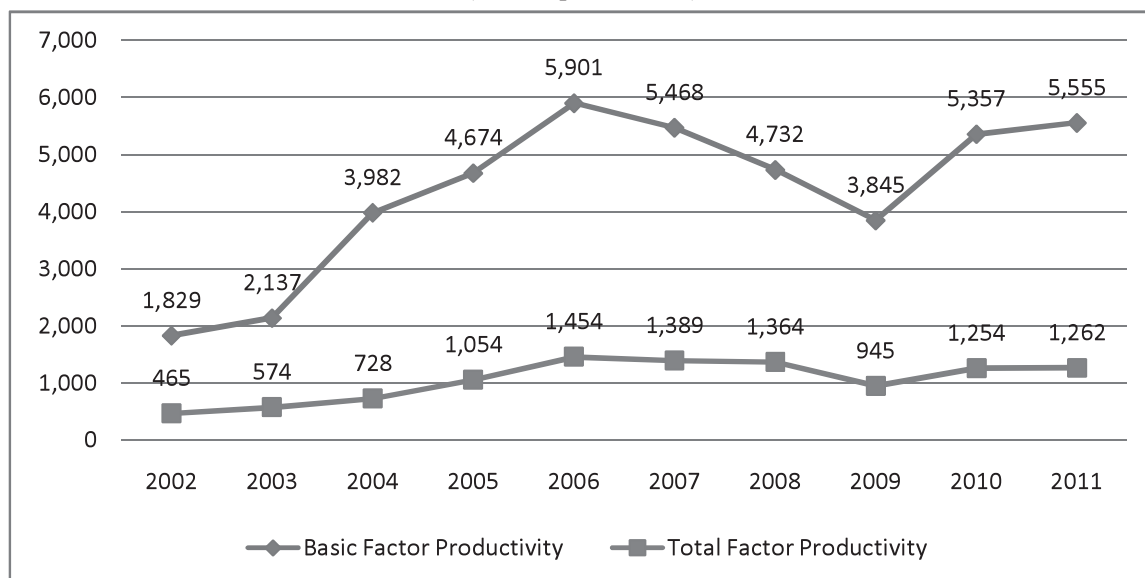
In 2011, the total factor productivity (TFP) in mining and quarrying was MNT 1,262, increasing by MNT 797, or

Table 1: Selected Indicators for Mongolia's Mining and Quarrying Industry

| | 1995 | 2000 | 2005 | 2010 | 2011 |
|---|------|------|------|------|------|
| Share of mining and quarrying value added of GDP, % | 12.0 | 12.0 | 23.5 | 23.6 | 21.7 |
| Share of mining and quarrying of the total industrial output, % | 51.3 | 51.7 | 66.3 | 71.6 | 68.6 |
| Share of the mining sector employees of total employment, % | 2.4 | 2.3 | 4.1 | 3.3 | 4.4 |
| Share of mineral exports of total exports, % | 65.5 | 35.2 | 42.7 | 81.0 | 89.2 |
| Composition of the mining and quarrying industry, % | | | | | |
| - Mining of metal ores | 85.5 | 80.6 | 88.6 | 60.7 | 55.6 |
| - Mining of coal and lignite, extraction of peat | 8.2 | 11.2 | 7.5 | 29.9 | 34.6 |

Data source: Mongolian Statistical Yearbook, 2005-2011 editions, National Statistical Office of Mongolia

Figure 1: Total and Basic Factors of Productivity for the Mining and Quarrying Industry (current prices, MNT)



Data source: Mongolian Statistical Yearbook, 2005-2011 editions, National Statistical Office of Mongolia

Table 2: Labor Productivity and Real Wage Growth in Mongolia (2000 = 100%)

| ISIC | Indicators | 2000 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 |
|--|---|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| National | Real change of labor productivity | 100.0 | 116.8 | 123.3 | 132.9 | 142.7 | 143.9 | 149.5 |
| | Real change of the average wage | 100.0 | 116.3 | 138.2 | 158.9 | 206.4 | 217.0 | 218.2 |
| | Ratio of labor productivity and real average wage changes | 1.00 | 1.00 | 0.89 | 0.84 | 0.69 | 0.66 | 0.69 |
| Agriculture, hunting and forestry | Real change of labor productivity | 100.0 | 101.1 | 106.4 | 121.8 | 129.8 | 147.2 | 123.5 |
| | Real change of the average wage | 100.0 | 78.1 | 101.2 | 107.1 | 153.2 | 162.8 | 141.9 |
| | Ratio of labor productivity and real average wage changes | 1.00 | 1.29 | 1.05 | 1.14 | 0.85 | 0.90 | 0.87 |
| Mining and quarrying | Real change of labor productivity | 100.0 | 76.1 | 71.9 | 69.0 | 64.5 | 88.7 | 93.8 |
| | Real change of the average wage | 100.0 | 148.3 | 167.9 | 212.2 | 260.0 | 307.9 | 384.3 |
| | Ratio of labor productivity and real average wage changes | 1.00 | 0.51 | 0.43 | 0.33 | 0.25 | 0.29 | 0.24 |
| Manufacturing | Real change of labor productivity | 100.0 | 168.4 | 210.2 | 261.6 | 267.2 | 184.9 | 189.9 |
| | Real change of the average wage | 100.0 | 109.0 | 132.2 | 139.0 | 190.4 | 185.3 | 196.8 |
| | Ratio of labor productivity and real average wage changes | 1.00 | 1.55 | 1.59 | 1.88 | 1.40 | 1.00 | 0.96 |
| Wholesale and retail trade; repair of personal and household goods | Real change of labor productivity | 100.0 | 86.7 | 90.3 | 89.3 | 99.9 | 91.2 | 139.3 |
| | Real change of the average wage | 100.0 | 102.2 | 110.8 | 137.9 | 177.9 | 188.4 | 180.4 |
| | Ratio of labor productivity and real average wage changes | 1.00 | 0.85 | 0.81 | 0.65 | 0.56 | 0.48 | 0.77 |

Data source: Mongolian Statistical Yearbook, 2005-2011 editions, National Statistical Office of Mongolia

2.7%, from the figure in 2002; by MNT 208, or 19.7% higher, than the figure in 2005; and by MNT 8, or 0.6%, compared to the 2010 level. The basic factor productivity in the mining and quarrying industry was MNT 5,555 in 2011, which increased by MNT 3,726, or 3 times, from its level in 2002, and was higher by MNT 881, or 18.8%, and by MNT 198, or 3.7%, compared to 2005 and 2010, respectively (Figure 1).

The annual average growth of labor productivity in the mining and quarrying industry at 2005 constant prices amounted to MNT 23.0 million in 2000, but it decreased by 4.4% annually during the period 2000-2004, and increased by 3.6% annually during the period 2005-2010.

The total change in GDP during the period 1991-2010 was MNT 1,864.7 billion estimated at 2005 constant prices, of which: MNT 805.2 billion, or 43.2%, was due to the growth of the number of employees; and MNT 1,059.5 billion, or 56.8%, was provided by the growth of an intensive factor or labor productivity.

At the national level, an adequate ratio between labor productivity and the inflation-adjusted change of average wages was lost in the period 2002-2010. In other words, inflation-adjusted wage growth was more than the labor productivity growth during the period.

The ratio of labor productivity to real average wages for the mining and quarrying industry was 1.18 in 2001, but decreased to 0.51-0.24 in the period 2005-2010.

3. Description of the Models and Results

Two methods were used in this study: (1) the growth accounting approach was used to measure the Total Factor Productivity (TFP); and (2) a productivity regression using the ordinary least-squares (OLS) method was used to identify significant factors that influence labor productivity

(LP) growth.

A simple model can serve to illustrate the concept of the growth accounting approach. Suppose the time path of a nation's aggregate economic activity can be summarized by the relationship:

$$Y_t = A_t \cdot f(K_t, L_t, t), \quad t = 1, \dots, T, \quad (1)$$

where, Y_t is a certain measure of real aggregate economic output (for example, GDP or GNP) in year t ; K_t is a measure of the capital stock or capital service in use in year t ; L_t is a measure of labor in employment in year t ; t is a time index intended to capture the level of technology in place in year t ; A_t is an index of the efficiency with which K and L are utilized in year t ; and $f(K_t, L_t, t)$ is a production function that describes how capital, labor, and technology were used to produce output.

The basic model for GDP growth decomposes output growth into: labor growth, capital growth, and TFP growth.

$$\Delta \ln Y = S_L^* \Delta \ln L + S_K^* \Delta \ln K + \Delta \ln TFP \quad (2)$$

$$\text{Output} = \text{Labor} + \text{Capital} + \text{TFP}$$

In terms of growth, it can be expressed as: TFP growth = Output growth - Capital growth - Labor growth

The basic model for labor productivity growth decomposes the labor productivity growth into: capital deepening and TFP growth. Capital deepening means an increase of the capital intensity, i.e., the capital service used by a worker or per work-hour.

$$\Delta \ln\left(\frac{Y}{L}\right) = S_k^* \Delta \ln\left(\frac{K}{L}\right) + \Delta \ln TFP \quad (3)$$

As illustrated in Table 3, the contributions of labor and capital for output growth of the mining and quarrying industry were positive, but the contribution of Total Factor Productivity was negative.

Results of the Regression Analysis

$$\text{LOG_Y} = 0.2746 * \text{LOG_CAP} - 0.0822 * \text{LOG_FDI} + 3.0711$$

Y = Labor productivity of the mining and quarrying industry at 2005 constant prices, billion MNT;

CAP = Capital deepening of the mining and quarrying industry at constant prices, million MNT (X1)

FDI = FDI in the mining and quarrying industry (FDI, TOTAL*100) (X2)

Due to the lack of long-term dynamic data, labor was substituted by total employment and total capital by the consumption of fixed capital by industries. A GDP deflator at 2005 prices was used to estimate the amount of fixed capital consumption at 2005 constant prices.

The above regression equation suggests that a raising of the capital deepening in the mining and quarrying

Table 3: Results of the Growth Accounting Model for Mongolia's Mining and Quarrying Industry (%)

| | GDP | Labor | Capital (Consumption of fixed capital) | TFP |
|----------------|-------|--------|--|--------|
| 1996-2000 | 4.0 | 0.43 | 10.9 | -7.33 |
| 2001-2005 | 8.2 | 16.4 | -1.0 | -7.2 |
| 2006-2010 | 2.8 | -3.1 | 7.9 | -2.0 |
| 2011 | 8.7 | 32.3 | 15.3 | -38.9 |
| Contributions: | | | | |
| 1996-2000 | 100.0 | 10.8 | 272.5 | -183.3 |
| 2001-2005 | 100.0 | 200.0 | -12.2 | -87.8 |
| 2006-2010 | 100.0 | -110.7 | 282.1 | -71.4 |
| 2011 | 100.0 | 371.3 | 175.9 | -447.2 |

Data source: Mongolian Statistical Yearbook, 2005-2011 editions, National Statistical Office of Mongolia

industry will result in labor productivity growth. On the other hand, it also indicates that an increased share of foreign direct investment (FDI) in the mining and quarrying sector of the total FDI would result in a labor productivity decline in this sector. The regression results were statistically significant (Table 4).

4. Conclusion

The Mongolian economy is still dependent on the primary sectors of mining and agriculture, and the share of manufacturing of final products remains low. Nevertheless, the labor productivity increase was an important factor in Mongolia's economic growth during the period 1991-2010.

The results of the productivity analysis of the mining and quarrying industry suggested that in order to adhere to a proper ratio between the labor productivity and average wages, it is essential to focus on certain issues of the country's development policy. They include, but are not limited to:

- Implement and adhere to the principle of consistent increase of wages on the basis of improved productivity and skills;
- Take measures to raise the contribution of the manufacturing sector to GDP along with enhancing the effectiveness of labor productivity and investment, while steadily developing the mining and quarrying sectors as a top priority in general.

Productivity improvement should not be limited to labor productivity alone. Similar to other countries, it is necessary to give importance to the productivity of all areas because it affects the development of all economic sectors. Total factor productivity estimations need to be extensively used in the country's development policy and planning.

A continuous and intensive economic growth should be attained by increased labor productivity and investment efficiency in the mining industry at first, and be followed by an intensive development of the processing industries. The country needs to make its economy a multifaceted one that is private-sector-led, high-technology-based and expert-oriented. Dynamic processing industries will help the economy to become less dependent on mineral resources.

Table 4: The Regression Results

| Method: Least Squares | | | | |
|---------------------------|-------------|--------------------------------|-------------|-------------|
| Sample: 1995-2011 | | | | |
| Included observations: 17 | | | | |
| Variable | Coefficient | Standard error | t-statistic | Probability |
| LOG_CAP | 0.2746 | 0.0551 | 4.9793 | 0.0002 |
| LOG_FDI | -0.0822 | 0.0267 | -3.0751 | 0.0082 |
| C | 3.0711 | 0.1080 | 28.4313 | 0.0000 |
| R-squared | 0.7056 | Mean dependent variable | | 2.9574 |
| Adjusted R-squared | 0.6636 | S.D. dependent variable | | 0.1469 |
| S.E. of regression | 0.0852 | Aikake's information criterion | | -1.9293 |
| Sum squared residual | 0.1016 | Schwarz criterion | | -1.7822 |
| Log likelihood | 19.3987 | F-statistic | | 16.7781 |
| Durbin-Watson statistic | 1.7094 | Probability (F-statistic) | | 0.0002 |

References

Asian Productivity Organization (APO) (2011), *Productivity Databook 2011*, Tokyo: Asian Productivity Organization; pp. 47-65. Available online: http://www.apo-tokyo.org/publications/files/ind-45-apo_pdb-2011.pdf

Bosworth, B., and Collins, S. (2003), "The Empirics of Growth: An update", *Brookings Paper on Economic Activity*, 34: 113-206

National Statistical Office of Mongolia, *Mongolian Statistical Yearbook*, 2005-2011 editions, Sections 4, 5, 9 and 11

State Great Khural [Parliament] of Mongolia (2008), *Millennium Development Goals-based Comprehensive National Development Strategy of Mongolia*, Parliamentary Resolution No. 12, Ulaanbaatar, pp. 7 and 20-29

モンゴルの採掘・採石業の生産性分析

モンゴル国家統計局上級アドバイザー A. デンベレル

(要約)

モンゴル経済において採掘・採石業は重要な役割を果たす。2011年の採掘・採石業生産高は、GDPの21.7%を占めた。また、この部門は国の輸出の89.2%を担った。

この産業における付加価値の2005年実質価格は1996～2000年に4.0%上昇し、2006～2010年に8.2%、2011年は2.8%となった。

2011年の採掘・採石部門の全要素生産性は1,262トゥグルグとなり、2002年比で797トゥグルグまたは2.7%の増加、2005年比で208トゥグルグまたは19.7%の増加、2010年比で8トゥグルグ、0.6%の増加であった。

採掘・採石業部門の平均賃金の労働生産性比率割合は2001年で1.18であったが、2005～2010年で大幅に減少し0.51～0.24となった。

労働生産性の増加に大きな影響を及ぼす要因を特定するため、本調査では2つの方法を採用した。(1) 全要素生産性(TFP)測定のための成長会計アプローチの使用。(2) 最小二乗法(OLS)を使った生産回帰。

1996～2010年の採掘・採石の生産量増加に対する労働及び資本の貢献はプラス、一方、全要素生産性はマイナスであった。従って、この分野での全要素生産性及び投資の有効性を改善させることが必要である。

[英語原稿をERINAにて翻訳]

A Proposal for Establishing the Northeast Asian Coal Association

Ch. Oyunjargal

Researcher, Institute for Strategic Studies, Mongolia

① Introduction

As one of the pillars of the Mongolian economy, the mining sector, especially coal, has been attracting a lot of attention. Having a GDP per capita of US\$4,800 in 2011,¹

Mongolia is no longer in the low-income country classification, and mining revenues account for a large part of the state budget. Even though this indicates Mongolia's progress towards a market economy, Mongolia can do better than that. In other words, Mongolia is rich in mineral resources, and if some obstacles, such as difficulties in transportation, price fluctuation and its two neighbors' influence, are solved, then the country would witness more promising economic development. Therefore, this paper aims to propose some solutions for the abovementioned obstacles and the possibilities of facilitating Mongolia's active participation in Northeast Asian regional integration.

With ample natural resources, Northeast Asia includes six states: the Russian Federation, China, the ROK, the DPRK, Japan and Mongolia. The economic situation of the countries in the region greatly affects the global economy. In recent years the coal consumption of the region has been dramatically growing. For example, according to the Coal Statistics data, Japan was the leading coal importing country by its imports, while China ranked second and the ROK ranked third in the world in 2010.² But last year China became the largest consumer of coal in the world with total consumption of 182.4 million tons, overtaking Japan.³ According to the estimation of the China Energy Council, the country's energy demand reached 4.19 trillion kWh in 2011, an increase of 14.56% compared to the previous year,⁴ and China is projected to import one trillion tons of coal by 2030.⁵ Currently, Mongolia has 175 billion tons of coal reserves, 205 million tons of oil and 68,000 tons of uranium reserves. With 30% of total reserves consisting of coking coal, Tavan Tolgoi has been attracting a lot of attention, but Mongolian coal is still outside of the economic circulation of Northeast Asia. Mongolia is making efforts to join the coal market due to both its domestic and foreign needs.

② However, these Efforts Are Being Constrained by some Obstacles that the Mongolian Mining Industry Has to Solve.

Obstacle 1: If Mongolia cannot solve the transportation issue, it will be difficult to export the commodity to the international market.

In Northeast Asia there are nine transportation trade corridors, and out of them the port of Tianjin is the closest one connecting to the Mongolian railway system, with its single north-south route, with the sea. Because the Mongolian railway system uses the broad gauge, it has the disadvantage of having to transfer freight to another train when coming to the Chinese railway system with its standard gauge. Recently the port has been exceeding its limits, and Mongolia has started to significantly export mining products. Therefore, there is no option but to use another port. The most suitable option for Mongolia is the port of Rajin in the Tumen River Corridor. In order to connect its strategically important mineral deposits to "third" markets, Mongolia will be able to use this port by building a railway to Dornod Aimag. In the railway development plan that will be completed by 2015, a railway connecting Mongolia to the Tumen River Corridor has been drawn up,⁶ but currently the actual work has not been started yet (Figure).

Obstacle 2: How Do We Participate in Russia-China Cooperation?

In September 2010, Russia and China signed an agreement to cooperate in the energy sector in Blagoveshchensk, Russia. According to the agreement, the two sides agreed that Russia is to export 15 million tons of coal in the first 5 years of the agreement and 20 million tons of coal in the next 20 years, while China is to issue US\$6 billion of loans to Russia in exchange.⁷ It indicates that our two neighbors have been deepening their energy cooperation. In this situation, there is a risk that Mongolia may not be able to take advantage of mineral resources, since our country is not the only one exporting to China.

Obstacle 3: Increasing the participation of third countries and a number of stable consumers will help to

¹ "The World Factbook: Mongolia": <https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/mg.html>

² "Coal Statistics": <http://www.worldcoal.org/resources/coal-statistics/>

³ "China overtakes Japan as biggest coal importer for the first time": <http://www.reuters.com/article/2012/01/26/coal-china-japan-idUSL4E8CQ3GS20120126>

⁴ "2010年通年の電力使用量は15%増に一中国": http://www.excite.co.jp/News/chn_soc/20110119/Recordchina_20110119002.html [in Japanese]

⁵ "中国の石炭輸入が2030年には10億トンに激増": http://www.asiam.co.jp/news_coal.php?topic=014357 [in Japanese]

⁶ "Talking on connecting the strategic mines by railway": <http://numgeo.wordpress.com/>

⁷ "China and Russia signed six billion U.S. dollars agreement to develop coal resources in the Russian Far East": <http://www.financeguider.com/china-and-russia-signed-six-billion-u-s-dollars-agreement-to-develop-coal-resources-in-the-russian-far-east/>

keep a balance.

In 2011, the mining sector accounted for 89% of Mongolia's total exports, and exports to China accounted for 92% of the total export volume. There is no guarantee that China's imports will not decrease or the market price will be stable over time. Chinese coal exports from Australia increased 12-fold from 3.5 million tons to 44.6 million tons within just one year.⁸

As mentioned above, there are many leading coal-importing countries in Northeast Asia. Countries such as Japan and the ROK, which are called Mongolia's "third neighbors", have expressed their interest in participating in the Tavan Tolgoi project, but progress has not yet been seen.

The main barrier to trade is difficulties in transportation, while the only viable option for transporting commodities from Mongolia to third countries is transporting via China. Due to China's insufficient capacity for transit transportation, Mongolia's trade with third countries has been stagnant.

Obstacle 4: Price volatility negatively affects the domestic economy and increases the foreign trade deficit.

The Mongolian economy is influenced by Chinese domestic price fluctuations, since Mongolia exports to only a few countries and uses the coal price in China as a benchmark price. In previous years, Mongolia was heavily impacted by the price volatility of copper. There are a lot of consequences for Mongolia when the copper price falls.

There is an established "Coal Export Price Council" in Mongolia aimed at stabilizing the domestic coal price.⁹ Most of the council members are foreign invested companies, such as South Gobi Sands, MAK, Chinhua MAK and Nariin Sukhait; thus there is an anxiety that this council would create advantages for the benefit of foreign investors. Therefore, there is a need to establish a proper price management mechanism in Mongolia.

According to the Monthly Macroeconomic Review of Mongolia's Economic Policy and Competitiveness Research Center, in June 2012 Mongolia's exports increased by 14% from the previous year due to the increased exports of the mining sector, including 48% for coal export growth, 30% for ore export growth, and 41% for crude oil export growth. However, the foreign trade deficit increased by 18%, exceeding US\$1 billion.¹⁰

Although the economic situation is not good enough, Mongolia defines the mining sector as a key driver of its future economic development. One of the leading directions specified in the Millennium Development Goals-based Comprehensive National Development Strategy of Mongolia is to exploit strategically important mineral deposits to build up savings, ensure a high rate of economic growth, and develop modern processing industries.¹¹ Therefore it can be argued that one of the potential solutions

for all these obstacles, in a comprehensive manner, is to establish a coal association in Northeast Asia.

③ How Would the Abovementioned Obstacles Be Solved by Establishing the Northeast Asian Coal Association?

The solutions for the abovementioned obstacles and other accompanying benefits by establishing the coal association are as follows:

Solution to Obstacle 1: Difficulties in transportation

By establishing the coal association Mongolia would receive international support for opening a new gateway to the sea, and it would facilitate the country's foreign trade. As the building of the domestic railway system is highly dependent on Russia's position, and current railway transportation is under the significant influence of China, international support would be the most important driver for solving these obstacles. With the support of this coal association, Mongolia would be able to solve its transportation difficulties and facilitate commodity trade with Japan and the ROK, which is currently idling due to the transit transportation impasse of China.

In Article 125 of the UN Convention on the Law of the Sea landlocked states' right of access to and from the sea was defined, while transit customs duties, taxes and other charges were mentioned in Article 127.¹² Also, WTO's GATT (The General Agreement on Tariffs and Trade) specified in detail landlocked states' transit rights, and all duties and other charges related to the transit.¹³

Solutions to Obstacles 2 and 3: Chinese and Russian cooperation and third countries' participation

The participation of the ROK and Japan in the association will facilitate Mongolia's "third neighbor" policy. In Mongolia's National Security Concept it is specified that investments of any foreign country do not exceed one third of overall foreign investment into the country. But currently investments from China have already exceeded 50% of Mongolia's total FDI made after 1990. Thus, the establishment of the coal association will be an important step for the fulfillment of the Concept principle. In other words, the coal association will be aimed at increasing and stabilizing investments from third countries into the Mongolian economy, which is already dominated by China. In doing so, not only Mongolia, but all other countries in the region would have a fair platform for discussing mutually beneficial ways and solutions for effectively utilizing one of Mongolia's abundant natural resources, coal.

Solution to Obstacle 4: Price volatility and the national economy

By establishing the coal association, it would be

⁸ "拡大する中国の石炭輸入": <http://eneken.ieej.or.jp/data/3287.pdf> [in Japanese]

⁹ "Council for coal exporting price": <http://www.mongolchamber.mn/index.php/councils/coal>

¹⁰ "Monthly Macroeconomic Review": http://ecrc.mn/images/stories/Macro_overview_201206.pdf

¹¹ "National Development Comprehensive Strategy": <http://www.mecs.gov.mn/article-120-306.mw>

¹² "United Nations Convention on the Law of the Sea (UNCLOS) and its attachments": http://www.monmarad.gov.mn/index.php?option=com_content&view=article&id=60%3A2012-05-03-07-13-55&catid=6%3A2010-11-01-06-44-08&Itemid=78&lang=mn [in Mongolian]

¹³ "モンゴルの地下資源開発・利用と国際関係" 松岡克武, *ERINA Report No. 105*, pp. 69-70 [in Japanese]

possible to ensure coal price stabilization by negotiating and determining prices and supply quotas with the participation of all member states. Therefore, the domestic price fluctuations of China would no longer impact Mongolia's coal export prices and it would bring positive developments for the Mongolia's economy.

Other accompanying benefits: If we see that Mongolia's landlocked position is hindering its development, development based on the mining sector will be accelerated by solving this issue. Both the public domestically and foreign countries are eagerly waiting for it.

Therefore, establishing the Northeast Asian Coal Association will provide Mongolia with new opportunities from which the country can economically benefit, cooperate with its two neighbors in mutually beneficial ways, join regional economic integration based on its infrastructure, and the "third neighbor" policy, one of Mongolia's foreign policy priorities, can successfully be implemented.

④ **Learning from Others' Experiences**

After studying the mining associations and cooperation organizations which are successfully operating in various regions, it is argued that OPEC¹⁴ and the European Coal and Steel Community can be models for the establishment of the Northeast Asian Coal Association.

- The European Coal and Steel Community was established in 1951, comprised of the Benelux,¹⁵ West Germany, France and Italy. The community was intended to end the hostility between Germany and France through the agreement to jointly exploit coal and steel, which was the most

important commodity in war. In other words, this agreement helped to overcome political tension.

- The Organization of the Petroleum Exporting Countries was formed by a treaty signed by Iran, Iraq, Kuwait, Saudi Arabia and Venezuela in September 1960. Before the founding of OPEC the world petroleum price used to be determined by the "Seven Sisters".¹⁶ Yet these companies were challenged by the increasing influence of OPEC, and now OPEC holds the right to set the global petroleum price.

With 12 member states, OPEC aims to unify and coordinate members' petroleum policies, ensure the stabilization of prices in international oil markets and supply petroleum to consuming nations in an efficient and regular manner. In order words, one of the organization's main functions is to ensure the stabilization of prices and avoid potential risks. With this function, OPEC will become a good example for forming a coal association in Northeast Asia.

We will establish the coal association with the same functions and aims that OPEC has, but strive to have all exporting and importing countries of the Northeast Asian region join and promote their active participation.

⑤ **Conclusion**

In Northeast Asia there are positive factors necessary for regional integration, such as Russia's natural resources, Japan's high technology and the workforces of China and the two Koreas. China, the ROK and Japan agreed to establish an FTA in May 2012, and Mongolia's two neighbors are expanding their relations. These

Figure: Mongolia's Railway Development Plan



¹⁴ "OPEC" = The Organization of the Petroleum Exporting Countries

¹⁵ The Benelux is a customs union in Europe comprising three neighboring countries: Belgium, the Netherlands and Luxembourg.

¹⁶ The "Seven Sisters" is a group of dominant petroleum companies comprising Anglo-Persian Oil Company, Royal Dutch Shell, Standard Oil of California, Standard Oil of New Jersey, Standard Oil of New York, and Texaco.

developments suggest that Mongolia needs to begin participating in the regional integration process. Otherwise, Mongolia would remain outside of the integration process.

Moreover, coal is a vital national resource for ensuring energy security in the future. In recent years, the coal market has been expanding significantly, and many countries are increasing their attention on coal due to the Fukushima nuclear disaster.¹⁷ Therefore, Mongolia needs to take steps, using its advantages, and make efforts towards establishing the Northeast Asian coal association.

On the other hand, even though Mongolia would get a number of benefits from the establishment of the proposed

coal association, the reactions and views of other countries should be considered. As Japan and the ROK are interested in entering the Mongolian coal market, it is hoped that they would participate actively in the project. But China may have negative reactions to the proposal. Accordingly, Mongolian governmental bodies, such as the Ministry of Mineral Resources and Energy, the Mineral Resource Authority, and the Ministry of Foreign Affairs, along with other research institutes' efforts, will surely be important in terms of studying the proposal and initiating efficient measures to realize this proposal and properly addressing the reactions and mitigating the potential risks.

北東アジア石炭協会設立への提言

モンゴル戦略研究所研究員 Ch. オユンジャルガル

(要約)

近年、北東アジア諸国では、石炭の消費量が増加の一途をたどっている。例えば、2008年には、世界最大の石炭輸入国は日本で、続いて韓国が第2位、中国が第6位であった。また、石炭を含むモンゴルの鉱物資源は、ますます注目を浴びている。しかし、輸送、石炭価格の変動、隣り合わせた2カ国の影響など、モンゴル国内にも多くの課題が存在する。モンゴルの輸出は、1カ国1経済部門に大きく依存している。2011年、鉱業部門だけでモンゴル輸出全体の89%を占め、輸出先は中国が全体の92%であった。港湾・中継国を通る輸送品に関係した様々な問題が、モンゴルの外国貿易にマイナスの影響を与えている。また、日本や韓国などの「第三隣国」のモンゴルへの経済参加を増やす必要がある。

上述の問題や課題を解決する可能性の1つに、北東アジアにおける石炭協会の設立がある。石炭価格の変動や輸送問題など、モンゴルが抱える国内問題の多くは、提唱される北東アジア石炭協会に基づいた国際支援によって解決される。また、このような協会は、モンゴル経済への第三国の参加を促し、モンゴルが潜在的な北東アジア統合のプロセスに携わる機会を育てることになる。

[英語原稿をERINAにて翻訳]

¹⁷ "日本の大地震が中国の石炭市場に与える影響は": http://japanese.china.org.cn/business/txt/2011-03/28/content_22239443_3.htm [in Japanese]

Mongolia-DPRK Economic Relations

N. Dorjsuren

Chief of the Center for International Security Studies, Institute for Strategic Studies, Mongolia

1. Introduction

In the foreign policy concept of Mongolia, which was updated in 2011, it states that Mongolia shall strengthen its position in Asia and secure a constructive participation in the political and economic integration process in the region. Within the framework of this objective, greater attention shall be given to Asia and the Pacific region, in particular to Northeast Asia. Mongolia shall take an active part in the process of initiating dialogue and negotiations on the issues of strengthening regional security and creating a collective security mechanism. The prerequisites for participating in regional integration shall be created primarily through expanding and promoting bilateral relations with the countries in the region.

From this point this paper discusses: How will the recent changes in the DPRK under the new leader Kim Jong Un affect the bilateral relations between Mongolia and the DPRK?; and what type of option strategy would Mongolia use?

Keeping these questions in mind, a brief overview of the recent situation and the prospects for the DPRK's new economic reforms is discussed in Part 2. At the beginning of 2012, the Eurasia Group ranked the DPRK fifth in the Top Risks for 2012 and focused on instability in the power succession process following the death of former leader Kim Jong Il on 17 December 2011. Many DPRK analysts said that 29-year-old Kim Jong Un is too young and inexperienced to lead a country. However, the new DPRK leader is increasing his position and leadership. Now he is officially Marshall of the DPRK, First Secretary of the Workers' Party, Chairman of the Central Military Commission, First Chairman of the National Defense Commission and Supreme Commander of the Korean People's Army. In addition, he is planning to undertake some new economic reforms. Therefore the changes in the DPRK are very important for understanding the direction of Kim Jong Un's domestic and foreign policies.

Part 3 discusses some features of Mongolia-DPRK economic relations.

2. The DPRK's New Economic Reforms

The DPRK still sticks to being a self-reliant socialist economy. In 2010, after 44 years, the political bureau of the Worker's Party called a top party meeting and declared it would lead the people of the DPRK to develop their own Korean version of socialism. In addition, in 2012 it declared that the DPRK will become a "Power State" and a "Strong and Prosperous Nation".

However in recent times, the centrally-planned and isolated economy has been facing some difficulties. In the first New Year message of 2012, the DPRK leadership didn't mention high economic growth. Many of the analysts say that the socioeconomic plan of the DPRK for last year has not been fully realized. The DPRK is spending almost 20% of its GDP on national defense. The DPRK's GDP per capita in 2011 was US\$1,800 and ranks 194 among the 226 countries compared.¹ This shows that the DPRK is still one of the poorest countries in the world. In addition, the Food and Agriculture Organization of the United Nations (FAO) said on 14 June 2012 that the DPRK needs immediate food assistance.² Earlier this year, the UN said two-thirds of the DPRK's 24 million people were suffering from a chronic food shortage. According to some data, the DPRK has a shortfall of 400,000-800,000 tons of grain every year. However, external assistance from the ROK and the United States stopped after the Cheonan incident in March 2010 and the exchange of artillery fire on Yeonpyeong Island in November 2010.

Therefore the mission of the new DPRK leader is to resolve the economic and food crises. On 11 July 2012, Kim Jong Un announced the establishment of a new economic reform. (Some sources call it the "June 28 Policy".) He will focus on "developing the economy and improving the people's livelihoods." The new policy will be implemented from September.³ In my view, the new economic reform has the following characteristics:

1. This is the first step of reform announced since Kim Jong Un took power. Regarding economic reforms, in November 2009 his father approved a currency reform (exchanging new currency for old currency at the rate of 100:1) and it damaged the economy and potentially affected the lifestyle of DPRK citizens. However, many analysts have said that the changes under Kim Jong Un could follow the Chinese or Vietnamese models. Because of China's influence on the DPRK's economy, the DPRK could adopt aspects of China's economic reform policies. However, when I asked DPRK officials, they said the DPRK will undertake reforms following a DPRK style.
2. Kim Jong Un is trying to move economic decision-making power towards the government's control. It is not a secret that the army plays a leading role not only in the political life of the DPRK, but also in economic decision-making. The major infrastructure projects in the DPRK are conducted by the military, and the military has its

¹ <https://www.cia.gov/library/publications/the-worldfactbook/rankorder/2004rank.html?countryName=Korea,%20North&countryCode=kn®ionCode=eas&rank=194#kn>

² <http://japanese.yonhapnews.co.kr/northkorea/2012/06/14/0300000000AJ20120614001900882.HTML> [in Japanese]

³ <http://sankei.jp.msn.com/world/news/120725/kor12072517250004-n1.htm> [in Japanese]

own channels to get foreign currency. Therefore Kim Jong Un and his uncle Jang Song Taek, a Vice-Chairman of the National Defense Commission, are trying to take more economy-oriented policies. Therefore the removing of the Chief of the General Staff of the People's Army, Vice Marshal Ri Yong Ho, from his posts "because of illness" on 16 July 2012 was a big step in Kim Jong Un's consolidation of his authority over the military. From Ri Yong Ho's removal, we can also suspect that it could be a sign of generational change in DPRK politics.

3. The DPRK is actively managing to attract foreign investment. According to the United Nations Conference on Trade and Development (UNCTAD) statistics handbook report, despite the UNSC sanctions on the DPRK, foreign investment in this country was US\$1,437.24 million in 2009. Furthermore, the DPRK leaders made some foreign visits in 2012, such as the Chairman of the Presidium of the Supreme People's Assembly of the DPRK, Kim Yong Nam, and two top economic officials: one is the Chief of the Joint Venture and Investment Commission, Mr. Ri Kwang Gun, and the other is the Minister of Light Industry, An Jong Su, who visited Singapore and Indonesia. In addition, the DPRK Foreign Minister visited Egypt in May 2012 and in June a delegation of the Workers' Party visited Laos, Vietnam and Myanmar.

However, with the abovementioned new changes in the DPRK, we have every reason to say that Kim Jong Un is ready to change towards a more "normal" state, but it's too early to say that the changes could bring big changes for the country's economy. On 24 July 2012, the ROK Unification Minister Yu Woo-ik said at a forum on Jeju Island that: "North Korea's recent radical changes under new leader Kim Jong Un should not simply be taken as signs for a looming reform drive", "(they) do not need to lead to a hasty conclusion for the shift to a people-first policy from the military-first policy, or for a reform or opening-up" and "Likewise, the Mickey Mouse performance should not necessarily mean a signal for reform and opening-up."⁴

The top priority of DPRK national policy will still be ensuring regime security. Therefore the system will be unstable for the time being and the risk of a nuclear test continues on the Korean Peninsula. The DPRK's rocket launch on 13 April 2012 ended in failure, and in May 2012 Pyongyang proclaimed itself as a "nuclear state" in its new constitution. In addition, the DPRK could be preparing for its third nuclear test.

3. Mongolia-DPRK Economic Relations

"We will keep the channel warm with North Korea" Mongolian Prime Minister S. Batbold said in an interview with Bloomberg Television on 21 July 2012, in Beijing⁵

Considering the new changes in the DPRK under new DPRK leader Kim Jong Un, the recent situation and the prospects for the bilateral relations between Mongolia and DPRK can be described as follows:

First, Mongolia has maintained close relations with the DPRK for the past sixty years and the relationship between the two countries is developing in the fields of politics, economy, culture, education and health. However there is no trade link at all between the two countries.

Both sides are paying a lot of attention to their growing economic relations. For instance in May 2005, the DPRK Deputy Minister of Food and Agriculture visited Ulaanbaatar and the two sides discussed building a joint farm in Mongolia. In 2007, the Chairman of the Presidium of the Supreme People's Assembly of the DPRK, Kim Yong Nam, visited Mongolia and the two parties signed bilateral cooperation agreements on trade, marine transport and labor force exchange. In addition, in 2010 an MOU on economic and trade cooperation development was signed between the Rason Municipality of the DPRK and the Ministry of Road, Transport, Construction and Urban Development of Mongolia.

Mongolia's securing of sea access to the Pacific via DPRK ports is highly strategic and could reduce its dependence on Chinese and Russian transit ports.⁶ However, there is no movement on developing the access to the DPRK ports. In late 2011 China had already agreed to invest 19 billion yuan (US\$3 billion) into Rason, for which it would receive the lease of three piers for 50 years.⁷ Therefore, we should undertake more research on the potential sites for the expansion of port and industrial facilities.

Second, currently over 2,000 DPRK citizens are working in several of Mongolia's industrial sectors, such as construction, light industry, health, agriculture, mining, the processing industry, and food. According to the Intergovernmental Agreement between Mongolia and the DPRK on Exchanging Labor Force, the Mongolian government does not impose employment taxation on DPRK citizens. However, the Mongolian Ministry of Social Welfare and Labor may impose other taxation on DPRK workers. According to the DPRK side, if the Mongolian government were to impose a US\$210 tax per person, there would not be any other option for the DPRK workers except going home, since working in Mongolia would not be beneficial for them. Therefore, the DPRK proposes that the Mongolian government should continue to not impose taxation on DPRK workers.

Third, during a talk with a DPRK official it was noted that "Self Reliance: Key to Independence", the Juche idea to develop independently relying on one's own strength, is

⁴ http://www.koreatimes.co.kr/www/news/nation/2012/07/120_115862.html

⁵ <http://mongoliaeconomy.blogspot.com/2012/07/north-koreas-ports-mongolias-gateway.html>

⁶ Batchimeg M (2006), "Mongolia's DPRK Policy", *Asian Survey* 46: 275-297

⁷ <http://www.nkeconwatch.com/category/economic-reform/special-administrative-regions/rajin-sonbong/page/2/>

not an idea only for the DPRK. Mongolia should seek a method to mobilize a consciousness of the people to develop independently and to have an independent economic policy and protect itself from economic globalization.⁸ In fact, the DPRK didn't become a member of COMECON in the former socialist system. However, the People's Republic of Mongolia became a member of COMECON in 1962. The two countries haven't joined in any regional economic integration to date, and in particular are not members of APEC. The "Voice of Russia" radio station mentioned in their news of 8 June 2012 whether it would be useful or of consequence to include our two countries in integration. This news also mentioned that although Mongolia had become a member of the World Trade Organization and the Asian Development Bank, it was unclear whether Mongolia would become a member of APEC. Russia will organize for the first time the 24th APEC summit meeting in Vladivostok in September 2012, and it would be possible to invite Mongolia and clarify its position. Making the DPRK closer to APEC would be one method to make it more open. Therefore, they discussed also inviting the DPRK to Vladivostok for the summit meeting. Consequently at this time, when it is unclear whether APEC will discuss new membership during the summit meeting, it would be better for Mongolia to explain its position on becoming a member of the organization and matters relating to involving the DPRK in Northeast Asian integration.

Fourth, the other countries in the region, such as the ROK and Japan, have been sensitive to Mongolia's relations with the DPRK. For example, the Japanese side once proposed that Mongolia, like Laos, should avoid being too

close to the DPRK. As an independent, democratic, and sovereign state, Mongolia has every right to cooperate with the DPRK in various fields, including the political sphere, economy and trade. Mongolia develops its relations with the DPRK by distinguishing between the political and economic spheres, but there is a lack of information on these matters. Therefore, Mongolia should take into consideration that the lack of explanation could lead to negative tendencies, such as distrust by other countries.

Fifth, analyzing the developments in the first half of 2012, it is clear that the DPRK leaders do not have any intention to let go of the "nuclear ace" they are holding in their hands. According to the constitutional amendment on 13 April 2012, the DPRK issued an announcement that it had become a "nuclear state." However, on 20 July 2012, the DPRK announced it was reconsidering whether it would abandon its nuclear program. It is likely that the process to restart the Six-Party Talks, which are the only way to find a peaceful resolution to the DPRK's nuclear program, will be delayed for the longer term. However, Mongolia should study the possibility of organizing a Northeast Asia Security Forum, a Northeast Asian Defense Ministers' Meeting or a Young Researchers' Meeting of the Northeast Asian Countries by exploring its advantage of having diplomatic relations with all the participating states of the Six-Party Talks. In particular, if we have the DPRK participating in these meetings it will increase both Mongolia's reputation and the importance of these meetings. Next September we are planning to exchange views on this issue with the DPRK's International Affairs Institute, with which our institute is cooperating.

⁸ An interview with the North Korean delegation, 2010, Ulaanbaatar

モンゴルと北朝鮮の経済関係

モンゴル戦略研究所国際安全保障研究センター長 N. ドルジスレン

(要約)

2011年に改訂されたモンゴル対外政策構想には、アジアにおけるモンゴルの立場を強化し、域内の政治的・経済的統合プロセスにおける建設的な参画を確実にすると述べられている。この目的の枠組みの中では、アジア太平洋地域、とりわけ北東アジアにさらに注目すべきである。モンゴルは、地域安全保障の強化と、集団的安全保障構造の発展という課題について、対話と交渉の過程における積極的な役割を担うべきである。地域統合への参画に伴う前提条件は、主に、この地域内の2国間関係を拡大・発展させることを通じて創出されるべきである。

この点から、本論文では次のことについて述べる。新しい指導者、金正恩を迎えた最近の北朝鮮の変化は、今後のモンゴルと北朝鮮の2国間関係にどのような影響を与えるか。モンゴルはどのような戦略的選択肢をとるのか。

これらを念頭に置きながら、パート2では、北朝鮮の新経済改革の最新状況と見通しについて短い考察を行う。2012年の初めに、ユーラシアグループは北朝鮮を2012年の危険な国の第5位に位置付け、2011年12月17日に死亡した金正日前指導者の権力後継過程における不安定さに着目している。多くの北朝鮮分析家は、29歳の金正恩は、国を先導するには若過ぎて経験不足であると述べている。しかし、北朝鮮の新指導者は、その立場と指導力を強化している。現在、彼は公式に朝鮮民主主義人民共和国元帥であり、朝鮮労働党の第一書記、党中央軍事委員会の委員長、国防委員会の第一委員長、朝鮮人民軍の最高司令官である。また、彼はいくつかの新しい経済改革を計画している。このように北朝鮮の変化は、金正恩の国内外政策の方向性を知るうえで非常に重要である。

パート3では、モンゴル-北朝鮮の経済関係のいくつかの特徴について述べている。

[英語原稿をERINAにて翻訳]

The Population and Economic Activity of Ulaanbaatar

Ch. Bayanchimeg

Head, Statistics Department of Ulaanbaatar

B. Batbayar

Chief, Division of Economic Statistics, Statistics Department of Ulaanbaatar

1. Population and Migration

The urbanization process in Mongolia has developed sharply since the second half of the last century and the percentage of persons living in urban areas among the total population is increasing. According to the census conducted in 2010, two of every three citizens in Mongolia live in urban areas. Around 44.0% of the total population of Mongolia lived in urban areas in 1969. However, this number increased to 67.9% in 2010. The urban population increase within the past decade alone was almost equal to the increase that occurred during the preceding 30 years. Most of the urban population lives in Ulaanbaatar city, the capital city of Mongolia, and the Central Region, where there is better infrastructure and services, and the development of mining sites is growing. For example, Darkhan-Uul, Dornogovi [East Gobi] and Omnogovi [South Gobi] aimags are connected with tarmacked roads and railways. In addition, those aimags bordering China are attracting more residents. Although the western area of Mongolia has a relatively large number of residents, the urbanization process there is not yet intensive. The development of industry, services and social sectors, such as education and healthcare, in Ulaanbaatar city and provincial centers are attracting the rural population. Therefore many persons are moving to urban areas so increasing the urban population share of Mongolia's total population.

The majority of Mongolia's urban population, or around 64.2%, lives in Ulaanbaatar city alone, followed by Erdenet and Darkhan cities. The migration of herders to urban settlements, especially to Ulaanbaatar, has increased from 2000 due to loss of their livelihoods as a result of natural disasters, such as "*gan* [drought]" and "*zud or dzud* [lack of forage caused by extreme winter weather]". In addition, stable and safe working opportunities in the city and urban areas attract population and this is expanding the urbanization process. Accordingly the urban population size increased substantially and the urban population increased to 1,798,100, or 67.9% of the total, in 2010, from 1,345,000, or 57% of the total, in 2000. In particular Ulaanbaatar city has witnessed a more massive population growth than the other cities, and its population has increased by 349,200 persons, or by 51.9%, between the two censuses in 2000 and 2010. Thus the urbanization process in Mongolia is mainly resulting in the population growth of Ulaanbaatar city. According to the census of 2010, the population size of Ulaanbaatar equaled 43.2% of the total population of the country. The population of Ulaanbaatar was 14.0% and 22.3% of the total in 1956 and 1969, respectively. Conversely, according to the Population and Housing Census of 2010, the population sizes of other

provinces as a percentage of the total have decreased. Therefore Mongolia's rural to urban migration is predominantly directed towards Ulaanbaatar city.

Mongolia's internal migration has intensified within the last two decades and two major migration flow patterns were clearly noticeable from the results of the 2000 Population and Housing Census. These are: (1) the flow to Ulaanbaatar city; and (2) the flow to the Central Region. Therefore, there is a tendency towards population concentration in Ulaanbaatar and the Central Region, while the remote areas are becoming uninhabited. There are no signs of a reversal of this tendency; on the contrary, it is likely to increase.

The average number of people migrating to Ulaanbaatar city ranges between 61,300 and 590,400 for various periods. The number of persons born in other cities and provinces and who moved to Ulaanbaatar exceeds the number of persons born in Ulaanbaatar city and who moved to other provinces and cities by 543,600. This means that Ulaanbaatar city's population has mechanically increased by this amount. According to the Population and Housing Census of 2010, about 544,813 persons or 47.2% of Ulaanbaatar's population, were born in the city and have lived in the city without moving to any other place. The remaining 52.8% or 609,477 persons were those who moved to Ulaanbaatar city, of which 19,078 persons or 3.1% of the total were born in Ulaanbaatar city and moved elsewhere for a while, and then moved back. According to the census, 130,372 persons, or 21.4% of the total, were people who moved to Ulaanbaatar city and have lived there for more than 20 years, while 98,087 persons, or 16.1% of the total, have lived there for 1-3 years (Figure 1).

As of 1 January 2012, there were 1,206,610 persons or 45.8% of Mongolia's total population living in Ulaanbaatar city, 571,192 of whom were male and 635,418 female (Table 1).

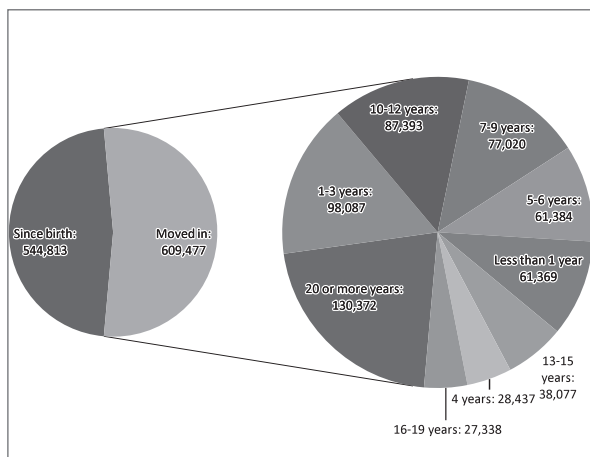
According to the census data, the annual average population growth was 9.5%, the highest rate, over the period 1956-1963; 3.0% for 1963-1969; 4.2% for 1969-1979; 3.1% for 1979-1989; 3.0% for 1989-2000; 3.8% for 2000-2008; and 4.2% for 2008-2012. The total population of Ulaanbaatar increased by 55,100 persons in 2011, whereas 44.8% of the total was a mechanical increase as migrants have officially moved from the rural areas to the city, and the other 50.1% of the total was a natural increase. The percentage share of the natural increase in population has tended to rise due to the growing birthrate over recent years, while the migration level from rural areas to Ulaanbaatar has been stable.

The net migration coefficient (i.e. mechanical growth per 1,000 persons) was 25 in 2000, which was three times

higher than the net natural growth coefficient (i.e. net natural increase per 1,000 persons). However, this situation had changed in 2011 as the net natural growth per 1,000 persons was higher than the mechanical growth.

During the period 2000-2011, a total of 380,000 persons moved to Ulaanbaatar city, while around 60,000 persons moved to rural areas from the city. There were 68,600 officially registered immigrants in Ulaanbaatar in 2004, when the "taxation waiver" was introduced. Most of them, or 27,200 persons, have resided in Ulaanbaatar city for a long time and were counted as urban citizens. In 2011,

Figure 1: Ulaanbaatar Resident Population Figures by Duration of Residence



Source: Population and Housing Census, 2010.

8,502 persons had officially moved to other provinces and places from Ulaanbaatar city. In addition, in 2011 the number of persons who moved to Ulaanbaatar city per 1,000 residents was 24, decreasing by 8 persons, while the number of persons who moved to rural areas was 7, decreasing by 3; mechanical growth accounted for 17 per 1,000 persons, declining by 5 compared to the 2008 data (Table 2).

In 2011, 28,593 persons officially migrated to Ulaanbaatar city and settled in various districts of the city. Bayanzurkh district received the biggest number of the immigrants, followed by Songinokhairkhan, where most of the residential ger districts are located. In terms of age groups, there were 5,761 persons, or 20.1% of the total, aged under 15; 16,388 persons, or 57.3% of the total, aged between 15 and 34; 3,204 persons, or 11.2% of the total, aged between 35 and 39; and 3,240 persons, or 11.3% of the total, aged 45 and over (Figure 2).

Ulaanbaatar city is a young city and in 2011, 64.2% of the city's total population was under 35 years old, while: 321,100, or 26.6%, were children up to 15 years old; 810,900, or 67.2% of the total, were those aged 16-59; and 74,600, or 6.2% of the total, were those aged over 60. According to the population pyramid, all age groups witnessed increases, thus indicating a high population growth between 2008 and 2011. In terms of the gender ratio of Ulaanbaatar city, the number of men per 100 women decreased to 89.9 persons in 2011, lower by 3 persons compared to 2008 (Figure 3).

This was mainly related to the fact that the number of

Table 1: Population Change of the Capital City of Ulaanbaatar, 2006-2011

| | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
|-----------------------------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| Population of Mongolia, '000s | 2,583.3 | 2,620.4 | 2,666.0 | 2,716.3 | 2,761.0 | 2,811.7 |
| Population of the capital, '000s | 1,053.5 | 1,098.8 | 1,147.7 | 1,196.8 | 1,244.4 | 1,287.1 |
| Residents in the capital, '000s | 987.2 | 1,025.2 | 1,067.5 | 1,106.7 | 1,161.8 | 1,206.6 |
| Percentage of total population, % | 40.8 | 41.9 | 43.0 | 44.1 | 45.1 | 45.8 |

Source: Statistics Department of Ulaanbaatar, 2012

Table 2: Ulaanbaatar Population Figures

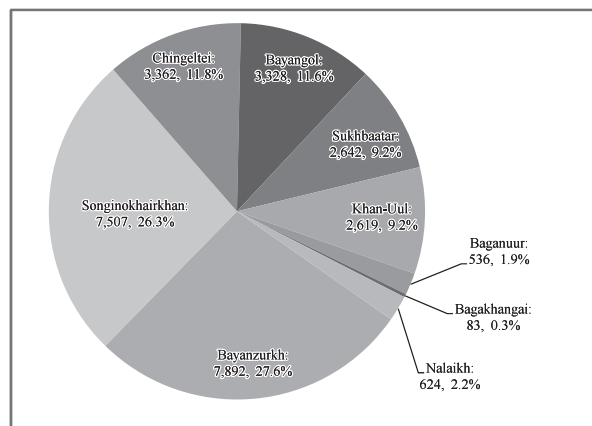
| Year | Population, at beginning of the year | Births | Deaths | Immigrants | Emigrants | Population, at end of the year |
|------|--------------------------------------|--------|--------|------------|-----------|--------------------------------|
| 2000 | 760,077 | 11,771 | 5,037 | 19,918 | 592 | 773,613 |
| 2001 | 773,613 | 12,339 | 5,069 | 11,608 | 782 | 790,878 |
| 2002 | 790,878 | 12,652 | 4,996 | 23,840 | 578 | 821,796 |
| 2003 | 821,796 | 13,571 | 5,522 | 40,760 | 693 | 869,912 |
| 2004 | 869,912 | 14,795 | 6,017 | 68,808 | 1,346 | 915,531 |
| 2005 | 915,531 | 15,465 | 5,972 | 30,207 | 2,821 | 952,410 |
| 2006 | 952,410 | 18,089 | 6,417 | 29,633 | 6,523 | 987,192 |
| 2007 | 987,192 | 22,721 | 6,417 | 29,112 | 7,434 | 1,025,174 |
| 2008 | 1,025,174 | 25,426 | 6,336 | 33,407 | 10,199 | 1,067,472 |
| 2009 | 1,067,472 | 27,943 | 6,310 | 28,337 | 10,723 | 1,106,719 |
| 2010 | 1,106,719 | 26,828 | 7,064 | 39,701 | 14,547 | 1,161,785 |
| 2011 | 1,161,785 | 30,226 | 7,768 | 28,593 | 8,502 | 1,206,610 |

Source: Statistics Department of Ulaanbaatar, 2012

Table 3: Migration Indicators for Ulaanbaatar

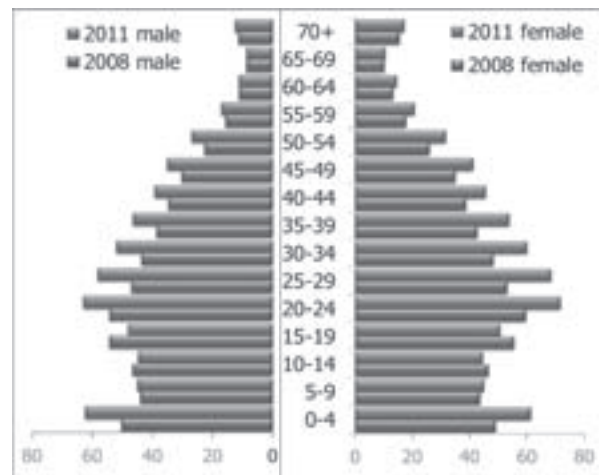
| Year | Immigrants | Emigrants | Mechanical growth | Immigration coefficient | Emigration coefficient | Net migration coefficient |
|------|------------|-----------|-------------------|-------------------------|------------------------|---------------------------|
| 1990 | 5,157 | 2,102 | 3,055 | 9.08 | 3.70 | 5.38 |
| 1991 | 6,526 | 4,317 | 2,209 | 11.31 | 7.48 | 3.83 |
| 1992 | 7,419 | 2,614 | 4,805 | 12.70 | 4.48 | 8.23 |
| 1993 | 8,881 | 2,767 | 6,114 | 14.96 | 4.66 | 10.30 |
| 1994 | 10,720 | 2,422 | 8,298 | 17.74 | 4.01 | 13.73 |
| 1995 | 10,280 | 2,563 | 7,717 | 16.73 | 4.17 | 12.56 |
| 1996 | 7,446 | 1,296 | 6,150 | 11.93 | 2.08 | 9.85 |
| 1997 | 8,493 | 1,171 | 7,322 | 13.28 | 1.83 | 11.45 |
| 1998 | 15,994 | 1,195 | 14,799 | 24.26 | 1.81 | 22.45 |
| 1999 | 15,199 | 822 | 14,377 | 21.27 | 1.15 | 20.12 |
| 2000 | 19,918 | 592 | 19,326 | 25.76 | 0.77 | 24.99 |
| 2001 | 11,608 | 782 | 10,826 | 14.52 | 0.98 | 13.54 |
| 2002 | 23,677 | 578 | 23,099 | 28.54 | 0.70 | 27.85 |
| 2003 | 40,760 | 693 | 40,067 | 46.85 | 0.80 | 46.06 |
| 2004 | 68,808 | 1,346 | 67,462 | 75.53 | 1.48 | 74.06 |
| 2005 | 30,207 | 2,821 | 27,386 | 31.72 | 2.96 | 28.75 |
| 2006 | 29,633 | 6,523 | 23,110 | 30.02 | 6.61 | 23.41 |
| 2007 | 29,112 | 7,434 | 21,678 | 28.93 | 7.39 | 21.54 |
| 2008 | 33,407 | 10,199 | 23,208 | 31.93 | 9.75 | 22.18 |
| 2009 | 28,337 | 10,723 | 17,614 | 26.06 | 9.86 | 16.20 |
| 2010 | 39,701 | 14,547 | 25,154 | 35.00 | 12.83 | 22.18 |
| 2011 | 28,593 | 8,502 | 20,091 | 24.15 | 7.18 | 16.97 |

Source: Statistics Department of Ulaanbaatar, 2012

Figure 2: Immigrant Residents by Ulaanbaatar District (Duureg), 2011

male deaths is higher than females and the majority of rural immigrants were also females. Although the sex ratio at birth was continuously dominated by males, it decreased with increasing age.

As of 2011, the population dependency ratio (the number of children under the age of 16 and those aged 60 or over divided by the population aged 16-59) was 48.8%, the same level as in the previous year. In particular, the child-dependency ratio was 40 and the elderly-dependency

Figure 3: Population Pyramid for Ulaanbaatar City (thousand persons)

ratio was 9. This means that per 100 working-age adults in Mongolia there were 49 dependent persons, of whom 40 were children and 9 were elderly. In Ulaanbaatar at the end of 2011, the population aged 60 or over amounted to 74,570: 32,501, or 43.6% of the total, were men; and 42,069, or 56.4% of the total, were women.

The average life expectancy at birth was 69.5 years in Ulaanbaatar in 2011, increasing by 1.2 from the previous

Table 4: Population of the Capital City by District (Duureg), 2006-2011

| District | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
|--------------------------|---------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| Baganuur | 25,731 | 25,969 | 25,877 | 25,875 | 26,905 | 27,036 |
| Bagakhangai | 3,827 | 3,864 | 3,742 | 3,615 | 3,647 | 3,727 |
| Bayangol | 160,818 | 165,159 | 169,278 | 174,851 | 185,104 | 192,111 |
| Bayanzurkh | 211,614 | 221,565 | 235,192 | 250,241 | 265,997 | 283,289 |
| Songinokhairkhan | 211,056 | 220,295 | 232,326 | 241,410 | 252,264 | 257,140 |
| Sukhbaatar | 123,041 | 129,486 | 133,108 | 135,103 | 136,917 | 137,834 |
| Nalaikh | 27,297 | 28,152 | 29,115 | 30,215 | 31,458 | 32,513 |
| Khan-Uul | 90,925 | 94,670 | 98,815 | 104,166 | 112,055 | 119,843 |
| Chingeltei | 132,883 | 136,014 | 140,019 | 139,765 | 147,438 | 153,117 |
| Residents in the capital | 987,192 | 1,025,174 | 1,067,472 | 1,106,719 | 1,161,785 | 1,206,610 |

Source: Statistics Department of Ulaanbaatar, 2012

year. In 2008, the average life expectancy at birth in Ulaanbaatar was higher than the national average by 0.2 years, but recently this difference has had an increasing tendency.

2. Household Status

As of 1 January 2012, 306,800 households, or 40.4% of all Mongolian households, were in Ulaanbaatar and the average number of household members was 3.9. The number of households increased by 12,400, or 4.2%, from the figures in 2010, and by 55,000, or 21.9%, compared to 2008.

The number of household members has been decreasing since 1990 and was relatively stable at 4.4 during the past years, but it decreased to 3.9 in 2011. 7,833 families, or 2.6% of the total, had 8 or more members, and 6,959 families had 4 or more members aged up to 16. In 2011 the number of single mother households decreased to 24,400: 1,189, or 4.6%, less than the previous year.

The ger districts in Ulaanbaatar city have been expanding due to the income level of the immigrant households from rural areas and new families, and also the lack of apartments connected up to infrastructure. Until recently, around 50% of all families lived in apartments connected up to infrastructure, but the numbers of households living in traditional gers have been on the rise since 2003. The share of households living in ger districts accounted for 58.6% of the total in 2005, and increased to 60.0% of the total in 2011. The number of households living in ger districts has been increasing by 6% annually and reached 184,200 at the beginning of 2012. Among them, about 81,600 households live in Mongolian traditional gers and the remaining 100,300 families live in single-household houses.

At the same time, the number of households living in residential apartments has been increasing by about 5,000 annually and reached 122,600 in 2012. 38.8% of the households live in 21-to-40-square-meter apartments, while 47.8% of the total live in apartments with more than 40 square meters. In the period 2000-2011, 53,000 residential apartment units became available and 32 apartment blocks with 2,212 residential units became available during the

first quarter of 2012.

The power supply of Ulaanbaatar city is by centralized and non-centralized energy systems, but 3,307 households in the city still do not have access to electricity. However, the residential heating and sanitation systems are far from being adequate. 55.0% of households lived in apartments with a central-heating system in 2011, 5.4% lower than in the previous census. However, the percentage of households that have individual heating stoves in their houses increased by 6.6%, and these are the biggest source of air pollution in Ulaanbaatar. Therefore, the Mongolian government needs to develop policies and programs to tackle this issue.

The average household income for Ulaanbaatar city amounted to MNT 697,554 in 2011, 31.8% higher than the previous year. The household income gap between the households in Ulaanbaatar city and those in other regions increased to MNT 124,000 in 2011, almost double the MNT 61,700 in 2008.

As of 2011, total household income consisted of salaries (63.4%), pensions (18.1%), income from household businesses (9.4%), and other income (9.1%). The monthly average salary of a working person in Ulaanbaatar city was MNT 428,609, which was 31.5% higher than the previous year, and 1.7 times higher than the figure in 2008. The average monthly pension by receiver was MNT 154,300 at the end of 2011, while the number of pensioners has increased by 3.4% from a year earlier (Table 5).

In 2011, monthly average household expenditure amounted to MNT 651,373, which was 25.3% higher than a year earlier, and increased by 1.4 times compared to 2008. While 64.1% of total household expenses were non-food expenses in 2008, this increased to 64.8% in 2011. Non-food expenses, such as purchase of clothes and other commodities, expenses for transportation and communications, and those for buying apartments have been on the rise annually (Table 6).

The minimum subsistence level of a person, or the cash amount needed to purchase essential food and non-food products (the poverty line), in Mongolia has been revised 22 times since 1991. This amount has been MNT 118,100 in Ulaanbaatar, since it became effective on 1 April 2011.

According to a sample survey conducted in 1998,

Table 5: Monthly Average Household Income (at current prices, MNT)

| Income type | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
|---|---------|---------|---------|---------|---------|
| Monthly average household income of Ulaanbaatar | 290,755 | 425,327 | 487,093 | 529,302 | 697,554 |
| 1. Monetary income, total | 284,981 | 416,015 | 475,803 | 514,069 | 676,392 |
| - Wages and salaries | 171,299 | 255,089 | 292,858 | 325,901 | 428,609 |
| - Pensions and allowances | 41,606 | 68,761 | 74,915 | 70,061 | 122,679 |
| - Income from household businesses | 49,411 | 53,068 | 66,051 | 62,059 | 63,841 |
| - Other | 22,665 | 39,097 | 41,979 | 56,048 | 61,264 |
| 2. Received from others free of charge | 5,276 | 8,962 | 11,187 | 13,895 | 19,724 |
| 3. Foodstuff, which consumed from private farm or enterprise | 498 | 350 | 103 | 1,338 | 1,437 |
| National average income per household | 263,681 | 363,594 | 402,525 | 448,027 | 573,541 |
| Difference between the national and Ulaanbaatar incomes per household | 27,074 | 61,733 | 84,568 | 81,275 | 124,013 |

Source: National Statistical Office of Mongolia, 2011

Table 6: Monthly Average Household Expenditure (at current prices, MNT)

| Expenditure type | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
|---|---------|---------|---------|---------|---------|
| Monthly average expenditure per household of Ulaanbaatar | 323,921 | 464,134 | 499,212 | 534,882 | 672,535 |
| 1. Monetary expenditure | 318,147 | 454,822 | 487,922 | 519,649 | 651,373 |
| Food expenses | 111,224 | 163,214 | 161,815 | 179,747 | 229,153 |
| Non-food expenses and services | 206,923 | 291,608 | 326,107 | 339,902 | 422,220 |
| 2. Received from other free of charge | 5,276 | 8,962 | 11,187 | 13,895 | 19,724 |
| 3. Foodstuff, which consumed from private farm or enterprise | 498 | 350 | 103 | 1,338 | 1,437 |
| National average expenditure per household | 292,488 | 367,466 | 437,602 | 450,206 | 577,406 |
| Difference between the national and Ulaanbaatar average expenditures per HH | 31,433 | 96,668 | 61,610 | 84,676 | 95,129 |

Source: National Statistical Office of Mongolia, 2011

34.1% of the total population of Ulaanbaatar had a consumption level lower than the poverty line by 13.0%. The Household Social and Economic Survey conducted in 2011 revealed that 23.5% of the city population had a consumption level below the poverty line by 5.9%. The poverty headcount ratio in Ulaanbaatar city was between 3.7% and 15.4% lower than the other regions and 6.3% lower than the national average. The poverty gap was also reduced in Ulaanbaatar in 2011.

3. Employment

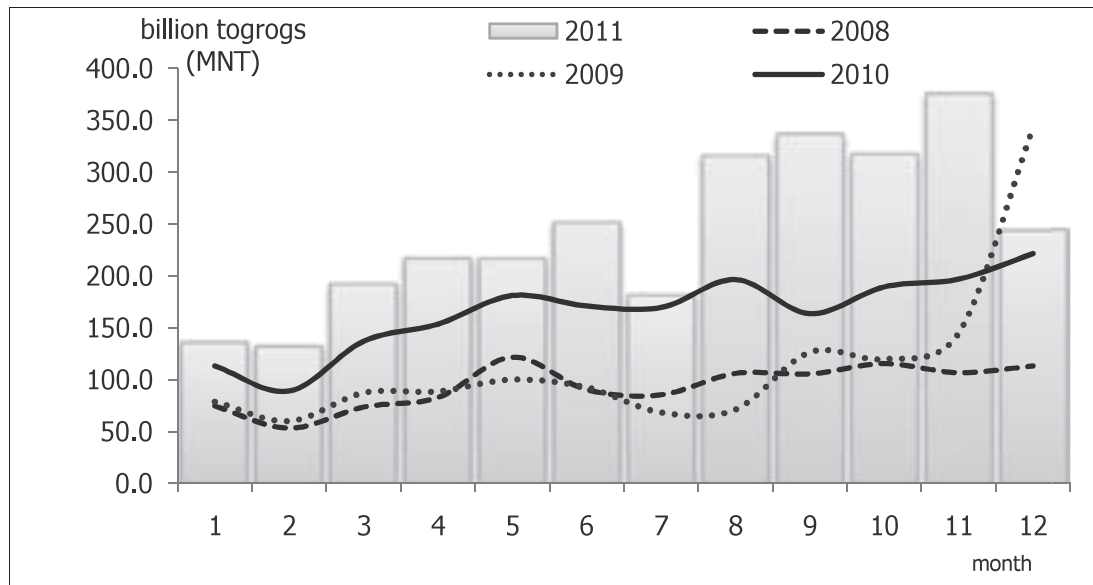
Mongolia has been conducting the Labor Force Survey on a quarterly basis since 2006, in accordance with the Law on Statistics of Mongolia. According to this survey, 34.0% of the country's 1,124,700 economically-active persons, and 34.8% of the persons in employment, lived in Ulaanbaatar city in 2011. The work force participation level, the ratio of the economically-active persons to the working-age population, was 53.9%. The unemployment rate decreased to 5.6%, which was lower by 3.1 percentage points from a year earlier. At the same time, the national unemployment

rate was 7.7%. The high concentration of population in Ulaanbaatar city is creating opportunities for expanding business activities in the city.

70.0% of all companies officially registered in Mongolia are in Ulaanbaatar city, while 64.2% of active companies are running their operations in Ulaanbaatar city. There are 47,195 registered companies in Ulaanbaatar city, and 30,866 companies were active in 2011. Most of the companies are small and medium-sized companies with less than 50 employees; those with more than 50 employees account for 3.3% of the total, but they employ 55.8% of the total labor force.

Value-added in Ulaanbaatar city accounted for 64.6% of the national GDP in 2011. The service sector accounted for 68.8% of the total, while the industry and construction sectors accounted for 30.7% and the agriculture sector for 0.4%.

Mongolia's per capita GDP was MNT 3.8 million in 2011, an increase of MNT 813,500 on the 2010 figure. Value added per person in Ulaanbaatar city was MNT 5.5 million in 2011, an increase of MNT 1.2 million on the previous year.

Figure 4: Sales of Industrial Products, 2008-2011

In 2011, MNT 3,874.6 billion was invested into the economy of Ulaanbaatar city. This was 2.2 times higher than a year earlier. The majority of public investments are carried out in Ulaanbaatar city due to its concentration of infrastructure, market capacity and professional work force. 49.5% of total investment was foreign investment, whereas the amount of domestic investment has increased almost 4 times.

There are 926 foreign invested companies which newly registered in Ulaanbaatar in 2011, 22.9% higher than a year earlier. 81.8% of these companies were engaged in geology, mining, exploration and the oil sector, 12.5% in trade and catering, and the remaining 5.7% in the financial sector.

The gross industrial output of Ulaanbaatar amounted to MNT 2,433.1 billion, and sales amounted to MNT 2,924.3 billion in 2011, increases of 27.1% and 33.7%, respectively, from 2010 (Figure 4). 56.7% of the total production of Ulaanbaatar city is related to the mining sector.

The manufacturing output of Ulaanbaatar city accounted for 42.2% of Mongolia's total manufacturing output, and 75.4% of the total construction and maintenance work, amounting to MNT 745.0 billion, was made in Ulaanbaatar city in 2011.

Mongolia's total amount of retail and wholesale trade equaled MNT 6,793.6 billion in 2011, 75.1% of which was accounted for by Ulaanbaatar city. 72.1% of the total trade was wholesale trade. Operating in 2011 were: 3,512 shops, 90 wholesale stores, 22 markets and 619 fast-service centers.

In addition, 80.4% of the total passengers and 12.0% of the total freight for Mongolia were accounted for by

Ulaanbaatar city.

4. Conclusion

Ulaanbaatar city is Mongolia's political, economic, social and cultural center. Around 45% of the total population resides in the city, and 65% of all companies are operating in Ulaanbaatar. Therefore the role of Ulaanbaatar city in Mongolia's economy is enormous.

The economic conditions of the city have been improving, mainly supported by the retail and wholesale trades, services and consumers. The construction and service sectors are becoming the major labor market for immigrant workers from the rural areas. The population density of Ulaanbaatar city has been continuously increasing and overpopulation is becoming a major burden to the city's environment and infrastructure.

However, along with policies towards reducing overpopulation in the city, the high concentration of population could also be one of the key drivers of the city's further development. In particular, it is necessary to create environmental, population and economic concentrations, and reduce the pressure on the environment from consumption and production. Promotion of environmentally-friendly technologies, products and services should be intensified.

References

- National Statistical Office of Mongolia (2011), National Report for the 2010 Population and Housing Census of Mongolia
- National Statistical Office (2012), Mongolian Statistical Yearbook 2011

ウランバートルの人口と経済活動

ウランバートル統計局長 Ch. バヤンチメグ
ウランバートル統計局経済統計部長 B. バタバヤル

(要約)

モンゴルでは、19世紀の後半から都市化の過程が急速に進み、全人口のうち都市部に住む人の割合が増えている。モンゴルの人口の大半、約64.2%がウランバートル市に居住している。ウランバートルの人口密度は増加し続け「大都市」化している。その人口規模は、その他の地方都市の数倍にもなる。

ウランバートル市はモンゴルの政治、経済、社会、文化の中心である。そのため、経済、社会、政治、文化的問題に対し、市民自らが選択する機会がより多い。国内の経済活動人口の約34%が、ウランバートルに居住している。

ウランバートルの経済状況は、小売・卸売業、サービス、消費者に支えられ大幅に改善されている。小売・卸売業及び建設部門は、ウランバートル市の経済を刺激するだけでなく、モンゴル経済へも大きな貢献を果たしている。建設及びサービス部門は、農村部からの移民労働者の主な労働市場となっている。2000年、農村部からウランバートルへの移民の働き口は、主に製造、ホテル・レストラン部門であったのが、2010年には、家事サービス、農業へと変わった。このことは、ウランバートルの高所得者に提供される高級サービスが拡大し、農村部からの移民がウランバートルの奥地に住み、家畜の世話と農業活動を営んでいることを示す。

ウランバートルの経済規模は年間6兆トゥグルグで、予算はその内の約4%である。しかし、全住民に労働市場を生み出すほど十分ではない。そのため、農村部からの移民の多くは、結局、仕事も収入もない状態に陥る。仕事の機会はあるものの、多くは職場で必要とされる教育と能力を持ち合わせていない。

さらに、ウランバートル市の生活条件改善のチャンスを阻むいくつかの要因がある。とりわけ、人口過密による土壌・水・空気の汚染、ゴミの増加、社会的・公的サービスに対する重圧があげられる。

しかし、市の人口過密緩和に向けた政策と同様に、人口の集中は、今後の発展推進の重要な要素ともなり得る。特に、環境的、人口、経済的な集中に専念し、消費・生産による環境への負担を削減することが必要である。環境に優しい技術、製品、サービスの推進を強化すべきである。

[英語原稿をERINAにて翻訳]

The Issues and Challenges for the Mongolian Mortgage Market

Ts. Enkhbayar

CEO, Mongolian Mortgage Corporation LLC

Mongolia is a landlocked country bordering the Russian Federation to the north and the People's Republic of China to the south. Its population is 2.7 million, with approximately 40% of its population living in the capital city, Ulaanbaatar, and 59% of the people living in ger districts. In Ulaanbaatar 30% of the people live in apartments, and 70% of the people live in ger districts where there is no proper infrastructure. According to the latest census in 2010 there were 713,780 households living in Mongolia.

The urban areas in Mongolia present two very different and distinct patterns of residential development which are highly correlated with poverty. The first involves planned areas based on Soviet-style planning practices and featuring multi-family housing surrounded by vaguely defined open spaces. The second involves ger districts characterized by long strips of large, unserviced plots with wide dirty roads on at least two sides. Mongolia's poor population is concentrated in these ger districts. More than 36% of the total population of Mongolia lives below the national poverty line, and almost 80% of the poor live in ger districts in Ulaanbaatar and in aimag (province) centers.

A ger is the traditional circular felt tent of Mongolian nomads. Informal urban settlements, characterized by a variety of shelter types, predominantly ger tents, are referred to as ger housing areas.

Until early 1990 the government used to provide free housing to the citizens. In mid-1997, the government and the ADB began development of a sound legal and policy framework for the housing sector in Mongolia. In 1999 the government approved the Housing Law, National Housing Strategy (NHS), Housing Privatization Law, and the Condominium Law. Under the NHS, housing policies are more demand-driven, with standards and regulations. The approved NHS was designed to: (1) transfer the financial burden of housing to the private sector; (2) improve the quality of existing stock; (3) establish a land registration

Photograph 1: Ger District in Ulaanbaatar City



Photograph 2: Mongolian Ger



and valuation system; and (4) assist vulnerable groups.

In 2000 the Asian Development Bank conducted a housing demand and supply study in Mongolia, which was the driving force to start housing finance through commercial banks in Mongolia. The ADB implemented a Housing Finance Sector Project (HFSP) starting in May 2003. Prior to the ADB project activities, some banks had already begun to issue limited mortgage lending in 2001. However, the process was kicked off with the on-lending activities of the ADB Housing Finance Sector Project. Five banks participated in that program: Anod, Golomt, Mongol Post, Savings and Zoos banks. The ADB Housing Finance Project funds were fully disbursed in 2005 and principal repayments are used as a revolver to refinance additional loans. As of 21 December 2007 over 2,400 loans totaling MNT 28.2 billion had been disbursed under this project. In 2007, the property price value had doubled. The banks, in particular, have seen problems with their lending to real estate developments and construction that built hundreds of upmarket apartments that are now partially completed but still unsold. On the other hand price increases made it harder for individuals to afford the housing loans.

The steady increase in mortgage lending in the banking sector continued until 2008. Most banks stopped

Table 1: Total Households Living in Urban and Rural Areas

| Total Household Number 713,780 | | | |
|--|-----------------|--------------------|--------------|
| Total | Ger | Houses, Apartments | Other |
| | 322,836 (45.2%) | 382,808 (53.6%) | 8,132 (1.1%) |
| <i>Total Urban Households: 479,503 (67%)</i> | | | |
| Urban | 156,744 (32.7%) | 316,116 (65.9%) | 6,643 (1.4%) |
| <i>Total Rural Households: 234,277 (33%)</i> | | | |
| Rural | 234,277 (70.9%) | 66,692 (28.5%) | 1,493 (0.6%) |

Source: National Statistical Office of Mongolia

issuing mortgage loans in 2008. Some of the largest banks reached their limits. The reasons of the decreased housing loans were: (1) banks reached their limits in housing and construction loans; (2) the lack of additional funding for banks; (3) banks' total housing and construction loan growth had been high in recent years; and (4) the pay-back period was long (5-10 years). Although banks have slowed down on housing loans, the demand for housing loans is still high. As a result, the banks increased deposit rates to get additional resources. On the other hand, there are the increasing prices of construction materials, and the lowered opportunities for the low-income population to pay for newly constructed apartments. Construction sector growth had also slowed due to the inability of people to pay for housing. Moreover, the decline in construction lending left many construction projects unfinished. The banks and the government took a series of steps to input funds into the construction sector. The Bank of Mongolia (BoM) took steps to lend resources to commercial banks in order to issue loans for unfinished construction. There was an improvement in the housing and construction loan trends from the first half of 2008. The situation improved further, when the banks received additional funding from domestic and foreign markets (Table 2).

Although mortgage lending was relatively low until mid-2010, a rapid recovery started taking place at the end of 2010, accounting for MNT 333 billion in mortgage loans lent to 19,700 borrowers. This figure doubled in 2011 with MNT 656 billion in mortgage loans-lending to about 24,000 borrowers. There are 11 commercial banks that run mortgage lending activities in Mongolia. The share of the mortgage market as a percentage of GDP increased to 6% in 2011 from 1.11% in 2005 (Table 3, Figure 1).

Although mortgage lending has significantly increased recently, demand for housing is also increasing. Mongolia's young generation, between 25-35 years old, is increasingly becoming financially able to afford investing in residential properties and is keen to move away from their current multigenerational housing units into more contemporary and spacious housing. The boom in the mining supply chain and the service industry are leading to a stronger-than-ever demand level in the housing sector. On the other hand, housing supply has intensively expanded allowing the creditworthy population segment to receive mortgage loans.

Many low income people are still lacking access to finance for purchasing houses. Most of them could not even afford the upfront payment requirements. In addition to that, the continuously increasing price of imported construction materials, mainly from China, results in a rise in cost of the apartments. Many Mongolians who seek higher paid jobs and greater possibilities have relocated from other parts of the country to Ulaanbaatar. Most of these households are low income families and live in the sprawling ger districts of the northern districts that spread across the surrounding hills of Ulaanbaatar. Due to the lack of infrastructure for proper housing, the people who live in ger districts heat their houses and gers using coal or lignite burnt in iron stoves. The smog caused by coal burning in ger districts has made Ulaanbaatar the second most polluted city in the world during the winter season. Tackling these environmental and social problems caused by the ger

Table 2: Core Market Indicators in Mongolia's Mortgage Market

| Market Indicators | 2009 | 2010 | 2011 |
|---|--------------|--------------|--------------|
| Debt Outstanding, MNT million | 226,040.64 | 333,776.60 | 656,491.07 |
| Mortgage market percentage of Systemic Loan market, % | 8.59% | 10.72% | 11.64% |
| Total Systemic Debt Outstanding, MNT Million | 2,632,031.13 | 3,112,495.28 | 5,641,233.70 |
| Total Debt Outstanding Changes, % | 3.70% | 47.66% | 96.69% |
| Total Debt Outstanding Per Borrower, MNT Million | 13.47 | 16.94 | 24.78 |
| Number of Total Borrowers | 16,784 | 19,700 | 26,491 |
| Market I.R. (Annual, %) | 17.73% | 15.75% | 14.80% |
| Original W.A. LTV % | 78.95% | 77.30% | 56.28% |

Note: W.A. LTV = Weighted average loan to value ratio

Source: Bank of Mongolia and National Statistical Office of Mongolia

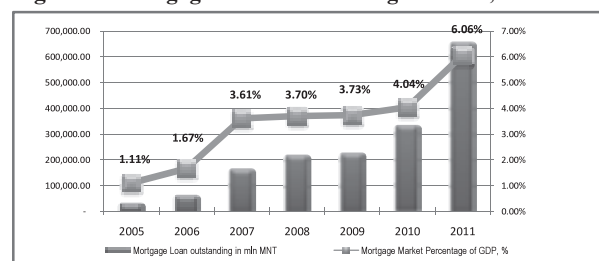
Table 3: Mongolia's Mortgage Market Indicators

| | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
|--|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|
| GDP, nominal, MNT Billion | 2,779.6 | 3,715.0 | 4,557.5 | 5,895.5 | 6,055.8 | 8,255.8 | 10,829.7 |
| Systemic Loan Outstanding, MNT Billion | 1,334.1 | 2,230.5 | 2,056.1 | 2,635.6 | 2,632.0 | 3,112.5 | 5,641.2 |
| W.A.I.R. of Mortgage loan, % | 14.73 | 17.83 | 15.96 | 18.71 | 17.73 | 15.75 | 14.8 |
| Numbers of total borrowers | 4,774 | 8,984 | 16,444 | 16,522 | 16,784 | 19,700 | 26,491 |
| Mortgage Loan outstanding, MNT billion | 30.8 | 61.9 | 164.6 | 218.0 | 226.0 | 333.8 | 656.5 |
| Mortgage Market Percentage of GDP, % | 1.11 | 1.67 | 3.61 | 3.70 | 3.73 | 4.04 | 6.06 |

Note: W.A.I.R. = weighted average interest rate

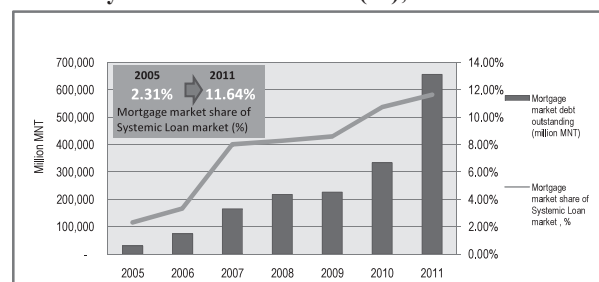
Source: Bank of Mongolia and National Statistical Office of Mongolia.

Figure 1: Mortgage Market Percentage of GDP, 2005-2011



Source: Bank of Mongolia and National Statistical Office of Mongolia

Figure 2: Mortgage Market as a Percentage of the Systematic Loan Market (%); 2005-2011



Source: Bank of Mongolia and National Statistical Office of Mongolia

districts has been a prolonged priority for the government.

In order to increase the affordability and supply of proper housing, the Mongolian government has initiated several acts. One of these activities was the government's approval of the 40,000 Housing Program on 27 June 2005 to increase the total national supply and finance for housing. In order to implement the government's policy and programs for provision of housing, as well as to undertake mortgage lending and investment, the Ministry of Road, Transportation, Construction and Urban Development (MRTCUD), the former Ministry of Construction and Urban Development (MCUD), jointly with the Ministry of Finance (MoF) and the Mayor of Ulaanbaatar City established the Housing Finance Corporation in November 2006.

The five major strategic objectives of this program are: (1) to establish new townships for housing units; (2) to improve the density of housing units in Ulaanbaatar and other urban centers and settlements; (3) to develop the ger districts; (4) to facilitate development of housing and real estate market relations; and (5) to support the construction material production industry and the capacity building of human resources. Later, this program was extended to a 100,000 housing program. This program is expected to have a major impact on the substantial percentage of ger districts. But the project will also require a substantial amount of supporting infrastructure, including roads, bridges, and water and canalization projects.

Also, the government resolution No. 15 of 10 February 2011 approved the establishment of the Development Bank of Mongolia (DBM) to provide long term financing for the infrastructure and industrial projects stipulated in the governmental programs, such as the New Development Medium-Term Target Program, and the State Policy on Railroad Transportation. The DBM will also fund the government housing programs by issuing government bonds.

Given the growing demand for housing, it is important to create a favorable legal regulatory environment that allows the creation of new funding resources for housing loans by issuing securities backed by the mortgage loan receivables that allow more liquidity to the commercial banks. This will make possible the refinancing of new mortgage loans and provide new sources for banks for new housing loans.

The Mongolian government resolution No. 116 dated 14 May 2003 approved the developing of a mortgage-backed securities market in Mongolia. It enabled the creation of a self-financing policy without government funding. Consequently, on 14 July 2009, the government approved the "Mortgage Law" followed by the Asset Backed Security (ABS) Law approved on 23 April 2011, which has legally enabled primary and secondary market developments.

The development of the secondary mortgage market through the establishment of the "Mongolian Mortgage Corporation" (MIK) has emerged with the initiative of the USAID-EPRC project. In 2006 the Bank of Mongolia (BoM) and 10 commercial banks established a private-sector controlled secondary-tier mortgage institution. The MIK's main goal is to develop primary and secondary

markets by issuing and selling mortgage-backed securities on domestic and foreign capital markets and to create and ensure a smooth functioning of a long-term financing system to improve access to housing and promote modern urban development in the future.

Creation of the first commercially operated, private-sector controlled secondary mortgage market institution enabled the broadening and deepening of the financial market. A well-functioning secondary market will need supportive legal and regulatory frameworks, sizable and standardized primary mortgage markets, and well-developed bond markets.

The MIK has become the liquidity provider to the financial institutions, which had access to long-term funds primarily through international financial institutions and donor programs. Over the past 5 years, the MIK has actively worked with both the government and regulating agencies to set up a legal regulatory framework for the secondary market in Mongolia. One of the prerequisites for secondary mortgage market institutions is to buy standardized mortgage loans. At the time of the MIK's establishment, commercial banks had their own standard procedures for issuing mortgage loans. One of the main objectives of the MIK was to standardize all the loans issued in the market. Therefore the MIK, together with representatives of commercial banks, developed a Mortgage Standardization Procedure that was approved by the BoM on 17 October 2008 and will be applied by all the commercial banks in their mortgage lending activities. The MIK has also taken a major role on drafting the approved Mortgage and ABS laws.

The MIK engages in cooperation with many internationally recognized financial institutions. Over the past few years, the MIK implemented several important projects with International Finance Corporation (IFC), the United Nations Economic and Social Commission for Asia and the Pacific (UNESCAP), the Asia Pacific Union for Housing Finance (APUHF), the German Development Bank (KfW) and the Housing Finance Network, initiated by the Wharton Business School.

More specifically, in 2009 the MIK together with IFC and Shorebank International implemented a project to adapt the Mortgage Lending Toolkit in Mongolia. The objective of this project was to standardize mortgage lending activities by introducing an internationally accepted toolkit. Under this project, the MIK has translated the toolkit adapted for Mongolian market standards, published it, and distributed it to all commercial banks, including other financial institutions undertaking mortgage lending activities. Within the framework of this project, the MIK also organized workshops for the commercial banks in June 2009 and June 2010 to introduce the toolkit in detail.

Upon the successful completion of the above project, the IFC has requested being able to implement the second "Housing Micro Finance" (HMF) project in Mongolia. During the implementation of the HMF project, the MIK has carried out comprehensive market assessments in two cities, Darkhan and Ulaanbaatar. The market assessment conducted during the HMF project has not only concentrated on the demand-side of the market but also on the supply-side of the market.

The MIK has successfully completed these projects by preparing valuable recommendations to the IFC to develop the HMF market in Mongolia.

With the approval of the government of Mongolia, the MIK has become the project implementing body to support promotional activities in the housing finance sector. Under this project the German Development Bank (KfW) granted long-term loans to the MIK starting in November 2009.

The APUHF is a union and platform that acts as an experience sharing network among the South Asian countries. As the MIK represents Mongolia in the union, the MIK on its own initiative has successfully organized the union's first regional form in Ulaanbaatar in June 2011 bringing together officials from the South Asian countries. Starting from January 2012, the MIK has been actively engaging in the union's activities and has become one of its advisory board members. Meanwhile, the MIK is also a member of the International Union for Housing Finance (IUHF). Also, the MIK is an advisory board member of the "Asia Pacific Housing Journal" published by the Government Housing Bank of Thailand.

Under the core activity of the company for providing liquidity to the commercial banks by selling mortgage-backed securities to the capital market, the MIK has purchased a total of MNT 21 billion of mortgage portfolios from 9 different banks. The standards of the MIK's loan

purchase criteria enabled the MIK to purchase the best performing loans from the banking sector. In December 2009 the MIK has issued MNT 6.3 billion of covered bonds to commercial banks and insurance companies with the longest maturity up to 5 years. The MIK bonds qualify for a Repo financing instrument by the BoM. On 21 March 2012 the Financial Regulatory Commission of Mongolia (FRC) approved the MIK as a housing finance company and issued a "Special Permission" to engage in securitization activities in the capital market.

The MIK will continue to work towards extending the mortgage market in Mongolia by building a well-functioning secondary mortgage market and creating an environment for local institutional investors to boost the local capital market, as well as to issue mortgage-backed bonds and securities to the international capital markets. Ultimately, by raising funds from the capital market, the MIK will contribute to increased long-term, low-interest and affordable housing loans to Mongolian citizens.

The stable and growing Mongolian economy will encourage the growth of the housing finance system through lower inflation, lower interest rates, and lower systemic risk. However, a proper housing finance infrastructure based on policy that integrates public and private cooperation will ensure sustainable Mongolian mortgage market development.

モンゴルにおける抵当市場の諸課題

モンゴル抵当会社最高経営責任者 Ts. エンフバヤル

(要約)

モンゴルは、北をロシアと、南を中国と接する陸に囲まれている。人口270万人の60%がゲルを、残りがアパートを住居としている。ゲルとは、伝統的なモンゴル遊牧民の円形フェルトテントである。ゲルテントを中心とする様々なシェルター型の特徴を持つ日常の都市部の集落は、ゲル住居地区と呼ばれる。

モンゴルの住宅資金制度は、2003～2007年にアジア開発銀行の「住宅部門事業」が開催されると同時に始まった。この事業は、抵当貸付活動の開始のみならず、銀行の抵当貸付基準導入のための一役を担った。これ以降、住宅資金制度は継続して進められている。2011年末の市場における抵当貸付残高総額は、6,560億トゥグルグに上った。

農村部から都市部、主に首都ウランバートルへの人口移動が増え、住宅需要が増加している。2007年の居住用財産費用の増加は住宅の値ごろ感にマイナスとなり、貯蓄のない人々には、抵当貸付の前払い支払金の支払いがいっそう困難になった。政府は、国民に手頃な価格の住宅を提供するために、住宅問題に対応した10万戸の住宅計画を発表した。

また、政府は抵当法及び資産担保証券法を制定した。住宅需要の増加を考慮すると、商業銀行にもっと流動性を与える抵当貸付金に保証された証券の発行を通じた、新規の資金源を生み出せる好ましい法的規制環境の創出が重要である。このような目的で、モンゴル銀行と、その他商業銀行10行が協力して、2006年にモンゴル抵当会社を立ち上げた。モンゴル抵当会社は、住宅の入手状況の改善と、近代的な都市開発を推進するため、機能性の高い抵当流通市場の構築と、長期融資制度の順調な機能の確保に向けて取り組んでいる。

[英語原稿をERINAにて翻訳]

韓国の対中国東北三省の貿易推移と構造的変化 — 韓中国交樹立20周年を機に —

韓国対外経済政策研究院 (KIEP) 中国地域研究グループ研究員 林珉環

1. はじめに

2012年8月24日は、韓中国交樹立20周年を迎える記念すべき日であった。歴史的にみて、両国は同じ文化圏にあり、中国の政治・経済・思想などは、朝鮮半島の歴史に莫大な影響を与えてきた。とりわけ、中国東北地域と朝鮮半島が接する国境線（おおよそ1,318km）は、両国の関係において特別な意味を持つ。同地域は朝鮮半島の領土戦争の舞台であり、中世と近世における対中国の朝貢貿易のルートであり、日本の植民地時代における朝鮮半島の海外独立運動の根拠地であった。理念の対立が極まった朝鮮戦争の際にも、中国遼寧省丹東（当時の名称は安東）は中国人民解放軍が北朝鮮軍を支援するための兵站前線としての役割を果たした。このように、中国東北地域と朝鮮半島は歴史的に深い関わりを持っている。

本稿では、韓中国交樹立20周年を機に、韓国の対中国貿易における東北三省の貿易推移及び構造的変化を分析する。なお、利用可能なデータとして韓国貿易協会編「中国貿易統計」を用いて、推移期間を1998年から2011年までの14年間とした。本稿の焦点は韓中国交樹立以降の韓国の対東北三省貿易の構造的変化を分析することにある。

2. 韓国の対東北三省の貿易推移

2.1. 東北三省の概況

東北三省は中国の東北部に位置する遼寧省、吉林省、黒龍江省の3省を指す。東北三省は北朝鮮、ロシアと国境を接し、モンゴルと近接することから、政治的にも重要な地域である。東北三省の総面積は約79万km²で、中国全体の約8.2%を占めており、総人口は約1億954万人で、中国全体の約8%を占める。2003年に「東北振興戦略」が実施されて以来、東北三省の経済成長率は毎年10%以上の高成長を続けてきた。

2.2. 韓国の対東北三省の貿易推移と現状

1998年以来、世界金融危機が勃発した2009年を除いて、韓国の対東北三省の貿易規模は成長を続けてきた。図2に示すように、韓国の対東北三省の貿易額は1998年の約22億ドルから2011年の約100億ドルまでに増加した。しかし、貿易収支をみると、当初の1998年からほぼ赤字になってい

図1 東北三省の位置



(出所) KIEP中国地域研究グループ作成

表1 東北三省の主要経済指標 (2011年)

| 項目 | 遼寧省 | 吉林省 | 黒龍江省 | 東北三省 |
|------------------------|--------|--------|--------|--------|
| 面積 (万km ²) | 14.8 | 18.7 | 45.4 | 78.9 |
| 人口 (万人) | 4,375 | 2,746 | 3,833 | 10,954 |
| GRPまたはGDP(10億元) | 2,225 | 1,531 | 1,250 | 5,006 |
| 一人当たりGRPまたはGDP (元) | 50,299 | 38,321 | 32,540 | 45,700 |
| 消費財売上高(10億元) | 800 | 412 | 471 | 1,683 |
| 都市住民一人当たり可処分所得 (元) | 20,467 | 17,797 | 15,696 | - |
| 農村住民一人当たり純収入(元)* | 6,908 | 6,237 | 6,210 | - |
| 固定資産投資額(10億元) | 1,773 | 744 | 752 | 3,269 |
| 輸出入総額(億ドル) | 960 | 220 | 385 | 1,565 |
| 輸出額 (億ドル) | 510 | 50 | 177 | 737 |
| 輸入額 (億ドル) | 460 | 170 | 208 | 838 |
| FDI(実行ベース、億ドル) | 243 | 15 | 35 | 293 |

(注1) *は2010年の数値を表す。

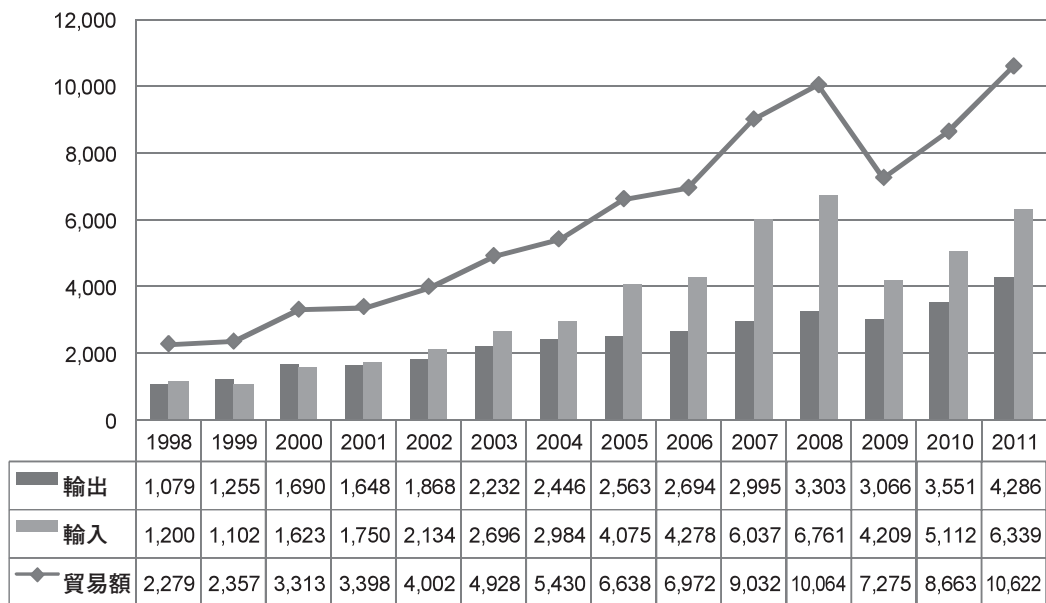
(注2) 東北三省の一人当たりGRPは、各3省のGRPの合計を東北三省の総人口数で割ったもの。

(出所) CEIC、「2011年遼寧省国民経済・社会発展統計公報」、「2011年吉林省国民経済・社会発展統計公報」、「2011年黒龍江省国民経済・社会発展統計公報」より作成

る。韓国と東北三省間の貿易規模が増加するにつれて、貿易収支の格差はさらに拡大してきた。その格差は2008年をピークに減少傾向にあったものの、再び増加に転じ、輸入が輸出を上回っている。すなわち、韓国にとっての東北三省は、輸入市場としての意味合いが大きい。以下では、韓

図2 韓国の対東北三省の貿易規模の変化（1998～2011年）

単位：100万ドル



(出所) 韓国貿易協会

表2 韓国の対東北三省の輸出・輸入の推移（1998～2011年）

単位：100万ドル

| 年度 | 東北三省 | | | 遼寧省 | | | 吉林省 | | | 黒龍江省 | | |
|------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| | 輸出 | 輸入 | 輸出入 | 輸出 | 輸入 | 輸出入 | 輸出 | 輸入 | 輸出入 | 輸出 | 輸入 | 輸出入 |
| 1998 | 1,079 | 1,199 | 2,278 | 875 | 599 | 1,474 | 63 | 248 | 311 | 141 | 352 | 493 |
| 1999 | 1,255 | 1,102 | 2,357 | 1,026 | 748 | 1,774 | 84 | 224 | 308 | 145 | 130 | 275 |
| 2000 | 1,690 | 1,624 | 3,314 | 1,496 | 1,032 | 2,528 | 79 | 388 | 467 | 115 | 204 | 319 |
| 2001 | 1,648 | 1,749 | 3,397 | 1,395 | 1,084 | 2,479 | 105 | 441 | 546 | 148 | 224 | 372 |
| 2002 | 1,868 | 2,133 | 4,001 | 1,628 | 1,292 | 2,920 | 98 | 611 | 709 | 142 | 230 | 372 |
| 2003 | 2,232 | 2,695 | 4,927 | 1,909 | 1,612 | 3,521 | 136 | 758 | 894 | 187 | 325 | 512 |
| 2004 | 2,446 | 2,983 | 5,429 | 2,065 | 2,364 | 4,429 | 153 | 374 | 527 | 228 | 245 | 473 |
| 2005 | 2,563 | 4,073 | 6,636 | 2,165 | 3,067 | 5,232 | 169 | 634 | 803 | 229 | 372 | 601 |
| 2006 | 2,694 | 4,278 | 6,972 | 2,336 | 3,371 | 5,707 | 168 | 518 | 686 | 190 | 389 | 579 |
| 2007 | 2,995 | 6,036 | 9,031 | 2,674 | 4,791 | 7,465 | 207 | 709 | 916 | 114 | 536 | 650 |
| 2008 | 3,303 | 6,761 | 10,064 | 2,982 | 5,710 | 8,692 | 189 | 598 | 787 | 132 | 453 | 585 |
| 2009 | 3,066 | 4,209 | 7,275 | 2,752 | 3,380 | 6,132 | 187 | 427 | 614 | 127 | 402 | 529 |
| 2010 | 3,551 | 5,112 | 8,663 | 3,223 | 4,129 | 7,352 | 223 | 485 | 708 | 105 | 498 | 603 |
| 2011 | 4,286 | 6,339 | 10,625 | 3,948 | 5,093 | 9,041 | 266 | 524 | 790 | 72 | 722 | 794 |

(出所) 韓国貿易協会

国の対東北三省の貿易収支構造を分析する。

(1) 貿易収支

表2に示すように、韓国の対東北三省の貿易を牽引しているのは遼寧省である。韓国の対東北三省の貿易に占める遼寧省の割合は、1998年に既に65%を、2011年には85%を占めた。しかし、貿易収支からみると、遼寧省はほかの2省とは違う傾向にある。すなわち、1998年から2003年まで

の貿易収支は黒字であったが、2004年から赤字に転じている。これは、一部の輸入品目が急増したことに起因する。代表的なものに、酪農品、小麦粉、糖類、鉍・スラグ、肥料、火薬類・マッチ、編物、ニッケルなどがある¹。一方、韓国の対吉林省、対黒龍江省の貿易のいずれもが、2000年から赤字であった。

表3は2011年における対東北三省の主要輸出国及び輸出額を示している。対東北三省貿易における韓国の輸出の順位は、

¹ 1998～2011年における韓国の対遼寧省輸入品目について分析した結果である。

表3 対東北三省の主要輸出国及び輸出額（2011年）

単位：100万ドル

| 順位 | 東北三省 | 遼寧省 | 吉林省 | 黒龍江省 |
|------|---------------------|---------------------|------------------|------------------|
| 第1位 | ロシア (14,729) | サウジアラビア (7,873) | ドイツ (7,408) | ロシア (13,322) |
| 第2位 | ドイツ (12,351) | 日本 (6,656) | 日本 (2,789) | ドイツ (365) |
| 第3位 | 日本 (9,776) | ドイツ (4,578) | スロバキア (1,537) | アメリカ (363) |
| 第4位 | サウジアラビア (7,873) | オーストラリア (4,486) | ハンガリー (961) | 日本 (331) |
| 第5位 | オーストラリア (5,131) | アメリカ (4,246) | ブラジル (472) | オーストラリア (258) |
| 第6位 | アメリカ (5,014) | 韓国 (3,948) | ベルギー (420) | フランス (165) |
| 第7位 | ブラジル (4,379) | ブラジル (3,907) | アメリカ (405) | カナダ (123) |
| 第8位 | 韓国 (4,286) | アラブ首長国連邦 (2,991) | オーストラリア (387) | イタリア (82) |
| 第9位 | アラブ首長国連邦 (2,991) | イラン (2,891) | イタリア (285) | マレーシア (81) |
| 第10位 | イラン (2,891) | ベネズエラ (1,620) | チェコ (283) | 韓国 (72) |

(注) 2011年における韓国の対吉林省輸出は全体の第12位を占める。

(出所) 韓国貿易協会

表4 韓国の対中輸出に占める東北三省のシェア（1998～2011年）

| 年 | 1998 | 1999 | 2000 | 2001 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
|-------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 韓国の対中輸出に占める東北三省のシェア (%) | 7.2 | 7.3 | 7.3 | 7.0 | 6.5 | 5.2 | 3.9 | 3.3 | 3.0 | 2.9 | 2.9 | 3.0 | 2.6 | 2.7 |

(出所) 韓国貿易協会

その割合の低下につれて下落している。2011年の対東北三省の主要輸出国の上位3位はロシア、ドイツ、日本で、韓国は8位である。とりわけ、韓国の対遼寧省の輸出における順位は、ほかの国よりも顕著に下がっている。1998年から2009年までは2～3位を維持していたが、2011年には6位にとどまっている。これはサウジアラビアが対遼寧省の石油輸出国として浮上したことが原因で、その他の国の順位も相対的に後退している。

日本は第1位だったのが第2位に順位を下げているが、韓国は第2～3位から第6位に順位を落としている。韓国と日本は90年代後半から遼寧省への輸出を巡って激しい競争を繰り広げてきたが、現在はその構図に変化が見られる。すなわち、2008年の世界金融危機以降、対遼寧省の貿易相手国として日本よりもサウジアラビア、オーストラリア、ブラジル、アメリカの順位が上がっており、このような傾向はしばらく続くと考えられる。これは、対中国貿易国が東北三省を潜在力のある地域として捉えていることを意味し、今後の成長が期待できる証である。しかし、韓国において輸出市場としての

東北三省の魅力は喪失しつつある。実際に、韓国の対中国全体の輸出に占める対東北三省の輸出の割合は、1998年の約7.2%から下落し続け、2011年には約2.7%となった（表4）。

(2) 貿易品目

1998年から2011年までの14年間における韓国の対東北三省の貿易品目の変化は次のとおりである。まず輸出品目の場合、韓国の対東北三省の輸出品目上位10位と対中国全体の輸出品目上位10位はほぼ類似している。対中国全体の輸出に占める割合からみると、中国国内においても東北三省に特化された輸出品目がみられる。代表的なものに、機械類、プラスチック・製品、鉄鋼などがある。機械類の輸出の割合は比較的高い水準にあるが、これは東北三省の旧工業基地改革の実施過程において、機械類の輸出が増加し、暖房などのボイラーの輸出が好調を見せているからだと思われる²。

韓国の対東北三省の機械類輸出額は、1998年の約1.5億ドルから2011年の約4.2億ドル（平均14.8%増）となった。

² KIEP中国省別動向報告「韓中国交樹立20周年の回顧と展望：東北三省」（2012. 8）

これは韓国の対東北三省輸出の年平均増加率（同期比10.8%）を上回る数値である。東北三省に占める鉄鋼の輸出の割合も高いが、これは東北三省の自動車製造業が発達したことが原因である。韓国が東北三省に輸出する鉄鋼は高級鋼材で、主に自動車用鋼板を製造するのに使われる。韓国の対東北三省の鉄鋼輸出の割合が最も大きい地域は吉林省で、同省は中国自動車製造業の重要基地である。

一方、韓国の対東北三省の輸出品目第1位は電気・電子であるが、韓国の対中国全体の輸出品目に占める同品目の割合に対して低い水準にある。電気・電子業種の韓国企業は、中国広東省に集中的に進出しており、韓国の対広東省の輸出は対中国全体の輸出のおよそ30%以上を占めている。このように、韓国の対東北三省と対広東省との比較を通じて、電気・電子業種の韓国企業の対東北三省の投資規模がほかの地域に比べてやや低いことがわかる。

次に、輸入品目の場合、韓国の対東北三省の輸入品目上位と対中国全体の輸入品目上位は異なっている。以下ではその特徴をまとめる。

第一に、韓国が中国から輸入する品目の中で、穀物、魚介類、木材・木炭などの農・水産品及び資源が東北三省に特化されている点である。穀物は1998年以来、韓国の対吉林省輸入品目上位を占めてきた。韓国の対東北三省の輸入品目のほとんどが少ない金額で、一貫性がなく、一時的なものである中で、穀物の安定した輸入が期待される。魚介類は主に遼寧省と吉林省から輸入するが、1998年以来輸入量が増加している。とりわけ、遼寧省での魚介類輸入の割合（4.5%）が韓国の対中国魚介類輸入の割合（1.1%）を大きく上回っていることから、韓国の対中国水産物輸入において東北三省は非常に重要な地域であることがわかる。これは、今後の韓・中FTA推進において、東北三省が韓国の農・水産品と競争的関係にある可能性を示唆する。

第二に、衣類と鉄鋼製品の輸入は相対的に高い割合を占めている。まず、衣類については、遼寧省に進出した韓国系衣類企業による逆輸入（buy-back）が影響したものと考えられる。遼寧省には加工貿易に携わる韓国系衣類企業が数多く進出している。この中には韓中国交樹立以前から既に投資を決めた企業もあり、ほとんどが安い人件費を求めて進出している。非編物製衣類輸入額は1998年以後増加を続け、対遼寧省輸入品目の中で1～2位を占めている。

近年、中国の人件費上昇などによって外資系企業の投資環境が悪化するにつれて、韓国系加工企業の現地撤収が切迫しているのではないかという見方もある。しかし、韓国の対東北三省の加工貿易の代表的業種である衣類製品の逆輸入が未だに増加を続けていることから、中国での生産費用が増加しても、これらの業態が短期間内に現地から撤収する事態が起こるとは考えにくい。

また、韓国の対東北三省の輸入品目の中で鉄鋼製品の割合が比較的高くなっている。これは韓国が遼寧省から鋼材を大量に輸入しているからである。1998～2011年、韓国の対中国輸入に占める鋼材の割合は13.7%で、同期における韓国の対遼寧省輸入に占める鋼材の割合は19.2%である。すなわち、韓国の対中国鉄鋼輸入において、遼寧省は非常に重要な地域であることが分かる。2011年、韓国が遼寧省から輸入した鋼材は約136万トンで、韓国は遼寧省の最も重要な鋼材輸出国であった³。韓国の対遼寧省輸入品目の中で鉄鋼は2004年から現在に至るまでずっと1位を占めている。韓・中鋼材貿易において、韓国が中国に高級鋼材を輸出し、中国から中・低級鋼材を輸入するという構造が一般的であったが、遼寧省が戦略的新興産業の一環として、高級鋼材生産及び輸出を奨励したことに伴い、安い中国産高級鋼材が韓国へ大量に輸入される現象が起きた⁴。これにより、韓国国内鋼材の市場価格が攪乱されることが憂慮され、このような中国産低価格製品に対抗しようとする韓国鉄鋼生産企業間の価格競争は未だに続いている⁵。

（3）省別にみた貿易品目の特徴

第一に、韓国の対遼寧省の輸出入品目はHSコードの広い分野に関わっており、1998年から輸出入品目の上位は一貫して変わらなかった。ここ2年、対遼寧省の輸出品目の上位に、穀物、肥料、光学・医療機器などの品目が浮上した。一方、輸入品目においては武器の輸入が急増したという特徴がある。

第二に、韓国の対吉林省の輸出入品目は遼寧省に比べて金額が少なく、一貫性がなく、多くが一時的な品目である。その中で輸出品目の上位を占めているのは、プラスチック、鉄鋼、ボイラー・機械類などである。一方、対吉林省の輸入品目においては、1998年から現在に至るまでずっと上位を占めた品目は見当たらない。

³ 2011年における遼寧省の鋼材輸出に占める韓国の割合は約21.6%で、最も高かった。

⁴ 遼寧省は『鉄鋼産業12・5規画』に高級鋼材の質的革新を目標として提示している。売上高対R&D投資の割合を2010年の1.1%から2015年の1.5%に上昇させ、国内外の需要に適した高級鋼材を生産するのが主な内容である。

⁵ 『Digital Times』（2012.8.27）、「中国産の鋼材輸入が最も多く、全体に占める割合は48.9%…低価格攻勢に国内業者が苦戦」（http://www.dt.co.kr/contents.html?article_no=2012082702010832748002）。

表5 韓国の対東北三省の輸出入品目上位10位

輸出

単位：%

| 順位 | 中国全体 | | 東北三省 | | 遼寧省 | | 吉林省 | | 黒龍江省 | |
|------|-------------------------|------|-------------------------|------|-------------------------|------|-------------------------|------|-------------------------|------|
| | 輸出品目 | % | 輸出品目 | % | 輸出品目 | % | 輸出品目 | % | 輸出品目 | % |
| 第1位 | 電気・電子 (85) | 25.7 | 電気・電子 (85) | 17.8 | 電気・電子 (85) | 18.7 | 鉄鋼 (72) | 16.1 | ボイラー・ 機械類 (84) | 31.4 |
| 第2位 | 光学・医療・ 精密機器 (90) | 10.5 | ボイラー・ 機械類 (84) | 17.5 | ボイラー・ 機械類 (84) | 16.9 | 電気・電子 (85) | 14.6 | 有機化学品 (29) | 26.2 |
| 第3位 | ボイラー・ 機械類 (84) | 10.3 | プラスチック・ 製品 (39) | 8.3 | プラスチック・ 製品 (39) | 8.4 | ボイラー・ 機械類 (84) | 12.7 | 鉄鋼 (72) | 9.8 |
| 第4位 | プラスチック・ 製品 (39) | 4.8 | 鉄鋼 (72) | 7.6 | 鉄鋼 (72) | 6.9 | プラスチック・ 製品 (39) | 12.0 | 電気・電子 (85) | 8.3 |
| 第5位 | 有機化学品 (29) | 3.3 | 鉱物性燃料・ エネルギー (27) | 6.1 | 鉱物性燃料・ エネルギー (27) | 6.7 | 光学・医療・ 精密機器 (90) | 5.4 | プラスチック・ 製品 (39) | 3.3 |
| 第6位 | 鉱物性燃料・ エネルギー (27) | 3.1 | 光学・医療・ 精密機器 (90) | 5.7 | 光学・医療・ 精密機器 (90) | 6.0 | 化学工業生産品 (38) | 5.2 | ゴム・製品 (40) | 2.4 |
| 第7位 | 鉄鋼 (72) | 3.0 | 有機化学品 (29) | 5.3 | 有機化学品 (29) | 4.0 | 有機化学品 (29) | 4.0 | 一般車両 (87) | 2.1 |
| 第8位 | 一般車両 (87) | 2.8 | 人造フィラメ ント繊維 (54) | 3.0 | 人造フィラメ ント繊維 (54) | 3.3 | 人造ステー ブル繊維 (55) | 3.9 | 鉱物性燃料・ エネルギー (27) | 2.1 |
| 第9位 | 銅・製品 (74) | 2.8 | 鉄鋼製品 (73) | 2.4 | 鉄鋼製品 (73) | 2.5 | 銅・製品 (74) | 3.3 | 紙及び板紙 (48) | 1.7 |
| 第10位 | 人造フィラメ ント繊維 (54) | 2.0 | 人造ステー ブル繊維 (55) | 2.4 | 一般車両 (87) | 2.4 | 鉱物性燃料・ エネルギー (27) | 1.9 | 鉄鋼製品 (73) | 1.5 |

輸入

| 順位 | 中国全体 | | 東北三省 | | 遼寧省 | | 吉林省 | | 黒龍江省 | |
|------|-------------------------|------|-------------------------|------|-------------------------|------|------------------------|------|-------------------------|------|
| | 輸入品目 | % | 輸入品目 | % | 輸入品目 | % | 輸入品目 | % | 輸入品目 | % |
| 第1位 | 電気・電子 (85) | 32.8 | 鉄鋼 (72) | 16.0 | 鉄鋼 (72) | 19.2 | 穀物 (10) | 38.9 | 穀物 (10) | 29.4 |
| 第2位 | 鉄鋼 (72) | 13.7 | 非編物製衣類 (62) | 10.2 | 非編物製衣類 (62) | 12.9 | 電気・電子 (85) | 7.1 | ボイラー・ 機械類 (84) | 14.9 |
| 第3位 | ボイラー・ 機械類 (84) | 10.2 | 穀物 (10) | 9.9 | 鉱物性燃料・ エネルギー (27) | 9.7 | 鉄鋼 (72) | 6.0 | 採油用の種・ 高麗人参 (12) | 6.3 |
| 第4位 | 鉱物性燃料・ エネルギー (27) | 8.1 | 電気・電子 (85) | 8.2 | 電気・電子 (85) | 9 | 採油用の種・ 高麗人参 (12) | 5.4 | 鉱物性燃料・ エネルギー (27) | 5.7 |
| 第5位 | 非編物製衣類 (62) | 7.9 | 鉱物性燃料・ エネルギー (27) | 8 | ボイラー・ 機械類 (84) | 6.8 | 魚介類 (03) | 4.2 | 鉄鋼 (72) | 5.2 |
| 第6位 | 光学・医療・ 精密機器 (90) | 6.5 | ボイラー・ 機械類 (84) | 6.9 | 魚介類 (03) | 4.5 | 木材・木炭 (44) | 4.1 | 木材・木炭 (44) | 4.6 |
| 第7位 | 鉄鋼製品 (73) | 4.4 | 魚介類 (03) | 4 | 有機化学品 (29) | 3.8 | 野菜 (07) | 3.8 | 編物製衣類 (61) | 4.2 |
| 第8位 | 編物製衣類 (61) | 2.3 | 有機化学品 (29) | 3.4 | 編物製衣類 (61) | 3.1 | 人造ステー ブル繊維 (55) | 3 | 無機化学品 (28) | 3.4 |
| 第9位 | 有機化学品 (29) | 1.8 | 編物製衣類 (61) | 3.1 | 船舶 (89) | 2.6 | 調製飼料 (23) | 2.8 | 調製飼料 (23) | 2.9 |
| 第10位 | 魚介類 (03) | 1.1 | 木材・木炭 (44) | 2.1 | 鉄鋼製品 (73) | 2.3 | 人造フィラメ ント繊維 (54) | 2.5 | 電気・電子 (85) | 2.9 |

(注1) 品目ごとの累計金額を基準とする。

(注2) %値は、該当地域の輸出総額及び輸入総額に占める該当品目の割合を表す。

(出所) 韓国貿易協会

第三に、韓国の対黒龍江省の輸出品目の中で1998年からずっと上位を占めていたのは、ボイラー・機械類のみである。韓国の対黒龍江省の輸入品目においては、一回のみの取引品目が相対的に多く、1998年から輸入上位品目を占めたものは、穀物だけであった。ここ2年の輸入品目上位として浮上しているフィルム・写真用材料、コルク・わらも、これまでの傾向からみて、一回のみの取引に終わる可能性が大きい。

2.3. 韓国と東北三省の貿易における構造的変化

1998年からの韓国と東北三省の貿易推移をみると、両者間貿易に構造的な変化が生じていることがわかる。

まず、東北三省は韓国の対中国輸出市場としての競争力を失いかけている。とりわけ、韓国の対東北三省貿易の主要マーケットである遼寧省で、このような現象が顕著に現れた。国交樹立初期の遼寧省は、韓国の対中国主要輸出市場であったが、現在は対中主要輸入市場に変わってきた。

このような構造的な変化に対応して、韓国が再び遼寧省を輸出市場とする可能性を大きく二つ取り上げる。すなわち、対遼寧省の投資拡大と貿易品目の多様化である。

第一に、投資拡大は重要である。韓国の対中国輸出の傾向をみると、投資が輸出を牽引してきている。既存の韓国企業が東北三省への進出を行う際には、労働集約型産業や重化学工業に限定されてきたが、これからはサービス業や新産業に対する投資を拡大する必要がある。例えば、バイオ、新エネルギー、親環境産業及び金融、物流、観光などのサービス産業への投資拡大が、関連品目の輸出増大の効果をもたらすことができる。

第二に、輸出品目を多様化しなければならない。現在、遼寧省を輸出市場とする主要競争国と韓国の対遼寧省の輸出品目はほぼ同じである。これは韓国が遼寧省で比較優位を得にくい状況にあることを意味する。とりわけ、ドイツ、日本は対遼寧省の主要輸出国であり、韓国の輸出品目と類似している。そのため、韓国は電気・電子、ボイラー・機

表6 韓国の対東北三省の業種別投資額の推移

単位：100万ドル、%

| 年度 | 中国全体 | | | | 東北三省 | | | |
|-----------|--------|------|-------|------|-------|------|-------|------|
| | 製造業 | | サービス業 | | 製造業 | | サービス業 | |
| | 金額 | % | 金額 | % | 金額 | % | 金額 | % |
| 1992 | 118 | 83.2 | 22 | 15.7 | 30 | 99.6 | 0 | 0.0 |
| 1993 | 250 | 86.0 | 36 | 12.3 | 79 | 91.1 | 5 | 5.8 |
| 1994 | 582 | 87.0 | 65 | 9.7 | 93 | 80.1 | 13 | 11.1 |
| 1995 | 708 | 77.3 | 176 | 19.2 | 102 | 64.2 | 52 | 33.1 |
| 1996 | 738 | 71.8 | 225 | 21.9 | 119 | 63.3 | 19 | 10.3 |
| 1997 | 518 | 64.1 | 243 | 30.0 | 82 | 76.1 | 24 | 22.5 |
| 1992～1997 | 2,914 | 75.6 | 766 | 19.9 | 504 | 73.4 | 114 | 16.6 |
| 1998 | 599 | 87.6 | 65 | 9.4 | 34 | 65.6 | 11 | 20.7 |
| 1999 | 296 | 84.5 | 37 | 10.6 | 42 | 72.1 | 9 | 14.9 |
| 2000 | 580 | 74.2 | 184 | 23.5 | 57 | 67.5 | 19 | 22.7 |
| 1998～2000 | 1,475 | 81.2 | 285 | 15.7 | 132 | 68.4 | 38 | 19.8 |
| 2001 | 605 | 92.2 | 48 | 7.3 | 54 | 81.1 | 12 | 17.7 |
| 2002 | 977 | 87.8 | 100 | 9.0 | 49 | 55.9 | 20 | 22.8 |
| 2003 | 1,589 | 85.2 | 256 | 13.7 | 97 | 74.2 | 22 | 16.6 |
| 2004 | 2,172 | 90.4 | 181 | 7.5 | 194 | 75.1 | 39 | 15.1 |
| 2005 | 2,295 | 80.3 | 471 | 16.5 | 156 | 65.7 | 59 | 25.0 |
| 2006 | 2,909 | 84.3 | 409 | 11.9 | 152 | 65.5 | 52 | 22.7 |
| 2007 | 3,807 | 69.2 | 1,493 | 27.1 | 342 | 57.2 | 234 | 39.2 |
| 2008 | 2,326 | 60.7 | 1,221 | 31.9 | 309 | 53.8 | 196 | 34.2 |
| 2001～2008 | 16,680 | 76.9 | 4,180 | 19.3 | 1,352 | 61.9 | 635 | 29.1 |
| 2009 | 1,697 | 78.2 | 396 | 18.3 | 140 | 49.8 | 106 | 38.0 |
| 2010 | 2,740 | 75.7 | 833 | 23.0 | 129 | 20.8 | 471 | 76.1 |
| 2011 | 2,768 | 77.4 | 742 | 20.8 | 242 | 40.4 | 355 | 59.4 |
| 2009～2011 | 7,206 | 76.9 | 1,971 | 21.0 | 510 | 34.0 | 933 | 62.3 |
| 1992～2011 | 28,274 | 77.0 | 7,202 | 19.6 | 2,498 | 54.8 | 1,720 | 37.7 |

(注) 1997年のアジア金融危機、2001年の中国のWTO加入、2008年の世界金融危機を境に全期間を4期間に分けている。

(出所) 輸出入銀行、海外投資統計DBより整理

械類の品目を巡って、ドイツ、日本と競争的關係に置かれている。韓国が輸出品目を多様化しない限り、これらの国々との競争力が低下している局面を打破することは困難であろう。

韓国と東北三省間貿易の構造的変化から予測できることは、今後の韓国の対東北三省の輸出品目に占めるサービス業及び内需市場をターゲットにした割合が増えていくという点である。これは韓国の対東北三省の投資業種が製造業からサービス業へと転換しているからである。

韓国の対東北三省の投資に占める製造業の割合は2008年まで50%以上を占めていたが、その後急落し、2009年以後は34%までに減少した。一方、2009～2011年の3年間における韓国の対東北三省の投資に占めるサービス業の割合は約62%まで急上昇した。このように、韓国の対東北三省の投資業種が既存の製造業からサービス業へと転換しているのは、韓国企業が東北三省を輸出加工基地ではなく、内需市場として捉えているからである⁶。投資業種が変化していることは、今後の対東北三省貿易品目の多様化が期待できる理由の一つであり、韓国と東北三省の経済協力を推進するにあたって、十分に潜在力があることを示している。

3. おわりに

本稿では、韓中国交樹立後の韓国の対東北三省の貿易推移及び構造的変化を概観した。1998年から韓国の対東北三省の貿易規模は拡大してきたものの、貿易収支は赤字を呈していた。また、韓国の対中国輸出市場としての東北三省の地位も低下してきた。韓国の対東北三省貿易における輸出の割合が減少するにつれて、対東北三省の輸出市場での韓国の地位も揺れている。

国交樹立当初、韓国と日本は東北三省の主要貿易相手国であったが、現在は西欧諸国も東北三省を潜在力のある貿易相手として捉え、積極的に進出を図っている。とりわけ、ドイツや日本の動きが活発である中、韓国がこれらの国よりも先に比較優位を獲得するには、対東北三省の投資拡大と輸出品目の多様化が必要である。

国交樹立以来、韓国の対東北三省の貿易品目は大きく変わってきた。対中国の貿易品目と比較した結果、東北三省に特化された品目がみられ、主要輸出品目には機械類と鉄鋼、主要輸入品目には穀物、衣類などが含まれる。

韓国の対東北三省の貿易品目の推移を省別にみると、地域ごとに異なる特徴がある。国交樹立から現在に至るまで、対遼寧省の輸出入品目に一貫性があるのに対して、対吉林

省、対黒龍江省の貿易品目は一貫性がなく、ほとんどが少ない金額で、一時的なものであった。これは韓国の対東北三省の貿易が遼寧省に大きく依存していることを示唆している。以上から、大きく二つの構造的変化が考えられる。

一つ目は、東北三省が韓国の対中国輸出市場としての競争力を失いかけている点である。この問題を解決するには、投資拡大と貿易品目の多様化を考える必要がある。東北三省の中でも遼寧省は最大貿易相手であり、遼寧省において韓国と日本は完全なる競争的關係にある。そのため、輸出品目を多様化することが韓国にとって不可欠である。

二つ目は、韓国の対東北三省の輸出構造が高度化されている点である。国交樹立当初と比較した場合、中間材の輸出の割合が減少し、資本財と最終消費財の輸出の割合が大きく増加した。これは韓国企業の東北内需市場への進出が可能であり、韓国と東北三省との経済協力の可能性があることを示している。以下では、韓国の対東北三省貿易を更に活性化するための対策をまとめておく。

第一に、韓国の対東北三省の貿易品目の中で、地域別に特化された品目の活用を極大化しなければならない。これは、韓国と東北三省の貿易を増大させることにつながる。例えば、穀物輸入において東北三省は韓国の対中国貿易の主要貿易相手である。このように、特化された輸入品目を活用し、韓国と東北三省が協力するための新たなきっかけを見い出さなければならない。具体的には、穀物冷凍輸送チェーンのような事業分野が成長する可能性も大きい。

第二に、東北三省を輸入市場として積極的に活用することである。すなわち、農・水産品、木材などの対中国資源輸入先として、東北三省の潜在力を認識する必要がある。この場合、これまでに韓国が重視しなかった吉林省や黒龍江省との協力を深めることができる。穀物と木材・木炭、野菜、採油用の種、高麗人参のいずれもが吉林省と黒龍江省に特化されている品目で、これらの品目は韓国の対中国貿易品目に占める割合も高い。したがって、韓国が東北三省との協力を拡大するための重要な役割が期待できる。

第三に、韓国の対吉林省と対黒龍江省の貿易拡大を長期的に模索する必要がある。その実現可能性は、吉林省と黒龍江省の物流環境改善に関わっている。韓国の対東北三省貿易が遼寧省に偏っていた理由の一つが、港への接近性である。韓国企業にとって、東北地域への進出は輸出加工貿易が主で、輸出するための物流条件は非常に重要である。一方、吉林省と黒龍江省には海に出る港がないため、両省との貿易關係が疎遠になっていた。しかし、東北三省の消

⁶ KIEP中国省別動向報告「韓中国交樹立20周年の回顧と展望：東北三省」（2012. 8）

費市場が拡大し、内需市場への進出が可能となった場合、韓国の対吉林省と対黒龍江省の貿易関係も異なる局面を迎えられるだろう。一般的に、東北三省は中国国内の他地域よりも住民の消費性向が高いことが知られている。遼寧省の瀋陽、大連のみならず、吉林省の長春、黒龍江省のハルビンなど、東北三省の拠点都市を中心に消費市場が形成されており、内需市場への進出を準備しなければならない。

最後に、東北三省を考える視点として、多様なフレームが必要である。韓国の政策当局は、東北三省を北朝鮮との経済協力を推進するための手段として扱う傾向が強い。もちろん、東北三省の地政学的意義は、単純な経済学的意味を越えている。東北三省は北東アジア主要国が集まる中心にあり、韓国、日本、ロシア、北朝鮮などに囲まれている

地政学的に重要な地域である。したがって、政策立案者らが東北三省を考える際に、政治的フレームを維持することは非常に重要である。しかし、政治・外交的重大さに劣らず、東北三省が経済的に急成長を遂げていることも事実である。この点では、東北三省が架け橋としての役割を果たせる環境、すなわち、韓国がロシア、モンゴルなど北東アジア諸国との経済協力を推進するための環境が整っていることを意味する。近年、韓国の大企業が東北三省への進出を積極的に検討しているが、これは東北三省経済の発展の可能性が大きいからである。東北三省は自主的に既存の潜在力を直視し、韓中国交樹立20周年を機に、韓国との新たな貿易関係を構築していくべきである。

[韓国語原稿をERINAにて翻訳]

The Trends in Trade Relations and the Structural Changes between the ROK and China's Northeast

LIM, Minkyung

Researcher, China Regional and Provincial Research Group, Center for Regional Economic Studies, The Korea Institute for International Economic Policy (KIEP)

Summary

The bilateral trade volume between the ROK and China's Northeast has gradually increased since 1992. In terms of trade relations, however, structural changes have appeared which this paper mainly focuses on. First, China's Northeast is losing its attraction as an export partner vis-à-vis the ROK. This trend appears notably in Liaoning Province, the largest economy among the three northeastern provinces. Second, ROK investment in the service sector in China's Northeast has accelerated. From 2009 to 2011, the total rate of ROK investment in the service sector in China's Northeast reached 62.3%, far surpassing its rate for manufacturing industry (34.0%). The transition of the ROK's main investment sectors in the region shows that there still exists potential for further economic cooperation between the ROK and China's Northeast. Lastly, this article recommends policy suggestions to stimulate trade relations in the region. The ROK needs to recognize the position of China's Northeast as an import market and utilize items, such as grains, in which China's Northeast specializes. Also, other trade partners in China's Northeast—Jilin Province and Heilongjiang Province—need to be paid more attention by the ROK government. Finally, the ROK authorities need to diversify policy angles regarding China's Northeast. As China's Northeast is surrounded by key stakeholders, such as Russia, the DPRK and Japan—significant political actors in Northeast Asia—policymakers are often trapped in the political dimension and overlook the ample room for expanding domestic markets in the region. It is a time when a new framework is required to open up a new phase in economic relations between the two sides.

[Translated by ERINA]

会議・視察報告

第13回大図們江イニシアチブ（GTI）諮問委員会

ERINA 調査研究部主任研究員 新井洋史

中朝国境を流れ、最後は朝露国境として日本海にそぐ図們江（朝鮮名：豆満江）の下流域については、国際協力により地域開発を進める取組が1990年代に始められた。2000年代半ばには、対象地域を図們江下流域から北東アジアの広域に拡大するとともに、点の地域開発から面での多角的な地域協力へと性格を変えて、新たに「大図們江イニシアチブ（Greater Tumen Initiative: GTI）」というタイトルの下で、関係国が協力を進めている。

GTIの最高意思決定機関は、メンバー国（現在は、中国、モンゴル、韓国、ロシア）の通商・貿易担当省庁次官級で構成される「諮問委員会」である。諮問委員会は、原則として毎年、メンバー国持ち回りで開催されており、今年は10月10日、ロシア・ウラジオストクで開催された。

今回の会議での注目される取り組みは2つあった。1つは輸出入銀行や開発銀行との連携であり、もう1つは地方政府との連携である。そのほか、運輸や観光分野での協力の進展状況の報告や、「戦略行動計画」の見直し、独立した法人格への移行準備などが議論された。以下では、これらの点について、若干の背景説明等も合わせて述べる。

各メンバー国の輸出入銀行及び開発銀行との連携は、北東アジア地域におけるさまざまなプロジェクトの資金調達問題を解決するための方策の一つとして、図們江事務局が検討してきたものだ。具体的には、中国の輸出入銀行、モンゴルの開発銀行、韓国の輸出入銀行及びロシアの開発・対外経済銀行の4行による協議会（Association）の設立が検討されている。今回の会議では、このうちロシアを除く3行が、協議会の設立に向けた覚書に調印した。この文書自体は、設立準備を進めていく意向を確認し合ったものであり、あくまでも準備プロセスの一段階にすぎない。なお、図們江事務局の説明によれば、ロシア側も基本的には賛同しており、今回には間に合わなかったが、近く同覚書に調印することが期待できるとのことだった。

北東アジア地域における開発金融の姿を巡っては、古くから北東アジア開発銀行設立構想が提起されてきたほか、基金を設置する案なども議論されている。GTIが実現しようとしている協議会の詳細は必ずしも明確ではないが、基本的には緩やかな協力を目指していると言える。その分だけ

設立に向けた利害調整は容易で、比較的早期の立ち上げが期待できる。他方、実効性がどれだけあるかについては、やや不安がないわけでもない。その意味で、今回の覚書に基づいた今後の具体的な協議の中での議論にゆだねられている部分は多いと思う。このように現段階では不透明な部分もあるが、ゆるやかな形での開発金融協力の枠組みの構築が視野に入ってきたことは、GTIの努力の成果の一つと言えよう。

次に、地方政府との連携について述べたい。そもそも、GTIは地方間の国際協力の推進を図ることを主たる目的とする協力の枠組みである。現在の対象地域は、中国東北部、モンゴル東部、韓国東海岸、ロシア沿海地方となっている。各国中央政府だけでは、必ずしも各地域の抱える課題や地域プロジェクトの進捗状況などが十分把握しきれないこともあり、GTIでは「当事者」である地方政府との連携の強化を図ってきている。これまでも、2010年の長春（中国）での第11回諮問委員会、2011年のピョンチャン（韓国）での第12回諮問委員会の開催に合わせ、地方政府の代表者をスピーカーに招いた「地域開発フォーラム」を開催して、協力機運を盛り上げてきた。その結果、GTIの枠内に地方協力委員会（Local Cooperation Committee）を設置することが、第12回諮問委員会で決定された。これを受けて、2012年中に、設立準備会合及び設立会合を開催する段取りとなっていたが、その作業は遅れている。他方、2011年12月には人材育成ワークショップが、いわば先行プロジェクト的な形で実施された。今回の第13回諮問委員会では、こうした進展状況に関する事務局報告がなされたとともに、第2セッションの一部を北東アジア地方政府との共同セッションと位置づけ、沿海地方、ハバロフスク地方（以上、ロシア）、黒龍江省、内モンゴル自治区、吉林省（以上、中国）、新潟県、鳥取県（以上、日本）及び江原道（韓国）の代表者が各地域における北東アジア協力の取組状況などの報告を行った。

第13回諮問委員会以降の状況を補足説明すると、遅れていた地方協力委員会の設立作業の一環として、11月2日に北京で準備会合が開催された。2013年早々にも設立会合の開催にこぎつけられる見通しとなった模様だ。この準備会

合には、新潟県及び鳥取県の関係者も参加した。両県は、最近のGTIの各種会合にもたびたび参加しており、GTIとの連携に前向きな県である。ただし、個別の会合への単発的な参加と地方協力委員会という組織の構成員となることとの間には関与の程度に違いがあり、国自体がメンバー国でないという状況下での両県と同委員会への参加をどう整理するかは難しい問題をはらんでいる。また、別の課題として、既存の各種の地方政府間協力の枠組み（北東アジア自治体連合、北東アジア地方政府サミット等）との役割分担や整合性をいかに確保するかという問題もある。各国中央政府との接点を持ちうるというGTIの特徴を活かしていく取組が必要だと考える。

このほかに第13回諮問委員会で取り上げられた話題としては、運輸及び観光分野を中心とした各重点分野でのプロジェクトの進展状況の報告があった。運輸分野では、筆者も参加して進められている輸送回廊に関する総合調査の途中経過報告が行われた。調査メンバーの一人である極東海運研究所のミハイル・ホロシャ部長が、調査趣旨のほか、各国のハード・ソフトのインフラ概況やボトルネックなど、主に現状評価にかかる調査結果の要点を説明した。本調査は、さらに推進戦略や行動計画に関する各国政府への提言などを追加したうえで、2012年中に最終報告書を取りまとめることとしている。観光分野に関しては、多目的地周遊型観光の推進に関するプロジェクトが進められており、同プロジェクトのコーディネーターを務める国際コンサルタントのジェームス・マクレガー氏が進捗状況の説明を行った。同プロジェクトでは、日本も含めたモデルコースを設定した上で、ファムトリップを実施することとなっている。

今回の会議では、GTI戦略行動計画の見直しも議論された。現行の戦略行動計画は、以前の図們江地域開発プログラム（TRADP）からGTIに衣替えした2005年に策定されたもので、2006～2015年を対象年度としているが、現状と

は合わない部分もあり、この際2012～2015年を対象として見直すことになったものである。全体として、目標・目的とその実現のための取組の方向性との関係が整理された。従来の文書は、「戦略」と銘打ちながらも個別プロジェクトの記述等も含まれていたため、北朝鮮の脱退などの状況変化に対応しきれない部分があったが、こうした問題は解決された。また、GTIの重点分野とされている「運輸」、「観光」、「エネルギー」、「投資」、「環境」のうち、投資分野については貿易促進も加えて「投資・貿易」となり、範囲が広がった。さらに、他の機関等との協力関係を強化することも明確に打ち出された。国際機関、北東アジア域内国である日本及び北朝鮮、官民連携、地方政府といった対象を列挙して、連携を図っていくこととなった。

もう一つのGTIの懸案は、独立した法人格への移行である。これまでの議論を通じ、メンバー各国は、基本方針として移行をめざすことには合意しており、今後、具体的な諸手続きに着手することになる。2015年までの3年間に移行を完了させることを目標に、そこに至るロードマップや法的基盤となる文書を次回諮問委員会までに策定することが決定された。

2013年の事業としては、陸海複合一貫輸送ルートのレビュー、観光データベースの構築、韓国・江原道におけるGTI貿易・投資フェアの開催などが予定されている。第14回GTI諮問委員会は、2013年にモンゴルで開催される。

以上、やや事務的な内容の会議報告となってしまったが、会議の性格からして致し方ないものとする。これまでの通例では、諮問委員会の開催に併せて別途1日程度を確保して公開フォーラムを開催していたが、今回はそれが無かった。その分、やや物足りない感じを持ったことは確かである。他方、GTIの組織体制と事務処理能力は充実してきており、良い意味でも悪い意味でも国際機関の体裁が整いつつあるとの印象を強く感じた。

北東アジア動向分析

中国

低調に成長する中国経済

国家統計局の発表によると、2012年1～9月の国内総生産（GDP）は前年同期比7.7%増の35兆3,480億元に達した。第1四半期のGDPは同8.1%増、第2四半期は同7.6%増と3年ぶりに8%台を下回り、さらに第3四半期は同7.4%増と7四半期連続低下の数値となり、中国経済は減速傾向が続く、低調に成長していると言える。しかし、GDP伸び率を見ると、2012年第1四半期は同1.5ポイント、第2四半期は同2.0ポイント、第3四半期は同2.2ポイント上回り、順調に上昇している。中国国内では、経済減速に底入れとの見方も出ている。

1～9月の一定規模以上の工業企業（年間売上高2,000万元以上）の付加価値の増加率は前年同期比10.0%増で、1～6月期と比較して伸び率は0.5ポイント下回った。うち国有及び国有持株企業は同6.3%増、集団企業は同7.6%増、株式企業は同11.8%増、外資系企業は同6.0%増となり、株式企業の増加は顕著であった。業種別でみると、重工業は同9.7%増、軽工業は同10.4%増となった。

1～9月の固定資産投資額（農家を除く）は前年同期比20.5%増の25兆6,933億元となり、1～6月期と比較して伸び率は0.1ポイント上回った。うち、第1次産業の投資額は同32.2%増、第2次産業は同22.4%増、第3次産業は同19.4%増となった。地域別でみると、東部地域は同18.4%増、中部地域は同25.8%増、西部地域は同24.1%増となり、中部と西部地域の成長率が高かった。中央政府関連投資は同2.3%増の1兆3,609億元、地方政府関連投資は同21.8%増の24兆3,324億元に達し、地方のほうが圧倒的に大きい。

個人消費を示す1～9月の社会消費品小売総額は14兆9,422億元で、前年同期比14.1%増となった。うち、都市部は同14.0%増の12兆9,332億元、農村部は同14.4%増2兆90億元であった。一定規模以上の企業（年間売上高2,000万元以上の卸売企業、500万元以上の小売企業及び200万元以上の宿泊・飲食関連企業）の消費品小売総額は7兆1,580億元で、同14.4%増となった。販売額が大きく伸びたのは家具（26.2%）、通信機材（33.3%）、建築・内装材料（25.7%）であった。

消費者物価指数（CPI）については、1～9月は前年同期比2.8%上昇し、うち都市部が同2.9%、農村部が同2.7%とそれぞれ上昇した。項目別でみると、食品（同5.5%上昇）、タバコ・酒類（同3.3%上昇）、医療保健・個人用品（同2.1%上昇）、娯楽・教育文化用品及びサービス（同0.3%上昇）、

住居関連（同2.0%上昇）、衣類（同3.4%上昇）、家庭設備用品・メンテナンスサービス（同2.1%上昇）、交通・通信（同0.2%下落）と上昇傾向が続いている項目が多く、特に生活に密接に関係している食品の上昇率が高かった。

対外貿易に関しては、1～9月の貿易額は前年同期比6.2%増の2兆8,425億ドルに達し、うち輸出額は同7.4%増の1兆4,954億ドル、輸入額は同4.8%増の1兆3,471億ドルとなった。輸出入ともに伸び率が大幅に下回った。貿易収支は同39.1%増の1,483億ドルの黒字となり、大幅に増加した。外資導入については、1～9月の新規認可件数（銀行・証券業を除く）は前年同期比11.67%減の18,025件で、対中直接投資額（実行ベース、以下同じ）は同3.76%減の834.23億ドルとなった。外資導入件数及び金額はともに減少している。アジア10カ国・地域（香港、マカオ、台湾、日本、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、韓国）からの投資額が同4.93%減、アメリカは同0.63%減、EU（27カ国）は同6.25%減となった。

年内公表と言われる所得分配改革案

政府系機関紙の人民日報は、2012年10月にインターネットによるアンケート調査を実施し、「生活レベルの向上に対して最も期待している」ことについて質問したところ、半数を超える人から「より公平な所得分配の実現」との回答があった。「所得は経済成長に伴って不断に増加する」と回答した人も46.1%に達した（人民日報2012年10月30日）。所得分配の格差は、最も注目される社会問題になっている。

温家宝首相は10月17日の國務院常務会議で、年内に所得分配制度改革案を策定することを明らかにした。8年間にわたり議論されてきた所得分配改革案は初めて具体的なスケジュールが公表された。改革案は都市農村格差、業種間格差、地域間格差をどのように縮小させ、具体的な数値目標や税制・所得制度の整備をどこまで取り入れるかが焦点となる。

問題は、中央政府は改革の全体案を策定するが、その具体的な実施について、地方政府がどのようにアクションプランを策定し、実施していくかということである。また、所得分配改革は単なる国の指令で行われるものではなく、所得申告や資産公開等の分配の基盤となる基礎的制度的整備も不可欠である。年度内公表と言われる所得分配制度改革の全体案の内容とその施行状況を注目していきたい。

（ERINA調査研究部研究員 穆亮芋）

| | 単位 | 2003年 | 2004年 | 2005年 | 2006年 | 2007年 | 2008年 | 2009年 | 2010年 | 2011年 | 2012年1-9月 |
|-----------------|-----|-------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-----------|
| 実質GDP成長率 | % | 10.0 | 10.1 | 11.3 | 12.7 | 14.2 | 9.6 | 9.2 | 10.4 | 9.2 | 7.7 |
| 工業総生産伸び率（付加価値額） | % | 17.0 | 16.7 | 16.4 | 16.6 | 18.5 | 12.9 | 11.0 | 15.7 | 10.7 | 10.0 |
| 固定資産投資伸び率 | % | 27.7 | 26.8 | 26.0 | 23.9 | 24.8 | 25.9 | 30.1 | 23.8 | 23.6 | 20.5 |
| 社会消費品小売総額伸び率 | % | 9.1 | 13.3 | 12.9 | 13.7 | 16.8 | 21.6 | 15.5 | 18.3 | 17.1 | 14.1 |
| 消費価格上昇率 | % | 1.2 | 3.9 | 1.8 | 1.5 | 4.8 | 5.9 | ▲ 0.7 | 3.3 | 5.4 | 2.8 |
| 輸出入収支 | 億ドル | 255 | 321 | 1,020 | 1,775 | 2,618 | 2,981 | 1,961 | 1,831 | 1,551 | 1,483 |
| 輸出伸び率 | % | 34.6 | 35.4 | 28.4 | 27.2 | 25.7 | 17.5 | ▲ 16.0 | 31.3 | 20.3 | 7.4 |
| 輸入伸び率 | % | 39.8 | 36.0 | 17.6 | 19.9 | 20.8 | 18.5 | ▲ 11.2 | 38.7 | 24.9 | 4.8 |
| 直接投資額伸び率（実行ベース） | % | 1.4 | 13.3 | ▲ 0.5 | 4.5 | 18.6 | 23.6 | ▲ 2.6 | 17.4 | 9.7 | ▲ 3.8 |
| 外貨準備高 | 億ドル | 4,033 | 6,099 | 8,189 | 10,663 | 15,282 | 19,460 | 23,992 | 28,473 | 31,811 | 32,851 |

（注）

・前年比・前年同期比。

・工業総生産伸び率は国有企業及び年間売上高500万元以上の非国有企業の合計のみ。しかし、2011年からは年間売上高2,000万円以上の企業の合計である（以下同じ）。

・外貨準備高は各年末、月末の数値。

・2006年以降の直接投資には、銀行・証券業を除く。

・2009年の実質GDP成長率は、中国国家統計局が2011年1月10日に発表した数値。2010年の実質GDP成長率は、中国国家統計局が2011年9月7日に発表した数値。

（出所）中国国家统计局、中国商務部、国家外匯管理局等の資料より作成

ロシア

中程度の成長を維持するロシア経済

ロシアの2012年上半期の実質GDP成長率は前年同期比4.5%であり、3～4%台の中成長というリーマンショック以降の中期的なトレンドを維持していると言える。家計の実質可処分所得が堅調であることに加え、好調な消費者金融の伸びや消費性向の拡大などもあって、小売売上高は比較的大きな伸びを示している。8月1日時点の個人向け融資残高は、年初比で21.7%も増加した。

足元の不安定な要素は、消費者物価上昇率が高まってきていることである。ロシア国内の干ばつや世界的な天候不順により穀物価格が上昇したことなどが物価に影響している。また、9月には一連の光熱水費の料金の引き上げが行われた。欧州の経済危機問題にもかかわらず、これまでのところロシアの消費者心理は比較的明るいようだが、物価動向が消費者心理を冷やすことがないかどうか、特に耐久消費財の売りに影響を及ぼすことがないか注意が必要だ。

対外貿易面では、輸出の伸びが輸入の伸びをやや上回っているため、黒字幅は広がる傾向にある。主要な輸出品目であるエネルギー資源についてみると、1～8月の原油輸出は価格ベースで前年同期比0.6%の微増であったが、絶対量は1.7%減少した。これに対して石油製品は、金額で同10.0%、量で同5.9%増加した。これに天然ガスを加えた3品目で、同期間の輸出総額の66.8%を占めた。輸入では、乗用車の輸入額が同14.5%増を記録した。

WTO加盟

18年に及ぶ長期の交渉を経て、8月22日、ロシアは正式にWTO加盟国となった。日本からの主要輸出品目である自動車の関税が7年かけて段階的に引き下げられるなど、全体で平均3%の関税引き下げが計画されている。ただし、多くの品目については関税率の変更は行われない。した

がって、輸入品との競合による影響を受ける産業は一部に限られると見られる。

ロシア政府が2003～2004年に実施した調査では、WTO加盟はGDPを0.5%押し下げる影響があるとの結果だった。現時点ではかなり経済状況が変わっているため、この調査結果が妥当するかどうかは疑問である。いずれにせよ、ロシア政府は、輸入品との競合による経済全体への影響は軽微であり、鉄鋼など一部の輸出産業では諸外国の輸入制限措置を改善を求めることができるなどのメリットがあるとしている。さらに、ビジネス環境の改善による投資の増加などのメリットが大きいものと期待している。

中期経済見通し

経済発展省は、毎年9月に3年間の中期経済見通しを発表している。これは、9月から年末にかけて国会で審議される中期予算の議論の前提材料となるものである。

それによれば、2013年から3年間のGDP成長率は、それぞれ3.7%、4.3%及び4.5%であると予測している。これは、過去3年間の成長率とほぼ同じレベルである。

この間、固定資本投資は毎年7%台の増加が続くとしており、積極的な投資活動が続くことを想定している。また、小売売上高も5%台という比較的高い増加率が続く予測である。

これに対して、鉱工業生産は3年続けて3.7%というやや低めの予測値となっている。その背景として、機械・設備などの鉱工業製品の輸入が大幅に増えることを見込んでいる。その結果、2015年の輸入総額は4,400億ドルに達し、対2012年比28%の大幅増となる。同期間の輸出額の増加率は2%にとどまる見通しで、貿易黒字額は2,000億ドルから1,000億ドルへと半減する。なお、輸出額、ひいては国家経済に大きな影響を与える油価（代表的指標の“Urals”）については、年平均が97～104ドル/バレルという現状よりやや低めの水準に収まるとのやや固めの数字となっている。

(ERINA調査研究部主任研究員 新井洋史)

(対前年同期比)

| | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | | | | |
|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-----|
| | | | | | | | 1Q | 2Q | 上半期 | 7月 | 8月 |
| 実質GDP | 8.2 | 8.5 | 5.2 | ▲7.8 | 4.3 | 4.3 | 4.9 | 4.0 | 4.5 | — | — |
| 固定資本投資 | 16.7 | 22.7 | 9.9 | ▲16.2 | 6.0 | 8.3 | 16.6 | 8.5 | 11.6 | 3.8 | 2.3 |
| 鉱工業生産高 | 6.3 | 6.8 | 0.6 | ▲9.3 | 8.2 | 4.7 | 4.0 | 2.3 | 3.1 | 3.4 | 2.1 |
| 小売売上高 | 14.1 | 16.1 | 13.5 | ▲4.9 | 6.3 | 7.0 | 7.6 | 7.0 | 7.3 | 5.4 | 4.3 |
| 実質可処分所得 | 13.5 | 12.1 | 2.3 | 2.1 | 4.2 | 0.8 | 2.4 | 4.0 | 3.2 | 2.2 | 7.2 |
| 消費者物価* | 9.0 | 11.9 | 13.3 | 8.8 | 8.8 | 6.1 | 1.5 | 3.2 | 3.2 | 4.5 | 4.6 |
| 工業生産者物価* | 10.4 | 25.1 | ▲7.0 | 13.9 | 16.7 | 12.0 | 2.9 | 0.3 | 0.3 | ▲0.9 | 4.2 |
| 輸出額 (十億ドル)** | 301.2 | 351.9 | 467.6 | 301.8 | 397.1 | 516.9 | 131.6 | 130.0 | 261.6 | 40.6 | — |
| 輸入額 (十億ドル)** | 137.8 | 199.7 | 267.1 | 167.5 | 228.9 | 306.1 | 68.5 | 76.7 | 145.2 | 28.2 | — |

*前年12月比。

**税関統計ベース。

***斜体は暫定(推計)値。

出所:『ロシアの社会経済情勢(2012年8月号)』ほか、ロシア連邦国家統計庁発行統計資料

モンゴル

鉱物資源開発を主要因としたモンゴル経済の成長のペースは、2012年に入り鈍化した。これは世界経済の成長見通しの低下、特に中国経済の停滞が、モンゴル経済が強く依存している主要輸出品の価格を引き下げたためである。輸出額の低下により、第3四半期の国際収支の赤字は拡大した。第3四半期の鉱工業生産額は急速な低下を見せ、9月にはマイナスとなった。登録失業者数は第3四半期の末に増加し始めている。第3四半期のインフレ率は前年同期比二桁の上昇で、モンゴル銀行（中央銀行）の目標値を大幅に上回った。第3四半期の国家財政収支はわずかに黒字を記録したが、通年では史上最高の赤字となることが予測されている。

マクロ経済指標

第3四半期の実質成長率は前年同期比5.6%で、前期の同11.0%から低下した。また国家統計局が試行的に推計した実質GDPの季節調整値では前期比1.1%の伸びとなった。2012年1～9月の実質成長率は10.2%で、国家統計局は通年の成長率を12.4%と予測している。

2012年第3四半期の鉱工業生産額は前年同期比2.2%増で、前期の同8.6%から低下した。さらに9月には鉱業生産の低下により同▲3.0%とマイナスを記録した。9月には原油採掘を除く全ての鉱業部門の生産が前年同期を下回った。鉱業生産額の低下は中国の需要減少による国際市場価格の低下によるものである。しかし、1～9月期の鉱工業生産額は前年同期比6.4%増であった。部門別では、製造業が7.6%、公益事業（電力・熱供給・水道）が4.0%、それぞれ前年同期を上回った。

2012年9月末の登録失業者数は44,095人で、8月末の43,176人を記録した後、増加している。しかし経済の拡大にも関わらず、これらの数字は前年同期を9月末で6.9%、8月末で8.3%、それぞれ上回っている。労働市場における技能の需給ミスマッチが、この状況の主要な理由と考えられる。登録失業者の65.3%が15～34歳の年齢で、31.3%が大学及び短大卒、39.5%が高校卒となっている。

2012年第3四半期の消費者物価上昇率は前年同期比14.8%で、前期の同15.4%から低下している。しかし部門別に見ると9月末で、通信・郵便サービスを除く全ての部門において前年同期比で価格は上昇している。例としては娯楽・文化は2.4%であった。一方、アルコール飲料及び

タバコは同部門に対する支出税の増税により48.6%の上昇を記録している。

2012年第3四半期の平均対米ドル為替レートは、1ドル＝1,368トゥグルグで、前期の同1,320トゥグルグから減価した。第3四半期においてトゥグルグは、全ての主要通貨に対して減価している。

2012年第3四半期の国家財政収支は8月の黒字により、170億トゥグルグとわずかながら黒字を記録した。となり、しかしこの黒字は、総選挙後の政府活動の一時的な休止による、資本支出の臨時的な減少によるものである。8月の資本支出は7月のほぼ半分に止まった。1～9月の財政収支の赤字は5,580億トゥグルグで、これは名目GDPの5.6%に相当する。

2012年9月末時点の外貨準備高は25.2億ドルで、6月末の27.2億ドルから減少した。しかしこれは前年同期を1.1億ドル上回っている。

外国貿易

輸出額の低下により、2012年第3四半期のモンゴルの貿易収支の赤字は史上最高の9.5億ドルとなり、1～9月の赤字は20億ドルに達した。1～9月において輸出は前年同期比6.1%減、輸入は同8.7%増であった。モンゴルの主要輸出品目、石炭、銅精鉱、錫精鉱などの価格は同期に前年同期比で10～24%下落している。

2012年1～9月期において、モンゴルの貿易相手先は113カ国であった。中国は貿易総額の57%、輸出の93.4%、輸入の28.4%をそれぞれ占めた。通例どおり、鉱産物は輸出の大半、89.1%を占めた。

通貨及び金融

2012年9月末の貨幣供給量(M2)は7.1兆トゥグルグで、前年同期を17.1%上回った。内訳は国内通貨貯蓄預金が43.4%、外貨貯蓄預金が21.0%、国内通貨要求払い預金が15.5%、外貨要求払い預金が12.3%、現金が7.8%であった。9月末において、国内通貨貯蓄預金は3.1兆トゥグルグ、外貨貯蓄預金は1.5兆トゥグルグで、これは前年同期をそれぞれ11.1%、67.5%上回っている。

9月末において、融資残高は6.9兆トゥグルグで、そのうち54.3%は民間部門向け、また44.4%は個人向けとなっている。不良債権は融資全体の4.5%で、前年同期から14.3%減少している。

(ERINA調査研究部主任研究員 Sh. エンクバヤル)

| | 2005年 | 2006年 | 2007年 | 2008年 | 2009年 | 2010年 | 2011年 | 2012年1Q | 2011年2Q | 2012年3Q | 2012年8月 | 9月 | 1-9月 |
|--------------------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|---------|---------|---------|---------|-------|--------|
| 実質GDP成長率(対前年同期比:%) | 7.3 | 8.6 | 10.2 | 8.9 | ▲1.3 | 6.4 | 17.5 | 16.5 | 11.0 | 5.6 | — | — | 10.2 |
| 鉱工業生産額(対前年同期比:%) | ▲4.2 | 9.1 | 9.7 | 2.8 | ▲3.3 | 10.0 | 9.7 | 8.9 | 8.6 | 2.2 | 2.0 | ▲3.0 | 6.4 |
| 消費者物価上昇率(対前年同期比:%) | 9.5 | 6.0 | 15.1 | 22.1 | 4.2 | 13.0 | 10.2 | 12.6 | 15.4 | 14.8 | 14.9 | 14.8 | 14.2 |
| 登録失業者(千人) | 32.9 | 32.9 | 29.9 | 29.8 | 38.1 | 38.3 | 57.2 | 50.1 | 47.5 | 44.1 | 43.2 | 44.1 | 44.1 |
| 対ドル為替レート(トゥグルグ) | 1,205 | 1,180 | 1,170 | 1,169 | 1,437 | 1,356 | 1,244 | 1,356 | 1,320 | 1,368 | 1,364 | 1,395 | 1,348 |
| 貿易収支(百万USドル) | ▲113 | 107 | ▲114 | ▲710 | ▲229 | ▲292 | ▲1,747 | ▲580 | ▲480 | ▲954 | ▲358 | ▲226 | ▲2,014 |
| 輸出(百万USドル) | 1,064 | 1,542 | 1,948 | 2,535 | 1,885 | 2,909 | 4,780 | 878 | 1,375 | 979 | 334 | 360 | 3,232 |
| 輸入(百万USドル) | 1,177 | 1,435 | 2,062 | 3,245 | 2,138 | 3,200 | 6,527 | 1,458 | 1,855 | 1,933 | 692 | 586 | 5,246 |
| 国家財政収支(十億トゥグルグ) | 73 | 123 | 133 | ▲306 | ▲329 | 2 | ▲632 | ▲56 | ▲519 | 17 | 117 | ▲75 | ▲558 |
| 国内貨物輸送(百万トンキロ) | 10,268 | 9,693 | 9,030 | 9,051 | 8,981 | 12,125 | 16,300 | 3,533 | 4,004 | 4,115 | — | — | 11,652 |
| 国内鉄道貨物輸送(百万トンキロ) | 9,948 | 9,226 | 8,361 | 8,261 | 7,817 | 10,287 | 11,382 | 2,995 | 3,055 | 3,045 | 1,029 | 940 | 9,095 |
| 成畜死亡数(千頭) | 677 | 476 | 294 | 1,641 | 1,733 | 10,320 | 651 | 258 | 248 | 22 | — | — | 297 |

(注) 消費者物価上昇率、登録失業者数は期末値、為替レートは期中平均値。

(出所) モンゴル国家統計局「モンゴル統計年鑑」、「モンゴル統計月報」各号ほか

韓国

マクロ経済動向と展望

韓国銀行（中央銀行）が10月26日に公表した、2012年第3四半期の実質GDPの成長率（速報値）は、季節調整値で前期比0.2%（年率換算0.8%）で前期の同0.3%からさらに低下し、景気の低迷を示した。需要項目別に見ると内需では最終消費支出は同0.7%で、前期の同0.2%から上昇した。固定資本形成は前期の▲1.5%で前期に続いてマイナスとなった。その内訳では、設備投資が▲4.3%で前期に続いてマイナスとなった。

鉱工業生産指数の第3四半期の伸び率は、季節調整値で前期比▲2.0%で、前期に続いてマイナスとなった。月次では、7月は前期比▲1.8%で、8月は同▲0.9%とマイナスが続き、9月に同0.8%とプラスに転じている。

失業率（季節調整値）は、7月は3.1%、8月は3.0%、9月は2.9%と推移している。

貿易収支（IMF方式）は、7月は53.4億ドル、8月は25.1億ドル、9月は56.4億ドルのそれぞれ黒字となった。

対ドル為替レートは、7月は1ドル＝1,142ウォンで、8月は同1,132ウォン、9月は同1,124ウォンと、第2四半期に比してややウォン高で推移している。

消費者物価上昇率は7月の前年同月比1.5%から、8月は同1.2%、7月は同2.0%と第2四半期に比して低めに推移している。生産者物価上昇率は7月の前年同月比▲0.1%とマイナスを記録した後、8月は同0.3%と、9月は同1.0%とやはり低めに推移している。

韓国銀行が10月11日に発表した経済見通しによると、2012年の実質成長率は2.4%で、7月に発表した前回予測（以下前回予測）の3.0%から下方修正された。また2013年の成長率は3.2%で、やはり前回予測の3.8%から下方修正されている。

2012年の成長率を需要項目別に見ると、民間消費が1.7%で、前回予測の2.2%から下方修正されている。また建設投資は0.2%で前回予測の1.6%から大きく下方修正された。

設備投資は前回予測では前年実績の3.7%から5.8%に拡大するとしていたが、今回は1.5%と大幅に下方修正された。一方、外需では輸出が前回予測の4.4%から3.4%に低下するとしている。但し、輸入の増加率はそれ以上に低下するため、経常収支の黒字は維持されるとしている。

また、消費者物価上昇率は前回予測の2.7%から、さらに低い2.3%に低下すると予測している。失業率は前回予測と変わらず、2011年の3.4%から、3.3%に低下すると予測している。

前回予測も4月時点の前々回予測から大きな下方修正であったが、どちらかと言えばその主な要因は外需の伸びの低下であった。一方で今回は、消費、設備投資、建設投資といった内需の伸びが大きく下方修正されており、韓国経済の景気後退の深刻さが浮き彫りになっている。4月、7月、10月と3カ月毎の短い期間に予測の下方修正が繰り返されたことは、韓国経済の急速な景気後退を物語っているといえよう。

大統領選挙の動向

12月19日に投票が行われる大統領選は、これまでの世論調査によれば支持率では、保守派の与党セヌリ党の朴槿恵候補が、革新系無所属で元ITベンチャー企業経営者の安哲秀候補、革新派の野党民主統合党の文在寅候補をリードする形で推移してきた。

こうした中、11月6日、安、文両候補は、革新系候補の一本化に向けた会談を行い、二人のどちらかを候補とすることで合意した。11月5日時点の世論調査では、2位の安、3位の文、両氏の支持率を単純合計すれば、朴氏を上回る。一本化が実現すれば形勢が逆転される可能性が出てきている。しかし、予備選挙など、一本化の具体的方法については今後の協議で詰めることとされており、調整が難航する可能性も大きい。韓国の大統領選ではこれまでも、陣営間の合従連衡が選挙直前に破綻することも起きており、選挙本番までは動向を注視する必要がある。

（ERINA調査研究部主任研究員 中島朋義）

| | 2007年 | 2008年 | 2009年 | 2010年 | 2011年 | 11年10-12月 | 12年1-3月 | 4-6月 | 7-9月 | 12年7月 | 8月 | 9月 |
|-----------------------|---------|---------|---------|---------|---------|-----------|---------|---------|---------|--------|--------|--------|
| 実質国内総生産 (%) | 5.1 | 2.3 | 0.3 | 6.3 | 3.6 | 0.3 | 0.9 | 0.3 | 0.2 | - | - | - |
| 最終消費支出 (%) | 5.1 | 2.0 | 1.2 | 4.1 | 2.2 | ▲0.5 | 1.5 | 0.2 | 0.7 | - | - | - |
| 固定資本形成 (%) | 4.2 | ▲1.9 | ▲1.0 | 5.8 | ▲1.1 | ▲1.5 | 3.2 | ▲2.9 | ▲1.5 | - | - | - |
| 鉱工業生産指数 (%) | 6.9 | 3.4 | ▲0.1 | 19.5 | 9.5 | ▲0.1 | 2.2 | ▲0.1 | ▲2.0 | ▲1.8 | ▲0.9 | 0.8 |
| 失業率 (%) | 3.2 | 3.2 | 3.6 | 3.7 | 3.4 | 3.1 | 3.4 | 3.3 | 3.0 | 3.1 | 3.0 | 2.9 |
| 貿易収支 (百万USD) | 37,129 | 5,170 | 37,866 | 40,083 | 30,950 | 10,249 | 2,612 | 8,521 | 13,498 | 5,341 | 2,514 | 5,643 |
| 輸出 (百万USD) | 371,489 | 422,007 | 363,534 | 466,384 | 555,214 | 140,370 | 134,877 | 140,213 | 133,309 | 44,675 | 43,063 | 45,572 |
| 輸入 (百万USD) | 356,846 | 435,275 | 323,085 | 425,212 | 524,413 | 131,209 | 133,540 | 130,677 | 125,374 | 41,942 | 40,925 | 42,507 |
| 為替レート (ウォン/USD) | 929 | 1,103 | 1,276 | 1,156 | 1,108 | 1,144 | 1,131 | 1,152 | 1,133 | 1,142 | 1,132 | 1,124 |
| 生産者物価 (%) | 1.4 | 8.6 | ▲0.2 | 3.8 | 6.1 | 5.0 | 3.2 | 1.7 | 0.4 | ▲0.1 | 0.3 | 1.0 |
| 消費者物価 (%) | 2.2 | 4.2 | 2.6 | 2.9 | 4.0 | 4.0 | 3.0 | 2.4 | 1.6 | 1.5 | 1.2 | 2.0 |
| 株価指数 (1980.1.4 : 100) | 1,897 | 1,124 | 1,683 | 2,051 | 1,826 | 1,826 | 2,014 | 1,854 | 1,996 | 1,882 | 1,905 | 1,996 |

(注) 国内総生産、最終消費支出、固定資本形成、鉱工業生産指数は前期比伸び率、生産者物価、消費者物価は前年同期比伸び率、株価指数は期末値

国内総生産、最終消費支出、固定資本形成、鉱工業生産指数、失業率は季節調整値

国内総生産、最終消費支出、固定資本形成、生産者物価は2005年基準、消費者物価は2010年基準

貿易収支はIMF方式、輸出入は通関ベース

(出所) 韓国銀行、統計庁他

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）

地方工業に対する政策的重視

2012年8月31日付『朝鮮新報』（オンライン版）は、昌城連席会議（1962年8月7-8日、平安北道・昌城郡で開催された中央と地方党幹部及び経済活動家連席会議。地方の特性にふさわしい農・林・水産業と工業を自立発展させ、市・郡幹部が率先して難局を乗り越えようという内容だった）開催50周年を迎えた今年、昌城郡内の食品工場のすべての生産工程がオートメ化され、新たに建設された食品加工工場では肉類と野菜の加工品と飴・菓子などの加工食品、清涼飲料などが量産されるようになり、織物工場に新しい機械設備が導入されたほか、生産性の高い被服工場も新たに建設され、郡の住民たちの衣服問題を郡内で解決できるようになった、と報じた。同紙によると地方工業とは、「その地方の需要を満たす分の一般消費財を地方の原材料を用いて生産する工業を意味する。地方工業は、地方経済指導機関によって管理される」と定義しており、地方における自給自足的な工業体系に一部地域が先行しているとはいえない国家による投資が行われたことが推測される。

同年8月1日から公演が始まったマスゲーム「アリラン」でも、「すばらしい昌城」という一場面が挿入されているほか、同年9月27日付『労働新聞』には「昌城連席会議精神を具現するための重要な要求」と題する論説が発表されており、北朝鮮における国民生活向上において地方工業の強化が重要視されていることがわかる。

最高人民会議第12期第6回会議開催

2012年9月25日、平壤の万寿台議事堂で最高人民会議第12期第6回会議が開催された。会議には、金正恩第1委員長が出席した。会議では、全般的12年制義務教育を実施することに関する最高人民会議の法令（決議）が採択された。

この法令は、(1)北朝鮮のすべての地域で全般的12年制義務教育を実施する、(2)12年制義務教育の実施に関連して不足する教員を補充し、教員の資質を高め、教育方法を改善するための対策を立てる、(3)教育事業に対する国家投資を増やし、12年制義務教育の実施に必要な条件と環境を整える、(4)12年制義務教育を成功裏に実施するための行政的指導と法律的統制を強化する、(5)内閣と当該機関はこの法令を執行するための実務的対策を立てることを定めている。

2012年9月27日付『朝鮮新報』（オンライン版）によれば、2013～2014年度から6年制中学校を3年制初級中学校と3年制高級中学校に分けて運営し、4年制小学校を5年制小学校に転換する事業は必要な準備段階を経て2014～2015年度から始まり、2～3年かけて完全実施に移行されるという。

また同会議では、組織問題も討議された。最高人民会議常任委員会委員に、朝鮮労働党平安南道委員会の洪仁範責

任書記と青年同盟中央委員会の全勇男委員長が補欠として選任された。また、朝鮮労働党中央委員会の郭範基書記が予算委員会委員長に選出された。

平壤民俗公園が竣工

2012年10月5日付『朝鮮新報』（オンライン版）によれば、同年9月11日、平壤市大城山区域安鶴宮周辺に平壤民俗公園が竣工した。公園は、2008年に金正日総書記の発議で建設が開始されたもの。公園は、歴史総合教育区、歴史遺跡展示区、現代区、民俗村区、民俗遊戯区、白頭山および金剛山公園区域からなっている。

民俗村区には高句麗、渤海、高麗、朝鮮王朝時代の代表的な建築物や住居60余棟があり、民族料理のサービスも行われており、高句麗村では焼肉、朝鮮王朝村では安東クッス（麺）、松の実粥、緑豆チヂミなどを味わうことができるとのことである。また、高麗時期の迎賓館である東明館や、有名な封建官吏の家であった九十九間も復元されているが、これらは旅館、レストランとして利用されており、東明館では宮廷料理を楽しめる宴会場があり、宿泊室もあり、九十九間にも30余の宿泊室があるとのことである。

朝中農業部門の協力に関する覚書調印

2012年10月6日付『朝鮮新報』（オンライン版）によれば、北朝鮮農業省と中国農業部間の農業部門の協力に関する了解覚書が4日、平壤で調印された。調印式には、北朝鮮側から李石哲次官をはじめ農業省の幹部らが、中国側から牛盾副部長を団長とする中国農業部代表団メンバーと駐朝中国大使館員が参加した。

羅津～元汀道路開通式および朝中共同開発・共同管理羅先経済貿易地帯管理委員会発足

2012年10月31日付『朝鮮新報』（オンライン版）によれば、同年10月26日、羅先経済貿易地帯の羅津と元汀を結ぶ道路の開通式が10月26日、羅先市で行われた。北朝鮮側から羅先市人民委員会の曹正浩委員長（市長）、関係者と羅先市民が、中国側から張安順・吉林省延辺州党書記、吉林省人民政府の陳偉根副省長、田宝珍・清津駐在中国総領事ら関係者が参加した。

同日、朝中共同開発・共同管理羅先経済貿易地帯管理委員会の事務庁舎の起工式が行われた。吉林省人民政府の陳偉根副省長は、起工式を行うことになったのは中朝羅先経済貿易地帯協力事業が新たな段階に入ると示していると語った。一方、臨時事務室として利用される建物には、朝鮮語と中国語からなる「朝中共同開発・共同管理羅先経済貿易地帯管理委員会」という扁額がかけられ、その除幕式も行われた。

（ERINA調査研究部長・主任研究員 三村光弘）

研究所だより

イベントの開催

▽第5回日露エネルギー・環境対話イン新潟

平成24年11月22日(木)～23日(金)

会場：朱鷺メッセ2階スノーホール

主催：新潟県 新潟市 ERINA

参加者：約160名

編集後記

本特集の編集は去年と同様、時期的にまた「新潟国際ビジネスメッセ」の開催と重なりました。日中関係の緊張により、中国出展者の来日は相次ぎ中止になり、最終的には黒龍江省から3企業の出展のみとなりました。彼らの話を聞きますと、来日前に安全面で家族や友人に心配されて、いま日本に行って大丈夫かと何回も聞かれたそうです。しかし、実際に新潟に来ますと、緊張の雰囲気はまったくなく、終始気持ちよく出展できたとのこと。出展者の一人は、このことを黒龍江省の人々に伝えたいと言ってくれました。新潟とハルビンは飛行機で2時間、とても近いですが、国境を挟んでいるので人々の認識には大きなギャップが存在しています。そのギャップを少しでも埋めるために、彼らのように日中の間を行ったり来たりして、架け橋の役割を果たす人の存在は重要です。

今回の特集も、その観点を兼ねて編集しました。近年、中国では頻繁に地域発展戦略を策定していますが、その背景と実態については必ずしも明らかにされていません。地域発展戦略の件数も多く、原本を読んでもなかなか要領を掴めず、まして現場では効果的に施行されているかどうかも分からないところがあります。中国で生活し、その匂いを日常的に感じている人でなければ把握できないわけですが、この感覚のギャップは、日本で研究生活を送っている中国人の筆者にとっても大きいものがあります。それを乗り越えるために、頻繁に中国の地方に調査に行ったり、現地の専門家と議論して最新の論文を寄稿してもらったりする必要があります。そういう意味で、本特集が、地域発展戦略に関する日中の認識のギャップを埋めるための参考となれば幸いです。

本特集では、地域発展戦略の実態に関する鋭い分析が展開されていますが、論文の書き方については日中の研究者

の間に若干の違いが見られます。日本では、一つの課題に絞って深く掘り下げるのが一般的ですが、中国では、研究課題に関する全体の枠組みを提示し、それに関する多様な見方を広く浅く議論する傾向があります。日本であれば「しっかり論証されていない」と批判を受けるかもしれませんが、多面的なアプローチによる独特な見解と明確な提言が含まれている場合があります。本特集は、日中の研究スタイルの関連と相違の点についても留意しました。(M)

| | |
|-------|--|
| 発行人 | 西村可明 |
| 編集委員長 | 三村光弘 |
| 編集委員 | 新井洋史 中島朋義 Sh. エンクバヤル 朱永浩 穆堯芋 |
| 発行 | 公益財団法人環日本海経済研究所© The Economic Research Institute for Northeast Asia (ERINA) 〒950-0078 新潟市中央区万代島5番1号 万代島ビル13階 13F Bandaijima Bldg., 5-1 Bandaijima, Chuo-ku, Niigata City, 950-0078, JAPAN Tel: 025-290-5545 (代表) Fax: 025-249-7550 E-mail: webmaster@erina.or.jp URL: http://www.erina.or.jp/ |
| 発行日 | 2012年12月15日 |
| (お願い) | ERINA REPORTの送付先が変更になりましたら、 お知らせください。 |

禁無断転載